

2023年度 3月修了 修士論文

中国の女子専用ボクシングクラブに関する社会学的考察
—なぜ女性専用の場で「男らしい」スポーツをしているのか—

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科
スポーツ科学専攻 スポーツ文化研究領域

5022A053-4

孫 安琪

研究指導教員： 中澤 篤史 教授

第1章 研究の背景と問題の所在及び及び研究方法	1
第1節 研究の背景と問題の所在	1
第2節 先行研究の批判的検討	2
第1項 女子の身体やスポーツ行為とジェンダー秩序の相互関係に関する研究	2
第2項 性別とスポーツ空間に関する研究	4
第3項 「女らしさ」と「男らしさ」——スポーツの場におけるジェンダーコードに関する研究	9
第4項 先行研究の批判的検討	13
第3節 研究の目的と方法	14
第1項 本研究の目的	14
第2項 本研究の方法	14
第4節 本研究の構成	17
第2章 女子専用ボクシングジムへの選択要因に関する考察	20
第1節 論的枠組みの提示	20
第1項 スポーツ／運動アイデンティティ理論	21
第2項 本研究の対象に合わせた元枠組みへの補足	21
第2節 インタビュー利用者Aと利用者Cのケーススタディ	23
第1項 利用者Aのケース	25
第2項 利用者Cのケース	31
第3節 補足としての理論的枠組みの要素に当てはまる他のインタビュー達の語り	36
第4節 本章の結論	44
第3章 女子専用ボクシングジムにおけるジェンダー規範の考察	46
第1節 インタビュー協力者達の身体のリトウとその表現	47
第2節 ジェンダーによる規範からの考察における分析用枠組みの提示	57
第3節 従来のジェンダー規範の変容に当てはまること	59
第1項 規範的な女らしさとしての身体の脆弱性への対抗	59
第2項 女性同士の助け合いの場における「活動する主体」という主体性の体現	68
第3項 性的な主体と自認すること	69
第4節 従来のジェンダー規範の再生産に当てはまること	71
第1項 最初は相手の力を過小評価しがち傾向があること——自分が「力持ち」だと認識しているが、ほとんどの女性が力が弱いと思い込む	71
第2項 女性気質を「劣等的なもの」としてに捉える状況の存在	71
第3項 「フェミニズム」という言葉への誤解と回避——身体フェミニズムの未達成	74
第5節 本章の結論	76
第4章 総合的考察	78
第1節 本研究の総括	78
第2節 本研究の総合的考察	79
第1項 女性専用のフィットネス空間の存在意義——第一性としての女性達	79
第2項 女性専用のフィットネス空間の限界その1——現実（ある程度）で妥協する産物である女子ボクシングジム	81
第3項 女性専用のフィットネス空間の限界その2——「男性不在の空間を強制的に作り出すことで、女性が活動の絶対的主体となれるように支援する」という方法は持続可能か	82

第4項	性別分離主義は長期的な解決策ではない……………	85
第5項	「規律化された身体」か「反抗の身体」……………	86
第6項	従来のジェンダー規範は「固定化」されているか「緩和」されているか……………	87
第7項	ジェンダーの二元構造は「固定化」されているか「緩和」されているか……………	89
第8項	主要研究目的以外の示唆……………	90
第3節	本研究の結論……………	92
第4節	本研究の限界及び今後の課題と展望……………	93
第1項	本研究の限界……………	93
第2項	今後の課題と展望……………	93

第1章 研究の背景と問題の所在及び研究方法

第1節 研究の背景と問題の所在

歴史的に見ると、スポーツは「性的ステレオタイプのイメージを促進し、維持する」価値体系を強調している。男性の体とスポーツの表現はすべてのスポーツの表現を測定する基準として使われる一方で (Lensky,1998) , 「スポーツを通じて女性はエンパワーされる」という認識は、国連の「UN Women」の取り組みなどを通じてグローバルに定着しつつある。また、時代の発展に伴い、フィットネスに興じる女性たちが増えており、フィットネス活動を通じて身体健康や体付きを維持しようとしている。現代社会において、スポーツの記録や参加者数の男女格差は大幅に縮小傾向にあり、男性優位のジェンダー秩序はその正当性の根拠を失いつつあるように思われる。

こうしたスポーツに関わる社会的な変化が進む中で、女性によるフィットネスの消費はますます増えており、女性専用クラブも誕生している。「フィットネス産業基礎データ資料 2005」

(社団法人日本フィットネス産業協会) 掲載のデータを Fitness online For Business の「フィットネスビジネス」編集部が作成したレポートによって、日本にはフィットネスクラブに入会している女性の方が男性より多く、フィットネスクラブのすべての会員のうち、女性が過半数(53%)を占めるようになってきていることが報告されている。令和元年度「スポーツの実施状況等に関する世論調査」(スポーツ庁)によると結果によると、スポーツ実施率について性別では、60代を除き女性より男性の方が高くなっている。Kim and Mauborgne (2005) によると、「カーブス (Curves)」などの女性専用フィットネスクラブが急成長を遂げた要因は、ブルー・オーシャンを切り開き新しい需要を生み出したためであるとの指摘もなされている。

しかし、女性専用の空間の増加は、はたして「ジェンダー化された社会秩序」への挑戦なのか、妥協なのか。男性優位が鮮明な形で表現されているスポーツの場において、女子専用フィットネスクラブというのは、女性達が自発的に占有する空間であり、その点でスポーツの場において特異な存在であり、女性たちがいかにして居場所を確保できるかという課題に答えようとするものであると考えられる。そこで、女性専用空間が本当に女性に権力を与え、女性を支持しているのか、あるいは「男性や混合性別運動空間における覇権定義の男性気質と女性気質をコピーしているのか」(Ostgaard, 2006) という問いが浮かび上がってくる。というのも、女子専用の空間には、必ずしも従来のジェンダー秩序の維持と再生産を廃除できるとは限らないとも考えられるためである。そ

のため、本研究では「男性性の保護区」であるスポーツの場において「女子専用のスポーツ空間」の開拓とは、はたしていかなる意味があるのかという、問いへの回答を試みる。

第2節 先行研究の批判的検討

本節では、本研究との関連から、特に以下の3つに焦点を当てて、女性スポーツに関する研究成果を概観する。

- 1) 女子の身体やスポーツ行為とジェンダー秩序の相互関係に関する研究(第1項)
- 2) 性別とスポーツ空間に関する研究(第2項)
- 3) スポーツの場におけるジェンダーコードに関する研究(第3項)

以上の先行研究の検討によって、先行研究の課題と本研究の位置づけを明確にしていく。

第1項 女子の身体やスポーツ行為とジェンダー秩序の相互関係に関する研究

本項では、女子の身体やスポーツ行為とジェンダー秩序の相互関係に関する研究成果を概観する。身体は、人類の存在において最も明白な象徴であり、自己を表現する領域である。簡単に言えば、ある程度では、人は身体そのものである。身体は単なる生理学的な意味を持つだけでなく、高度に政治的な要素も含んでいる。個人の観点から見れば、身体は自己が存在する自然環境であり、また自己と社会との仲介役でもある。メディアにあらわれたスポーツをする女性をめぐる言説の分析によって、スポーツする主体としての女性に対する社会のまなざしにおける「ジェンダー秩序」の存在を明らかにしている（飯田 2003, 谷口 2007）。Markula ら(2003) は、女性のフィットネス行為を、フーコーの主張する身体が歴史と文化的な構築物であるという観点から説明し、ジェンダー秩序に規制された結果であると主張している。しかし、(Mcnay 1991) は、フーコーの身体理解には、主体を静的で従順な身体とみなすという点で問題があり、女性のフィットネスに対する主体性や、フィットネスにおける女性の身体的経験、感情、社会的なジェンダー構造の間のポジティブな相互作用を無視していると指摘している。

Allen-Collinson (2015) や Sabiston ら (2009) は、女性特有の身体的経験の観点からフィットネスの主体性を考察し、女性がランニングで経験する体温の上昇など強烈な感覚的体験が、自我を再構築することに重要な役割を果たしていることを明らかにした。1980 年以降の BMI の推移（厚生労働省健康局, 2001）を見ると、若い女性のスリム化は著しく、その根底には服を着替えるように身体を理想の形に作り変えようとする身体観があり、スポーツはマスメディアと共謀してこの改造

可能な身体観を醸成し、身体ジェンダー化を増幅してきた、と平川（2006）が指摘する。Macnevin（2003）は、フィットネス活動が化粧と整形などの行動と比べて、女性たちが自分の体への不満を抱く可能性があるにもかかわらず、精神的、肉体的、心理的なバランスが取れた自然な状態であり、完全にジェンダー秩序が定義する女性の美意識を追求するのではない、と指摘した。また、フィットネスを通じて「完璧な身体」を形成する過程で、女性の個人的な思考、経験、行動は、置かれている社会規範と絡み合っていると指摘されている（Shilling, Bunsell 2014, Mennesson 2016, Macnevin 2003）。Shilling ら（2010）は、女性のスケートボーダー、ボクサー、サーファーが、独特なフィットネスを通じて伝統的なジェンダー秩序に挑戦しているのだと主張する。さらに、Mennesson（2016）も、フィットネスを通じて女性が作り出す「スーパーウーマン」のボディイメージは、伝統的なジェンダー秩序に効果的に対抗できると主張している。しかし、森（2006）は、大学生のスポーツ実践とジェンダー観との関係に焦点を当て考察し、男子選手は男子学生全体より性別役割分業を肯定する意識が強く一方で、女子選手は女子学生全体よりも肯定する傾向が弱く、女性の高度なスポーツ実践は性差別的意識と逆に作用する可能性があると結論付けた。水野（2007）によるサーファー・コミュニティのエスノグラフィーは、サーファー・コミュニティのホモソーシャルな構造と女性の抵抗を析出している。合場（2013）は、女子プロレスラーの身体とジェンダーを考察し、女子プロレスラーはジェンダー秩序を「再生産」することもあれば、そこに「対抗」の機会を見出すこともあると指摘する。戴（2014）はボクシングに参加する女性が、家庭、国家体制、フィットネスの場などの総合的影響をうけ、ボクシングへの最初の抵抗から選手としての主体的勝負へと至る経験をしている、と述べている。

しかし、ここで1つの疑問点が残る。それは、危険性の高い激しいスポーツ種目における大衆や一般人の参加への研究の不足である。Allen-Collinson（2015）や Sabiston ら（2009）は、一般人を対象としたが、スポーツ種目は危険性の低いランニングである。森（2006）は、学校スポーツを対象としている。合場（2013）と戴（2014）の研究におけるスポーツ種目は激しい種目であるが、フィットネスのように大衆や素人などの一般人ではなく、プロ選手のプロレスラーとボクサーを対象としている。ボクシングや格闘などの危険性が高く、激しいスポーツ種目をフィットネスとして活用することは、時代の発展と共に新たに出現した現象であるため、いまだ十分な研究と記述がなされていないといえる。

第2項 性別とスポーツ空間に関する研究

1) スポーツ空間の利用における性差に関する研究

熊（2014）は、フェミニスト空間理論に基づき、レジャースポーツに参加する過程における女性の空間体験について分析している。そこでは、女性の特別で多様なニーズに焦点を当てることで、ジェンダー秩序における「公的領域」と「私的領域」の二分法を解体させ、「男性性」と「女性性」のステレオタイプに挑戦し、都市女性のための社会的空間を創出していく過程を解明した。つまり、スポーツ空間の占有は、スポーツ領域だけでなく社会領域における女性の権利付与にとって、重要な観点であることが示唆される。

楊（1995）は、小学校の男女生徒の放課後の行動と空間について観察し、校庭や廊下での男子生徒数が女子生徒数よりも多いことを発見した。また、室外活動には、女子生徒が活動者ではなく観察者になる場合が多いことが指摘された。一方、張（2003）は、台北市の中学生が学校の空間を課外時間にどのように利用しているかについて調査し、生徒が各校内活動スペースの利用者に対する性別の印象について語った結果、室外バスケットコートの利用者については「男性の方が女性より多い」という比率が90%近くに達し、屋内バスケットコートの利用者についても「男性の方が女性より多い」と感じる生徒は約70%だった。実際の観察結果でも、男子生徒は球場での活動人数が女子生徒よりもはるかに多く、女子生徒は主に廊下での活動が多かったという。活動の内容に関して、男性は動的な活動を好む傾向があり、女性は主に静的な活動を選ぶ傾向がある。また、廖（2004）の研究で似たような問題が依然として取り上げられていた。開かれている球場では、ほとんどの利用者が男性であり、女性が球技スポーツを楽しむ機会を得ることは非常に困難であると指摘している。特に、女性が球場で活動する場合は、空いている球場を利用するために、男性が去るのを待たなければならない。1999年には、台湾大学の性別と空間をテーマとする研究室による「台湾大学キャンパス空間の性差総合検査提案報告書」において、女性の球場利用者が男性と同じ場所でスポーツをする際に、侵入されることを脅威と感じていたことが指摘されている。これには、実際のスポーツ活動の物理的なスペースへの干渉や、視線における差別やのぞきが含まれる。これらの恐れや脅威は、女性にとってスポーツ施設が非友好的な雰囲気を形成し、さらに球場文化の形成に間接的に働いているといえるだろう。交通大学のバスケットコートの例を挙げると、その施設の利用は非常に競争が激しく、学部（人数が多い）に対して、個人利用者は相対的に弱者と位置づけられていた（余，2009）。それぞれの学部の団体チームは、練習施設の使用権を確保するため

に場所を占有する方法を採用し、一方で個人利用者は辛抱強く球場を待たなければならない。明らかに、「人数が多く、早く球場に到着した側が球場の使用権を持つ」というルールが球場の非公式な規則となり、公的な権力の介入による実質的な変化は非常に難しいことが明らかとなった。これらの非公式な規則によって、スポーツを楽しむ女性利用者と少ない人数の利用者との間で、球場で「黙っているグループ」が形成される原因となったのである。女性優先の球場が指定されているにもかかわらず、たまには球場を占有するために手段を選ばず球場を強行的に占拠する利用者に遭遇した例も指摘されていた。その結果、女性と個人利用者は球場を使用する際に不公平な扱いを受け、不満をぶつけることができず、「男性や団体利用者が優先」な球場文化に従うしかなくなっているのであった。

2) 女子限定の非スポーツ空間に関する研究

Lewis ら(2015)は、30人の女性が2日間にわたって参加した英国のフェミニズム・カンファレンスのグループデータを用いて、女性専用空間における女性の安全体験を検討し、女性専用空間がどのように「日常のリスクを回避する」と「けなされるリスクを回避する」ことによって「完全な人格を表現できる」安心感を提供するかを説明した。「女性は男性機関に分離された場合にのみ自分の力を発展させることができると考えている」(Hum, 2003, p.257)という考えかとも存在する。

3) 女子限定のスポーツ空間に関する研究

女性専用ジムはますます人気を集め、女性に安全で権利を与えるトレーニング環境を提供している(Ostgaard 2006)。Marinescu (2013)らの調査結果によれば、女性は女性専用のエクササイズや水泳のクラスに参加し、これらの女性専用のプログラムを非常に重要視していたという。最初に介入を開始したのは、男性の前で運動することを許可されていないソマリアのムスリム女性のニーズに対応するためだったが、他の民族や文化的背景を持つ女性たちも、女性専用の環境で運動する機会を高く評価していたと指摘している。また、Pavlidis ら(2018)は、男性が「女性専用」ローラースケート競技に参加する際の性別関係と性別が融合した状況を考察した。女性が主導的地位を占めるローラースケート競技の女性はこのスポーツに強い帰属感を持っている。男性が参入し一緒に活動すると、自分の空間が「侵入」されているという感覚が生まれる。一方、Pavlidis ら(2018)

のオーストラリアで行った研究によると、性別融合のアライアンスとチームは、より開放的で包容的な性別観念（ミクロとマクロレベル両方）を支持している。

しかし、女性専用のスポーツ施設には、多くの制約が残存している。例えば、2010年には、台湾大学のジェンダー平等ワークショップが女性専用バスケットボールコートについて詳細に議論し、場所の選択や設備の配置などを検討した。その結果、女性優先のバスケットコートは通常、一般のバスケットコートよりも小さく、バスケットのリングも低いことが多く、メインバスケットコートの一部ではなく、他の伝統的な男性優先のバスケットコートから離れた場所に設置されることが多かったと報告された。ジェンダー平等ワークショップは、台湾大学の女性優先バスケットコートの場所が不適切で、他のバスケットコートから隔離されており、その結果、性別がより分離され、公平な使用原則に反する結果となったと指摘した。女性優先のバスケットコートの数が不足しており、その設置の象徴的な意義が実際の効果よりも大きいため、性別平等の概念を効果的に伝えることができていないことも示唆された。さらに、バスケットコートの使用に関して、実際のケースを挙げて説明されている。ある女性はメインバスケットコートで他の人々と一緒にシュートをしていたが、後から来た男性たちに「3対3をやるから」という理由で女性優先のバスケットコートに追いやられた。このように、女性が女性優先のバスケットコートしか使えなくなっている状況は、最初の目的と逆説的に機能していたのであった。つまり、スポーツ空間におけるジェンダー平等について、単なる「レディーファースト」ではまだ十分に保障されていないのである。

4) 女子専用のフィットネスジムに関する研究

女性専用のジムは、サーキットトレーニングのエクササイズプログラムを提供することで、フィットネス産業の中で最も急速に成長している領域である。これらのジムは女性をターゲットにしてマーケティングがなされていると指摘されるが、実際には、他のフィットネス施設から排除されてきた年配の女性や運動が得意でない女性といった比較的未開拓の市場を対象にしているのである（Monson,2006）。加藤（2009）による女性専用フィットネスクラブ選択へ影響を及ぼす要因に関する研究では、5人の専業主婦を対象として、「自己呈示」の視点から女性専用クラブを選択するに至る要因を探究していた。そこでは、女性専用クラブの利用者が、自分の体に対する不安が高いため、「完璧なボディー」をイメージする従来型のフィットネスジムから敬遠する結果となったことが明らかにされている。

歴史的には、フィットネスジムは男性が優位であり、女性を排除し、男性の身体的な支配を重んじる場所であった（Klein 1993; Wacquant 2004）。しかし、現在では、主に女性向けのフィットネスクラスを提供する混合性別のフィットネスセンターの利益を上げる店舗が、男性専用のジムよりも多く存在しているのである。現代のジムには男性も女性も参加しているが、それにもかかわらず、性別による隔離は壁の中で続いていることがわかる。

フィットネスジムの民族誌的研究において、Dworkin（2003）は、ウェイトルームには女性が少なく、有酸素運動のための器具が多い部屋には男性よりも女性が多く、また女性だけのエアロビクスクラスが存在することを発見した。体重を減らし、筋肉質な体に再形成することを重視したエアロビクスクラスや関連する有酸素運動は、ジム内で女性化したプラクティスとなっている。女性化のプロセスは、ジムに元々備わってきたジェンダーコードとは異なるものであるといえる。

Dworkin（2003）による混合性別のジムに関する民族誌的研究を除いて、現代の女性のフィットネス活動への社会学的研究では、ジムをジェンダーコンテンツとして取り扱う研究はほとんどない。女性とフィットネスに関する社会学の文献の多くは、女性の生活におけるフィットネス活動の意味を調査してきた。エアロビクスと混合性別のジムが女性の場合として成長し、同時にやや筋肉質な女性像が登場したこと（Bordo 1993, 195; Dworkin 2001; Morse 1987-1988, 25）で、ジェンダーとスポーツの研究者たちは、エアロビクスへの参加によって女性がジェンダーに関連した社会的規範に従うかそれを越えるかを問うてきた。こうした研究の端緒としてあげられる Morse（1987=1988）、Hargreaves（1994）、Markula（1995）、Lloyd（1996）、Maguire と Mansfield（1998）は、エアロビクスクラスを抑圧的な身体的理想を強化する、力を奪う身体的規律の技術として特徴づけた。しかし、これに続く研究では、より曖昧な結論が出されている。McDermott（2000, p. 350-351）は、先の研究者の見解と類似して、女性がエアロビクスクラスに参加し続ける主な理由として、身体的外見に対する関心だと述べているが、それにもかかわらず、エアロビクスを通じて女性はより大きな「身体的自信」を身につけ、より広範な身体活動に参加することができたと結論づけている。Gimlin（2002, p.68）は、エアロビクスクラスに参加した女性たちが、外見だけでなく活力も重視するように、理想的な女性の体のイメージを見直したと主張している。Dworkin（2003年）は、女性が有酸素運動を選ぶ理由は、体力をつけながら、女性の身体的外見に対する規範を乱さずに済むためであると述べている。Collins（2002）と Markula（2003）は、エアロビクスの参加者を、身体的規律に従いつつもフィットネスメディアが推進する身体的理想に疑問を抱き葛藤を抱えた一致しない

人々と表現している。フィットネス活動への参加が女性の身体活動にどのように影響を与えるかを探求することにより、この文献は現在の研究に重要な文脈を提供している。

Craig & Liberti (2007) では、未婚のフィットネス会員は、他の会員たちが夫や子供について話す際には「排除される」と感じる経験について言及した。女子専用フィットネスクラブまだ従来のヘテロヘゲモニーパターンに支配されていることを示した。また、体重の減らすことが第一目標で、筋肉や筋力、スタミナの増強はある程度で無視されているという事実は、この女性専用ジムでは健康志向の代わりにダイエット志向が最優先であることも明らかであろう。より細くてスリムな体が主要の目標で、「他人からどう見られるか」が「身体そのものが生み出せるパワー」より重要である。これは、フーコーに代表される身体理論(女性のフィットネス行動は、従来の性別権力規範に拘束された結果である)である「従順で、受動的な身体」という伝統的なジェンダー規範と一致する。

以上のように性別とスポーツ空間に関する先行研究を検討してきたものの、2つの疑問点が残る。一つ目としては、女子専用のジムあるいは女子専用のフィットネスクラブに関する研究は、エアロビクスなどの有酸素運動や、カーブスのような「30分軽い運動」を対象とされており、限定的な知見となっている点である。本研究が関心を持つ、一見すると激しくもあり危険性が高い「男らしい」スポーツ種目を対象とする研究はないといえる。

二つ目は、女子だけのフィットネス空間への選択に影響する要因が十分明らかではないという点である。加藤 (2009) は、カーブスの会員を対象として、女子専用のフィットネスジムを選択した要因を経営学の視点から分析したが、社会学的な視点からの分析は十分ではない。また、社会的体型不安^[1]が高く、自分の体型に満足していない女性ほど、男女共用の運動の空間よりも、女性専用の空間を利用し運動する傾向があると指摘しているが、「30分軽い運動」ではなく、一見すると激しく危険性が高い「男らしい」スポーツをフィットネスとして経験する女性達も社会的体型不安が高いことが、女子専用の運動の空間を選択することにどのように影響したのかを検証する必要がある。それ故に、本研究は、フィットネスジムにおいて激しいスポーツ種目をフィットネスとして経験する一般参加者を研究対象にする。

[1] 社会的体型不安 (Social Physique Anxiety) : 自分の体型が他者にネガティブに評価されるのではないかと感じる、自己呈示的な不安である (Hart et al., 1989)。

第3項 「女らしさ」と「男らしさ」——スポーツの場におけるジェンダーコードに関する研究

では、なぜ本研究では一見すると激しく危険性が高い「男らしい」スポーツ種目を研究対象とするのか。本項では、その点についてこたえるために、スポーツにおけるジェンダーコードに関する研究成果を概観する。

ジェンダーコードとは「男女のハイアラーキーと社会における男性優位を、自然のものとして受け入れ、再生産する社会の組織化にかかわる概念」(天童, 2015)である。また、ブルデュー (2002) は、性別気質がハビトゥスを通じて男女双方の身体に適用され、その結果、男らしさや女らしさに適合した身体姿勢、身体知覚、身体行動が生じるとし、男女は社会化の過程でジェンダー化されたハビトゥスの規範体系を自らの身体に積極的に内在化させ、ジェンダーの分化を完成させると述べている。

今日、社会科学の分野では、社会的・文化的性としてのジェンダー概念は、生物学的性としてのセックスとは区別されるものとして理解されている。ジェンダー概念の提示は、「性差」に関する後天的形成モデルの説明に重要な鍵概念であった。すなわち、ジェンダーは生物学的基盤にもとづき社会的・文化的な背景によってさまざまな形質が獲得されたものである、と理解されてきた。しかし、構築主義的アプローチにおけるジェンダー研究において、女／男は生物学的な基盤にもとづくというよりは、当該社会において、社会的相互作用を通して、対なるカテゴリーとして構築されたものであると考えられるようになったのである(上野, 2001)。スポーツの文脈においても、「ヘゲモニックな男性性 hegemonic masculinities」と「誇張された女性性 emphasized femininities」という対概念の下で、女性は一般的にエアロビクスやヨガなどの「女性らしい」フィットネス活動への参加を好んで、そのフィットネス参加の深さや幅は、社会的なジェンダー認識や従来のジェンダー秩序と社会規範によって制限されているという(熊 2014)。

他方で、フィットネス活動の種目の多様化に伴い、若い女性のスポーツ参加の好みも変化しており、「女性らしくない」運動種目も徐々に女性の間で人気が出てきた(部ら 2015)。女性のスポーツ参加の拡大によって、男性限定的であった従来の種目が女性にも解禁されるようになり、スポーツを通じて女性の「男性化」もますます進むようになったのである。例えば、長い間「男らしい」スポーツと見なされてきたボクシング(コンバットスポーツ)への女性参加は近年の新しい現象として、徐々に参加者が増加している。2010年には上海で初めて女性専用のボクシング・スタジオが誕生し、北京や広州でも女性のボクシング・フィットネスクラブが誕生していた(顧ら 2017)。

2019 年になると、中国の女性 MMA (Mixed Martial Arts=総合格闘技) 選手張偉麗が UFC (Ultimate Fighting Championship=アルティメット・ファイティング・チャンピオンシップ) で優勝を勝ち取り、中国人初の優勝者になった(孫, 2019)。ボクシングなどの「男らしい」スポーツであっても、女性たちの注目を浴び始めているのである。

しかし、「男らしい」スポーツに参加する女性は常に、ジレンマに直面している。例えば、台湾の HBL (High School Basketball League) ではかつて「短髪禁止令」が存在した。この規則は、「選手は髪を短くすると便利であるのではないか」という通常の考え方とは逆である。潘 (2015) はこの「短髪は禁止、長髪は許す」という規則が何を意味するのかを探究し、その結果、スポーツ自体が高度に「性別化」された領域であるため、競争、力、速さ、競技形式、トレーニングメカニズムなど、スポーツが尊ぶものは、伝統的な男性の男らしさのイメージと一致していることを指摘している。そのため、過去にスポーツから排除されていた女性がスポーツの領域に入ると、スポーツは「争点の領域」となり、従来の「男らしい特徴」と「女性らしい特徴」が女性アスリートの登場によって境界が曖昧になるという。確立された性別イメージが崩れ、性別特性も流動的になったことを背景に、二元性別の対立を維持し、再び強化するために、社会は女性アスリートに「女性らしい特性」を表現することを更に期待するようになった。ただし、女性アスリートは時には「男らしい特性」を持つスポーツの領域から反発を受けることもあった。

したがって、このように高度に性別化されたスポーツ領域では、女性アスリートは複数の規範に従わなければならない。彼女たちは「強靱」である必要がありながら同時に「優美」である必要もある。つまり、女性アスリートとして、彼女たちは相反する要求の中で生活しているといえる。外部の社会文化構造は、彼女たちを制約し、あまりにも男らしすぎるか、魅力不足だと見なすことがある (Cahn, 1994)。一部の女性アスリートは、「男らしい特性」から逃れようと急いでいるため、健康に害を及ぼすハビトゥスを持つことがある。例えば、過度なダイエット、過度な運動、あるいはスポーツで特に女性らしい外見を意識的に演出し、社会や文化が求める優美で繊細な女性の身体像に合致させようとするのである。このように、男らしいスポーツを行う女性は非常に矛盾した立場にいるといえる。一方で、競技場では「男らしさ」を示す必要があり、他方で女性らしい一面を示すよう求められる。女性は外見を自由に選ぶことができるように見えるが、伝統的な性別の枠組みから完全に逃れることができず、「自分らしくいる」ことは容易ではない。女性の身体を彼女たちに返し、主体的な行動能力を取り戻すには、課題が山積

しているのである。つまり、一見すると激しく危険性の高い「男らしい」スポーツ種目の場合において、女性はより多くの葛藤に直面する可能性があると考えられる。

また、ギデンズの構造化理論によると、社会構造は人間の行動を制約する一方で、行為者の行動を維持し、変化させる一方、ブルデューによれば、個人の主体性の過程において、個人は社会構造の規範に準拠し、それをハビトゥス的に維持する場合もあれば、行動の過程で社会構造の自己への束縛に気づき、新たな反省を形成し、主体の意識を目覚めさせ、社会構造の個人への束縛を脱構築するために行動する場合もあるという（李 2012）。したがって、一見すると激しく危険性の高い「男らしい」スポーツをする女性を研究対象とすることで、社会構造に対して反省的な知見や示唆を得やすいと想定される。

最後に、それぞれの「男らしい」スポーツ種目の中に、「ボクシング」を注目する理由は、ボクシングにおける性差の歴史から見ると、ボクシングは最も「男らしい」スポーツの1つであり、女子ボクシングは、2012年のロンドンオリンピックまで、オリンピックの公式競技項目として認められてこなかったのである。つまり、「最も遅い段階で男女平等を成し遂げたスポーツ種目である」といっても過言ではない。ボクシングの最初の原型は、人類が生存を求めて自己防衛のために拳で戦った古代にさかのぼる。古代オリンピックでは既に競技種目としてボクシングが行われていたが、その暴力性から、ボクシングが正式な競技として採用されたのは1904年の第3回夏季オリンピックのことだった。ただし、1912年ストックホルム大会では、スウェーデンの法制度の関係から、一時的にボクシングが禁止されたものの、その後はほとんどの夏季オリンピックで正式な競技として実施されている。

女性のボクシングに関しては、その歴史は比較的新しいもので、最初の記録は1720年のイギリスにさかのぼる。1904年にはオリンピックで展示競技として行われたこともあるが、当時は多くの国でボクシングは禁止され、男性専用のスポーツとされ、女性の参加は許可されなかった。女性が正式にボクシングに参加できるようになったのは、1993年にアメリカボクシング協会が女性の参加を認めたことであり、1994年に国際アマチュアボクシング協会も同様の決議を採択し、1996年から女子ボクシングが正式な競技として採用された。これにより、女性は選手としてリングに上がることができるようになり、アシスタントとしての役割から解放された。女子ボクシングの最初の試合は、1999年にフィンランドで開催された世界女子ボクシング招待大会であった。その後の2004年に、国際アマチュアボクシング協会は国際オリンピック委員会に対して、女子ボクシングを2004

年アテネオリンピックでデモンストレーション競技として導入し、2008年北京オリンピックで正式な競技として採用する提案を提出した。その提案は当初は支持されなかったものの、2009年に国際オリンピック委員会の議長が強く支持し、2012年ロンドンオリンピックで正式な競技として採用されることとなった。

ただし、女性が正式にボクシング競技への参加資格を取得したことによって、ボクシングにおけるジェンダー平等が既に達成されたとはいえない。男性と女性の生物学的な違いがあるとして、男性選手が女性選手よりも優れているとみなすことが一般的な考え方である。そのため、競争の激しいボクシングで成功するために、女性のトレーニングを高度に男性化し、女性の生理的な特徴を排除することが有効だと考えているコーチも少なくない。これは現代の多くのスポーツトレーニング方法の一部でもある。しかし、このような「女性を女性として扱わない」トレーニングによって、性別文化を転倒させることはできず、女性を劣等や弱者として取り扱う先入観を持たせ、女性の肯定的な性別アイデンティティの確立には役立たないといえる。結果として、多くの女性はスポーツに取り組む際に、性別アイデンティティに疑念を抱くこととなる。

一方、ボクシング競技に女性が参加することで、男性中心の競技場に女性らしい要素を持ち込むことができるという主張もある。そのため、女性選手に対する最も一般的なニックネームは「pretty baby」である。一部のベテランコーチは、女性ボクサーの「模範」として、トレーニング中に男性と同じほどのタフさを発揮し、トレーニング終了後に女性らしい側面を取り戻す姿であると主張している。2012年のロンドンオリンピックの前に、国際オリンピック委員会が女子ボクシングの競技ウェアをスカートにする規則を発表し、大きな論争を引き起こした。支持者は、男女の競技区別が難しい状況を避けるだけでなく、女子競技を観客にとってより魅力的にするためにスカートを着用すべきだと主張した。幸いなことに、この規則は選手の強い反対により「推奨事項」としてのみ残り、選手は自分で競技ウェアを選ぶ自由を持つことができた。この規則は、ボクシング競技と女性の日常生活のギャップを示し、ノンバイナリーという考え方に対する不安が露呈したものである。人々が注目するのは技術だけでなく、選手の体のイメージであり、これがスポーツ選手の技術に対する関心を減少させ、代わりに女性の外見に付加価値が与えられることにつながっている。

以上のことから、スポーツ場面におけるジェンダーコードについて考察を深めていくために、スポーツのなかでも、「男らしさ」の代表的な種目であるボクシング競技を研究対象として設定することとする。

第4項 先行研究の批判的検討

先行研究を検討してもなお、以下の疑問点が残る。これまでの先行研究では以下の3つの疑問点に答えられないことが明らかとなった。すなわち、「女性はなぜ女性専用場所で運動するのか」という点、「女性はなぜ男らしいスポーツを選択し、かつなぜ女性専用場所で男らしいスポーツに取り組むのか」という点、「女子専用のフィットネス空間は女性のスポーツ参加、さらには女性の社会進出やエンパワーメントに対してどのような意味を持つのか」という点である。また、具体的な方法や研究対象の設定についても課題が残されているため、以下のように整理した。

一つ目は、危険性が高く激しいスポーツ種目における大衆や一般人の参加に関する研究が不足している点である。Allen-Collinson (2015) や Sabiston ら (2009) は、一般人を対象としたが、スポーツ種目は危険性の低いランニングだった。森 (2006) も、学校スポーツを対象としていた。合場 (2013) と戴 (2014) の研究におけるスポーツ種目は、激しいスポーツ種目であったが、大衆や一般人ではなく、プロ選手のプロレスラーとボクサーを対象としていた。ボクシングや格闘技などの危険性が高く激しいスポーツ種目をフィットネスのために実施することは、あくまで時代の発展と共に新たに出現した現象なので、いまだ十分な研究と記述がなされていない。女子だけのジムあるいは女子だけのフィットネスクラブに関する研究では、エアロビクスなどの有酸素運動や、カーブスのような「30分軽い運動」を対象としての研究がほとんどであった。つまり、一見すると激しく危険性が高い「男らしい」スポーツ種目を対象とする研究は不十分であるといえる。

二つ目は、女子だけのフィットネス空間の選択に影響する要因が明らかになっていない点である。加藤 (2009) は、カーブスの会員を対象として、女子専用のフィットネスジムを選択した要因を経営学の視点から分析したが、社会学的な視点からの分析は十分ではなかった。また、社会的体型不安が高く自分の体型に満足していない女性ほど、男女共用の運動空間よりも、女性専用空間を利用し運動する傾向があるという。「30分軽い運動」ではなく、一見すると激しく危険性が高い「男らしい」スポーツ種目をフィットネスとして経験する女性は、社会的体型不安が高いことによって、女子専用の運動空間を選択しているのかどうかについて検証する必要がある。

三つ目は、女性だけの運動空間の存在意義が十分に明らかにされていない点である。「女子専用フィットネスクラブまだ従来のヘテロヘゲモニーパターンに支配されている」(Craig & Liberti, 2007) と指摘されているが、女子専用のボクシングジムの場合も同じ現象が生じるか否かは十分に検証されていない。以上までの先行研究の批判的検討をふまえ、次節では、本研究の具体的な検討

課題を提示する。

第3節 研究の目的と方法

第1項 本研究の目的

本研究の目的は、女子専用フィットネスクラブの存在意義、及び女子専用フィットネスクラブという存在は如何にして女性の権利付与に影響を与えるのかを明らかにすることである。この目的を達成するために、本研究では具体的に以下の2つの作業課題を据えて研究を進める。

課題1) 会員が従来型のフィットネスクラブではなく、女子ボクシングジムを愛好し入会に至る過程で影響を受けた要因を、質的データ分析を用いて検証する。また、選択に至るまでの心理活動を「スポーツ/運動アイデンティティ理論（以下、SP/EXID 理論）」のフレームを用いた解釈を試みる。

課題2) 課題1を踏まえて得た選択に影響する要因や、インタビュー協力者達の身体ハビトゥス、筆者が参与観察で観察し得たインタビュー協力者以外の会員やクラブのスタッフ（コーチと経営者）の言語、あるいは身体表現を分析内容として、女子専用ボクシングジムにおけるジェンダー規範の考察をすることを目的とする。

第2項 本研究の方法

本研究は質的調査法を用いる。具体的には、半構造化インタビューを中心に研究を進めていく。また、筆者が対象としたジムにおける実際のボクシングプロジェクトに参加し、参与観察を行う。

1) 半構造化インタビュー

研究の必要に応じて、事前にインタビューガイドを設計し、本研究に関連する問題について対象者とのインタビューを行う。インタビュー中では、異なる被インタビュー者の状況に応じて質問をし、音声を録音し、速記を行う。本研究では、女性専用のボクシングジムを愛好した過程を検証するためには、豊かな記述にもとづく質的分析が有効と考え、半構造化インタビューという質的方法を採用しデータ収集を行った。半構造化インタビューは、インタビュー어의個人的属性、入会時期と動機、当クラブを選んだ理由と魅力、従来型のフィットネスクラブ或は男女混合のジムを選ばなかった理由、そして、自分の体に対する思考、などに関する質問を中心に構成し、話題の展開の中

で適宜質問を加えたり、質問の順番を変えたりした。

2) 参与観察法

本研究には、現地調査を行い、観察、対話、そして会員たちと一緒にプログラムに参加するなどの手法を用いて、必要な第一手の情報を収集する。研究者はボクシングジムのオーナー兼コーチと連絡を取り、観察に参加する許可を得た。本研究では、記述的な記録と反省的な記録の2つの次元から観察記録を作成し、キーモーメントを記録するためにビデオを使用した。さらに、当クラブの公式アカウントのメディア資料や写真や会員たちのSNSでの公開的な投稿内容も活用した。

3) 論理的推論

現代心理学、社会学、行動学などの多くの学際的な理論と方法を適用し、収集したデータをまとめて推論する。

インタビュー調査^[2]の概要

インタビュー調査について、まず、中国のSNSで当クラブのオーナー（経営者兼コーチ）と連絡を取り、調査趣旨を伝えた結果、口頭で承諾を得ることができたため調査が可能となった。次に、インタビュー協力者F（以下、利用者F）と連絡を取り、ウェイチャットの電話機能でインタビューの協力承諾を得て、インタビューを行った。利用者Fのインタビューによって質問項目を調整し、他の9人のインタビュー協力者への質問項目を作成した。なお、利用者Fをインタビューする時、経営者兼コーチも利用者Fの傍に居たため、後日に実際にボクシングプロジェクトに参加し、その際に知り合った人を他のインタビュー対象者とするのをもう一度確認し承認された。質調査依頼書を依頼したことはないものの、依頼が承認された事実としては、SNSでのテキストまたは口頭で得て、録音の形で保存している。

他の9人のインタビュー協力者は、利用者Fやオーナーが紹介してくれた中・高級レベルの会員と筆者が実際のプロジェクト参加の過程で知り合った初級レベル会員である。プロジェクトが終わってから即時的にインタビューを実施、あるいはSNSで承認を得て後日対面またはウェイチャットの電話機能でインタビューを行った。インタビューの内容としては、今までの自身とボクシング

[2] インタビュー自体は、中国語で質問し協力者に回答してもらった。研究本文で引用したインタビュー協力者の語りは中国語での逐語録を整理してから必要のある部分を筆者が日本語に和訳したものである。それ故に、協力者たちの原意を保つについては、中国の日本語専攻の大学教員にチェックしてもらうことで本意を保つことを確認したが、協力者たちの口ぶりやニュアンスを完全に再現することはできていない。

との関わりについて語ってもらった。具体的には、ボクシングと出会うきっかけ、過去のスポーツ経歴や人生経歴などについて質問しながら語ってもらい、当クラブを選んだ理由や当クラブでボクシングに取り組んだ感想や心境の変化について丁寧に語ってもらった。

インタビューの時間としては 30 分から 1 時間程度であり、電話または当クラブ内、公園で実施した。インタビュー内容に関しては、本人に許可を得たうえで録音し研究に必要な部分の逐語録を作成した。また、追加インタビュー協力者として、当クラブの新入会員（当クラブを取材したことがある記者）1 名、テキストで文字だけでやり取りした会員 1 名、他の 2 つの男女混合のボクシングジムの男性コーチ 2 名、男女混合ボクシングジム女性会員 1 名に 15 分から 35 分程度のインタビューを実施した。

インタビュー実施状況概要			
主要インタビュー協力者			
	日付	場所	実施時間
A	2023 年 11 月 25 日	上海濱江大道のベンチ	58 分
B	2023 年 11 月 11 日	当クラブ内一階	52 分
C	2023 年 11 月 25 日	オンライン	1 時間 6 分
D	2023 年 11 月 15 日	オンライン	34 分
E	2023 年 11 月 20 日	オンライン	37 分
F	2023 年 10 月 18 日	オンライン	1 時間 2 分
G	2023 年 11 月 11 日	当クラブ内一階	33 分
H	2023 年 11 月 17 日	当クラブ内二階	30 分
I	2023 年 11 月 23 日	オンライン	38 分
J	2023 年 11 月 21 日	当クラブ内一階	33 分
L	2023 年 11 月 15 日	当クラブ内一階	15 分
追加インタビュー協力者			
N	一回目 2023 年 11 月 30 日	N クラブ	8 分
	二回目 2023 年 12 月 11 日	オンライン	30 分

O	2023 年 11 月 30 日	O クラブ	21 分
P	2023 年 12 月 10 日	オンライン	35 分

参与観察の概要

参与観察は、2023 年 10 月末から 2023 年 12 月初の約 1 か月間で行い、ジムに行った回数は 16 回であり、プロジェクトに参加回数は 12 回になった。オーナー、コーチたちと会員たちから見聞きしたことを可能な限り記録した。また、写真を撮影することでも記録を残した。

対象としたクラブを選択した基準

当クラブは専門的な性格があり、コーチ兼創設者はプロ選手出身である。また、このボクシングクラブは団体クラスと個別指導両方も提供し、実際の対戦訓練を含んでおり、定期的にアマチュアボクシングリーグを開催して、会員はアマチュアリーグ戦に参加できる。クラブは中国国内では比較的早い時期から存在しており、10 年以上の歴史を持ち、北京『環球時報』などの有名なメディアや雑誌から特集取材されたことがあり、その先駆性が示されている。

また、本クラブは、特定の女性専用時間帯を設定し、その時間帯外を男女共用とする、あるいは女性専用フロアや区域を設け、該当区域以外を男女共用とするのではなく、全域及び全時間帯にわたり女性専用の施設として運営されている。加えて、会員のみならず、コーチ陣も全員が女性で構成されており、男性が施設内に出現するのは、主コーチ（経営者）が他の男性コーチを友好的な交流を目的として誘った場合に限られる。

以上、総合的に考えれば、本研究の目的を達成し、社会学的な示唆をより多く得ることができると思われるのでここを選定した。

第 4 節 本研究の構成

本研究の目的は、中国の女子専用ボクシングクラブに関する事情を社会学的な観点で考察することであった。さらにこの目的を達成するために、「女性専用ボクシングクラブへの選択に関する要因の考察」と「女性専用ボクシングクラブ内の性別規範の考察」として大きく二つの部分に作業課題を設定した。

第 1 章では、会員が従来型のフィットネスクラブではなく、女子ボクシングジムを愛好し入会

に至る過程で影響を受けた要因を、質的データ分析を用いて検証することが目的である。そのため、まずは、利用者 A と利用者 C の例をケーススタディの形で、二人が選択したに至る思考過程を詳細に記述した。そして、インタビュー協力者全員の語りから抽出した要素を整理し、SP/EXID 理論で検証した。また、SP/EXID 理論で解釈しきれないところは、自己効力感の理論を持ち合わせて論証し、「女性はなぜ女性専用空間で運動するのか」という点や、「女性はなぜ男らしいスポーツを選択し、かつなぜ女性専用空間で男らしいスポーツに取り組んでいるのか」という点について明らかにする。最後に、この中で、当クラブを利用するユーザーの人物像についてもある程度で特定し、その種類のジムを好むのはどのような女性という問いも明らかにする。

第 3 章では、当女子専用ボクシングジムにおけるジェンダー規範の考察をするため、まずはインタビュー協力者達の身体ハビトゥスとその表現を整理する。そして、第 1 章を踏まえて得た選択に影響する要因や、筆者が参与観察で観察し得たインタビュー協力者以外の会員とクラブのスタッフ（コーチと経営者）の言語あるいは身体表現も含んで、総合的に分析を行った。

第 4 章では、第 2 章までの研究を総括し、本研究の結論を述べる。

表1 インタビュー協力者一覧（空欄は未回答項）

利用 者	年 齢	学 歴	職 業	年 収 (単位 :万 円)	練 習 時 間	レ ベ ル	他の運動経歴 や資格など	フィッ トネ ス消 費/月 (単位 :円)	体つきに対する評価/ 満足度/筋肥大・脂肪 減量への志望度（1 ～4級で評価）
A	31	大卒	外資系企業 オペレーター	200-300	一年	初級	中高等学校時代： バトミントン 大学時代：バレ ーボール 現在：ヨガ	2000-6000	均整/どちらかとい うと満足
B	20代後 半	中専	菓子職人		1-2 年	初級	小学校：水泳 現在：サイクリ ング		やや太っている。/ どちらかという満足/ 筋：3 脂肪：4
C	20代前 半	修士	フルタイム職 外資系会社員	200-300	半年	初級	卓球競技国家2 級資格もち	10000- 20000	とても不満足/筋：4 脂肪：4
D	20代後 半	博士在籍	学生	無	1-2 年	初級	バスケットボ ール		
E	19歳	学部在籍	学生	無	半年	初級	ランニング 水泳	6000-10000	均整/とても満足
F	20代後 半	大卒	自由職業 前職は不動産 業者	300-400	2-5 年	中級	ハイキング アーチェリー エアロビクス 太極 ダンス	10000- 20000	均整/どちらかとい うと満足
G	30代前 半	大卒	自由職業 現在は兼業の ボクシングコ ーチ 前職は編集者		5-10 年	高級	パメラ		
H	20代	修士及び その以上	会社員	400以上	5-10 年	高級	筋肉トレーニ ング	20000左右	痩せ気味/非常に満足
I	30代前 半	大卒	フルタイム職 会社員	200-300	六年	高級	アーチェリー	6000-10000	/どちらかという満 足
J	40代前 半	大卒	フルタイム職 会社員	500左右	十 年 以上	高級	CrossFit と Surfskate Powerlighting	6000-10000	やや太っている/ どちらかという満足/ 筋：3 脂肪：3
以下は追加インタビュー/アンケート協力者									
K	30	退職したばかり 前職はフルタイム勤務会社員				高級	(K とはテキストでの軽いや り取りだけ)		
L	25	記者（当クラブに取材したばかりの記者）				新期			
M	女子ボクシングジムオーナー・経営者・主コーチ								
N	男女混合型ボクシングジム男性コーチ								
O	男女混合型ボクシングジム男性コーチ								
P	男女混合型ボクシングジム女性会員								
Q	女子ボクシングジムのあるアンケートだけ回答してくれた会員 中高級 ボクシング経歴 2-5 年								

第2章 女子専用ボクシングジムへの選択要因に関する考察

第1章では、会員が従来型のフィットネスクラブではなく、女子ボクシングジムを選好し入会に至る過程で影響を受けた要因を、質的データ分析を用いて検証することを目的とする。

そのために、まず、第1節では、分析に適する理論的枠組みの提示と補足することにする。分析はSP/EXID理論の概念枠組みの中からスタートしたが、研究対象の特殊性から、この理論だけでは完全には説明しきれない部分があり、その部分は筆者が元の理論に基づいて、「自己効力感」の理論を組み合わせて補足説明を行う。

次に、第2節において、ケーススタディの形でインタビュー利用者Aと利用者Cのインタビューデータの質的分析結果についての記述を行う。実際の語りのデータで確認された要因はいかにSP/EXID理論をベースに当てはまるかを検証する。

更に、第3節では、第1節と第2節の内容を踏まえ、提示された理論的枠組みの普遍性を更に検証するために、利用者Aと利用者Cが言及した内容への支持や、利用者Aと利用者Cが言及しなかった内容への補足として、理論的枠組みの各要素に当てはまる他のインタビュー達の語りから抽出した語句について記載していく。

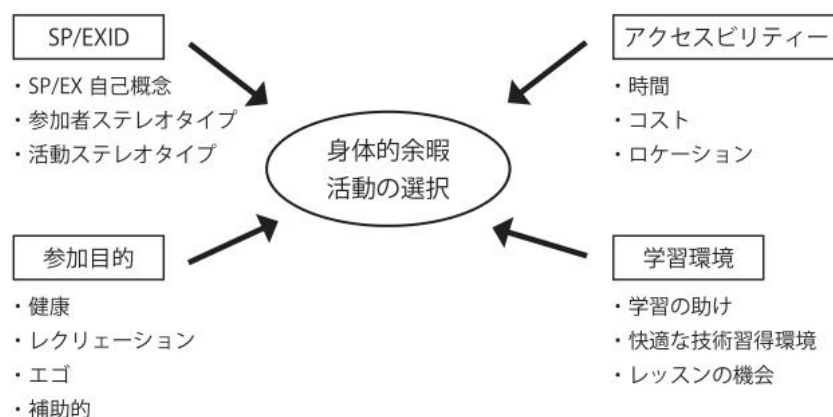
最後に、第4節は、本章のまとめや結論になる。

第1節 論的枠組みの提示

本節では、理論的な枠組を提示することにした。

第1項 スポーツ／運動アイデンティティ理論

先行研究から、インタビューの話から整理した要因と他の概念との関連性を導き出すものとして、Brooks (1998) が提唱するスポーツ / 運動アイデンティティ理論 (Sport/Exercise Identity Theory) を用いる。



出典：Brooks (1998)

訳：加藤(2009)「女性専用フィットネスクラブ選択へ影響を及ぼす要因の質的研究」， p. 11 より引用

図1 スポーツ／運動アイデンティティ理論

SP/EXID 理論においてアイデンティティとは、他者やグループ／組織などとの関わりの度合いを決める手段となると考えられている。SP/EXID は、個人の運動／スポーツに関する自己概念と、個人がそれぞれのスポーツや運動の特性、それにその運動／スポーツの参加者に対するイメージのステレオタイプとの比較によって形成され、フィットネス産業にとってマーケティング上の重要な手がかりとなる (Brooks, 1998)。SP/EXID 理論では、SP/EXID やアクセシビリティ、学習環境、参加目的といった要因が、身体的余暇活動の選択に複合的に影響を及ぼすと考えられる。また、それぞれの要因には図 1 に示すような決定因子があり、たとえば SP/EXID の形成には参加者ステレオタイプが影響し、アクセシビリティは時間的制約を含む。

SP/EXID 理論では、SP/EXID の他にアクセシビリティ、学習環境、参加目的が身体的余暇活動選択の規定要因となるが (図 1)、本研究では学習環境の (1) [学習の助け]、(2) [快適な技術習得環境]、(3) [レッスンの機会] に焦点を当て分析を行った。

第2項 本研究の対象に合わせた元枠組みへの補足

インタビューが「環境」について語った内容は比較的豊富であったものの、筆者が実際にそのプロジェクトに参加して得た経験と観察により、[快適な技術習得環境]を簡単に定義し、概括されることはできないことが分析を通じて見えてきた。したがって、インタビューが「平等な対戦相手として扱われたがる」、「相手にされたがる」のような話や「達成感」、「成功感」のような話から、これらの要因との関連性を導き出すものとして、「自己効力感」という理論を SP/EXID 理

論と併せて適用することとした。それは、なぜその女性ボクシングジムがインタビューーにとっては「快適な技術習得環境」となるのかを説明するのに適用できるかもしれないと想定したためである。そのため、次に自己効力感の理論を導入し、上述の理論と組み合わせて、インタビューー達状況を検証することにした。それ故に、(2)「快適な技術習得環境」については、更に「外部要因」と「内部要因」に分けて議論するにした。そして「内部要因」については、「自我効力感」という概念と併せて分析することにした。

「自我効力感」とは、Bandura (1997) が社会的認知理論を展開するなかで提唱した概念であり、「ある行動が自分にできるかどうかといった確信」として捉えられる。欧米では、健康行動の自己管理や健康教育などに自己効力感を応用した研究が多くみられる (Kowalski, 1997 ; Hanson, 1998)。本研究の場合には、会員たちが「ボクシングのスキルの習得」行動を遂行することができ、自分の可能性を認識できることを「自己効力感を持っている」と定義するにした。

Bandura (1997) は、自己効力感の認識に影響を与える 4 つの「情報源 (sources of information)」をあげた。それらは、思考プロセスが行動をコントロールすることで行動達成が導かれるという「制御体験(enactive mastery experience)」, 他者の体験を見本にした「代理経験(vicarious experience)」, 成功できると思わされるような「言語的説得(verbal persuasion)」, 行動に伴う身体的な刺激や反応、感情、気分といった「生理的情動的状态(physiological and affective states)」である。具体的には、①「制御体験」とは、成功体験によって達成感を得ることであり、②「代理経験」とは、他者が課題を遂行する行為を観察することである。また、③「言語的説得」とは、自己教示や他者からの説得的暗示のことであり、「生理的情動的状态」とは、脈拍など生理的な反応の変化を経験することを指す。その中でも、①「制御体験（成功体験によって達成感を得ること）」は、男女混合型ボクシングジムにおいても得られる経験であるため、女性だけの場だからこそ変わる可能性のある②③④を焦点にあたって議論することにした。

上述した 2 つの理論的枠組みに基づいて、筆者が図 2 を作成した。

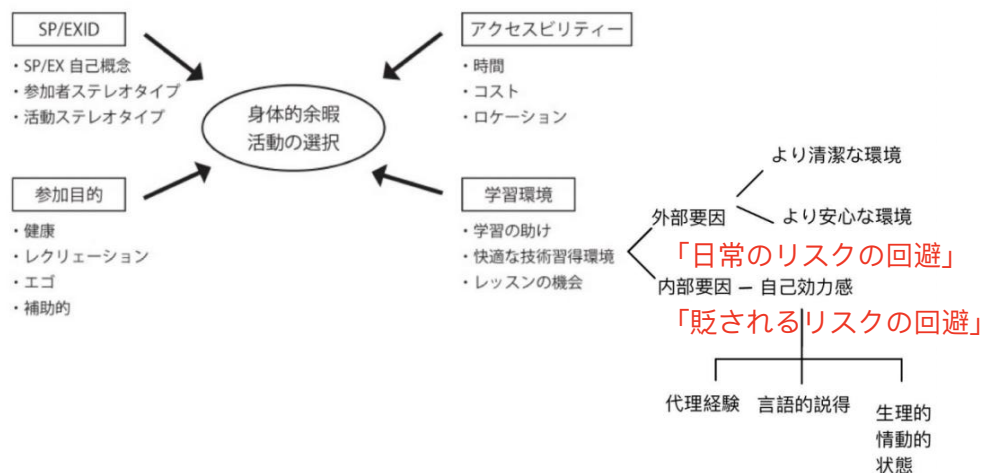


図 2 作業課題 1 のための理論的枠組み（筆者作成）

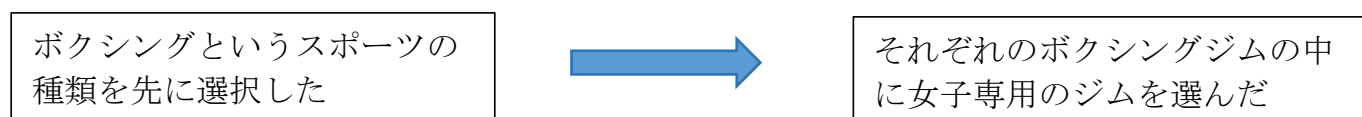
本節では，分析用の理論的枠組みを提示したが，次の節では利用者 A と利用者 C のケースを例に，二人のデータを整理し，二人のケースで確認された要因が SP/EXID 理論をベースに当てはまるかどうかを詳細に検証する。

第 2 節 インタビュー利用者 A と利用者 C のケーススタディ

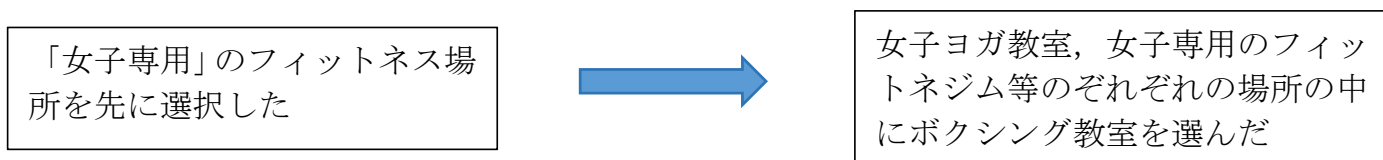
本節では，インタビューデータの質的分析結果についての記述を行う。利用者 A と利用者 C の例を挙げて，実際の語りのデータとともに，インタビューが当ボクシングクラブを選択するに至った思考過程で影響を受けた要因をその解釈とともに提示する。

会員たちが女子専用のボクシングジムを選択したことに至るまでは，2つのパターンを想定する。

パターン 1



パターン 2



パターン1に該当する人は、どうしてもボクシングを始めたいと思っており、女性専用のボクシングジムがなくても、他の男女混合のボクシングジムに行くことが想定される。ただし、他のボクシングジムよりもここが彼女にとってより良く、適していると感じさせるいくつかの要因があるため女性専用のジムを選択していると考えられる。そのため、女性専用の環境はあくまである程度の補助的な役割を果たしているということである。

パターン2に該当する人は、女性専用のボクシングジムが存在しなければ、最初からボクシングに参加することを選択しない可能性が高い。そして、もし女性専用のボクシングジムがいつか存在しなくなったら、彼女はボクシングをやめるかもしれない。そのため、パターン1とは異なり、女性専用の環境がここで決定的な役割を果たしていると言える。

収集したデータを分析してみると、パターン1に該当すると考えられたのは9人で、パターン2に該当すると考えられたのは1人（E）である。

普通のジムに行った経験があって、ランニング中に幾つかの男性がそこで喫煙していた...（中略）...女性専用のクラブを選んだのはそれも繋がる。なぜ以前は他のボクシングジムに行くのをためらっていたのか、それはほとんどのボクシングジムが男性が主体だったからだ。今回はせっかくこれ（女子ボクシングジム）を見つけたから、行ってみようと思った。（利用者E）

本研究の主要研究対象10人とアンケートだけ協力者1人の合計11人の中に、「女性だけの環境は貴方にとっては重要ですか」という質問に対して、「とても重要」だと答えた人は3人だけである。その3人の中には、女子だけの環境ではないとボクシングはしないと答えた人は利用者E1人のみであり、そして、男女混合の環境でもよいが「女性だけの環境」を意識的に優先的に選択したと答えた人は2人（利用者Cと利用者Q）であった。ただし、利用者Cと利用者Qは、「重要」と回答したが、もし女子だけのボクシングジムがないなら普通に男女混合のボクシングジムに移ると語っていた。他の8人は、意識的に「女性だけの環境」を選択したわけではなく、「ただ自分が快適に感じる場所を選んだだけで、たまたまそれが女性専用であった」と語った。一見すると、最終的にこうしたフィットネス空間を選んで、ボクシングを継続する原因は「偶然性」であると考えられるが、もう少し探っていく必要があるだろう。そのため、「女性だけの環境（女性専用）」であることと、8人が述べていた「快適な雰囲気」の間には関連性があるか否か、またどのような関

係性があるのかについて焦点を当てていく。

第一項 利用者 A のケース

私自身はスポーツが好きだったから、大学時代はバレーボールをしていた。しかし、上海に来てからは、バレーボールのような団体スポーツができる場所はなかなか見つからなかった。ここ(女子ボクシングジム)に来たのは同僚に連れられたんだ。彼女は以前男女混合のボクシングジムでやったこともあるし、その後にここに気付いて、無料レッスンを体験した後に私を連れて来たんだ... (中略) ...彼女は男性がいるボクシングジムは不潔だと感じた。「男性がスポーツをするときの汗が多いから臭くて、より清潔な場所が好みだったなあ」と彼女が私に語った。私自身がその場所に行ったことはないが、彼女がそう話してくれたので、男女混合のボクシングジムには行かなかったのだ... (中略) ...男性の視線を気にするかどうかについては、私は何かをするときは集中力が高くて、一度集中し始めると、他人の視線などはあまり気にしない。特に運動ではさらに集中が必要だろう。むしろ大学時代にバレーボールをする時にもう慣れていて... (中略) ...そう、男性と一緒にしていたのよ。だから異性の目線とか全然気にしない。(利用者 A)

利用者 A はインタビューでの質問に対し、男性に見られることにはそれほどの抵抗は感じないと答えており、利用者 A がより抵抗を感じたのは、男性の視線ではなく、男性の汗や体臭だったのである。当ボクシングクラブは女性専用なので、当然、男性の汗や臭いはなく、利用者 A はここではより快適に運動できると思ったという。さらに、利用者 A がカーブスを選んだ理由として、当クラブの雰囲気や人間関係に関することを挙げている。

私は上海でバレーボールをしてみたこともあるが、その体験は非常に悪かった... (中略) ...私が新人のときにこの環境に来たからかもしれませんが、よく理解できていなかった。新入りで環境にもあまり慣れていないし、男性が差別的な態度をとるというわけではなく、むしろすべての能力があなたより少しだけでも高い者が、差別するのだ。明らかに(悪意を)感じていた。男性も女性もそうなので、二度と絶対行かない... (中略) ...自分が上手くないとしても受け入れてくれるし、より包容性があって楽しい雰囲気のいいチームを見つけるのは難しいと感じている... (中略) ...ここ

はね、少なくとも彼女たちは言わないでしょう、「あなたは下手です」「腰をひねる姿勢はおかしい」なんて話。先生（つまりコーチ）もあなたのことを言わないし、不足点を指摘するが笑ったりはしない。クラスメート（つまり会員たち）も、「それは違うよ、こうすればいい」と教えてくれる。私はこのような雰囲気が大切だと思う。ここはね、たとえ知り合いじゃなくても、皆友達のように話しかけてるでしょう。特に親密な関係でも言えないが、みんながお互いに馴染んでいる親切的な感じがする。他のジムに行ったらこのような雰囲気があるかどうか分からないのだ。帰るときに「バイバイ、またね」と言うと、みんなが返事をしてくれる...（中略）...私が b-monster^[3]で体験したとき、その場所は完全に減量を目指す雰囲気だった。まるでクラブで踊っているかのようで、人々は非常に密集していて、通路も狭く、対面に誰かがいれば横にも誰かがいるような感じ...（中略）...休憩の時間すらなく、他の人と話す余裕もない。雰囲気は非常に緊張感があり、だからこそ皆が来て練習し、練習した後は誰もが話すこともなく友達になることもないらしい。（利用者 A）

他のスポーツの場で嫌な経験をしたことがあるからこそ、円滑な人間関係を利用者 A が特に重要視している。その経験から、利用者 A は他のスポーツの場に対して不信感を抱いており、女子ボクシングジムに対する信頼も高まっていた。ボクシングクラブ内の友好的な雰囲気が利用者 A を快適に感じさせた。この雰囲気は会員たちの交流を促進し、時にはスポーツ以外の生活、例えば利用者 A が言及したような学業や職場での助けとなることもある。また、利用者 B も同じような感想を述べていた。

私が覚えている限り、会員たちの中は医学生が 1 人いた。彼女はここで同じ学院の先輩と知り合った。その先輩はとても優秀なお医者さんだ。雑談中で 2 人は同じ病院で働いていることがわかって、お互いに WeChat を交換し...（中略）...彼女たち二人が出会うきっかけとなった。（利用者 A）

おそらく（皆）の性格が異なるかもしれないが、でも価値観はほぼ同じで、一緒におしゃべりしたり、雑談をしながらお酒を飲んだり、お互いを知ることができれば、それは副次的な効果ではないかって。ここでは医者も弁護士も、美容研究者、IT、銀行業者など、さまざまな職業の人がいる。普通にはこれらの職業に触れることもなかったかも...（中略）...彼らとの雑談を通じて、新

[3] b-monster : 暗闇ボクシングチェーン店

しい知識や視点を得ることもできるし、何かトラブルがあったら相談できる人脈になれるわけだ。かつ利害関係もないし、不愉快なことが起きる心配もない。これは程よい距離を保つ関係だって、純粋な大人同士の友情だ。（利用者 B）

価値観が似ているし、時折お互いに助け合えるし、お互いの生活に過度に干渉することはなく共にリラックスできることを述べている。そのような人間関係は、利用者 B にとって心地よいと感じさせるものであった。

ボクシングを学ぶ理由について、利用者 A は、「ボクシングでなければならないわけではない」と述べている。利用者 A 自体はスポーツが好きで、さまざまなスポーツの経験があり、自分の健康へのスポーツの影響を最も重視している。

小学生の頃はバスケットボールをしていて、中学ではバドミントン、高校 3 年間と大学 4 年間ずっとバレーボールをやっていたんだけど...（中略）...私はスポーツする目的はやっぱり汗をかくことなんだ。（利用者 A）

利用者 A の最も重要な目的は「健康」である。しかし、汗をかくことを望んでいるものの、ただ大量の汗をかくことだけで技能を身につけることができないようなスポーツ（例えば b-monster のボクシング体操）には興味がない。利用者 A がスポーツ種目を選ぶ際にもう一つ重視しているのは、「新しいことを学べること」であった。

ボクシングジムでは少なくとも新しいことを学べるが、b-monster のような場所では学ぶことができない。...（中略）...そこはまるでエクササイズバイクのようで、ボクシングとエアロビクスが組み合わさって、リズムは速すぎて、動作が正確かどうか全然わからないし...（中略）...コーチは単に指示を下すだけで、指導はない。私は他の人がどうやって打つかを見るしかないんだ。（利用者 A）

換言すれば、利用者 A にとって、まず健康を促進するために体育活動が必要であり、その基礎の

上で、特定のスポーツのスキルを身につけることが望ましい。ただし、ボクシングで無くても構わない。代わりに、水泳などの他のスポーツ活動も選択肢となる。

もしその時に女性専用のフィットネスジムがなかったら、...（中略）...ボクシングを選ぶことはなかったかもしれない。実際には他の選択肢もあるからだ。（利用者 A）

もし当時女性専用のフィットネスジムがなかったら、利用者 A はおそらくボクシングを選んでいなかっただろう。つまり、その女性専用ジムは利用者 A がボクシングに参加する上で非常に重要な役割を果たしていたのである。ただし、利用者 A が女子ボクシングを選んだ理由は、「異性または他人の目線に不安を感じる」からではなく、清潔感と友好的な雰囲気がより大きな影響を与えたからだということであった。というのも、利用者 A は男性と一緒にスポーツをする経験も比較的豊富である。

男性との練習や対戦も OK だ。ただし、一つ気になっていることもある。それは、もしこの男性が実は私との差が大きくて、彼は力が強くて、彼にとって私と練習はいつも実力を発揮することができないなら、彼も不満になるかも...（中略）...これは相手に対しても（不公平だろう）。そしてあなたもいつも譲られている状態で、弱い立場に置かれているて.....大学でバレーボールをしていたとき、私と仲良い後輩がいたが、練習の上では、彼はよく私を嫌っていた...（中略）...よく文句を言っていた...（中略）...最初、彼とあまり親しくなかった頃、私はこのことに関心していた。元々、自分はそんなに下手ではないと思っていたのに、他人に言われると自分が本当に下手なのではないかと疑問に感じるようになった...（中略）...もちろん、彼らが重要な試合に備えてトレーニングを行う場合、私たちは参加できない。ただ彼らのトレーニングを見学するだけで...（中略）...しょうがないね、人数不足で、女子チームを組むことができないから、女子チームの試合に参加する資格がない。（利用者 A）

実は、利用者 A は男性と一緒にスポーツすることに抵抗はなく、特定の場面では男性とのスポーツ活動のトレーニングが自分の技術水準をより良く向上させると考えている。

私自身では、女性は自分の能力を向上させる必要があると考えている。なので、彼らと一緒にトレーニングできるのは貴重な体験だと感じる。その時最も優秀なセッターも男性で、優れたセッターは珍しくて、普段、彼と一緒にトレーニングする機会が少ないんだ。そのため、彼がいると一緒にプレーして自分の技術を向上させることができると感じる。このような機会をととても大切にするから、彼がいる時私いつもそのチャンスをつかんで積極的に参加していたよ。（利用者 A）

利用者 A は男性と一緒にスポーツ活動に参加することをいくつかの側面から肯定している。例えば、技術向上の面で特に有益であるという点である。しかし、男性と一緒に練習することは、元々現実の環境に対する妥協した結果でもある。それは、女性バレーボールが参加者不足によって、チームを組むことができず、試合に参加できず、女性だけの練習ができない状態となってしまうからである。それによりトレーニングの機会が減少し、男性のトレーニングを傍観するしかない。客観的な先天的な生理的差異と、限られたトレーニング機会が相まって、彼女たちの弱い立場を一層強めている。これは現代の女性が依然としてスポーツ分野で副次的で従属的な位置にあることを反映していることがわかる。

そして、バレーボールとは異なり、ボクシングはより密着し、一対一のスポーツである。実力の差がある程度を超えると、技術向上に寄与することができなくなる（力の強い方が完全に補助として機能し、実力を保持する場合を除く）。一方、女性と対練する場合、一方が多少力が強くても、力の差が著しくないため、双方がより投入できるという利点があるといえる。

女性の中では、私の力はかなり強い方だと言える。以前、私はコーチと練習する時、彼女は、もし同級生と対戦する場合、もう少し控えた方がいいかもしれないとまでいっていた。でも実際には、みんなが「まあ、まあ大丈夫だよ」と思うんだ。例えば、私と B が対戦すると、B のパンチは私よりも強いかもしれないが、それでもまあ大丈夫だ。私たちは決して「私は無理、抵抗できない、退くしかない」とはいわないよ。（利用者 A）

利用者 A は弱い立場に置かれたり助けられたりすることを望んでおらず、自分を弱い立場だと見なされることも嫌がっている。運動への参加に影響を与える最も大きな心理的要因の一つは、自己効力感（Self-efficacy, Bandura, 1997）である。利用者 A は女子ボクシングジムで運動することで、

運動を継続する上でより高い自己効力感を持つことができると考えられる。これは、マズローの欲求階層における「自尊心と認知の欲求（認知欲求）」とも関連していると見られる。

最後に、アクセシビリティも考慮しなければならない要因である。

多くのスポーツでは仲間が必要で、また最初から始める場合、コースを受講する必要があって、コストも考慮する必要かな。以前はテニスを練習しようと思ったこともあるが、コストは本当に高すぎてやめた...（中略）...ここは私にとって距離的にも良い方で、自宅から行くか会社から行くも、時間的にも都合がいい...（中略）...このジムの価格は高くはない方で、もっと安いところはかなり遠くなる。（利用者 A）

価格と場所に関しては、利用者 E も似たような回答をしている。

こちらのコースの価格もかなり妥当な感じで、そしてメインのコーチも素晴らしくて、気に入っている。住んでいる場所からも近く、総合的に考えるとちょうどいいわね。（利用者 E）

時間、コスト、ロケーションは影響要因であることがわかる。同時に、当クラブの価格設定を見ると、ここでは「ピンク税」^[4]の影響は見受けられなかった。

したがって、利用者 A のケースでは、「雰囲気」や「社会的欲求や承認欲求」、「男性の汗臭さへの嫌悪感」、「価格、アクセス時間やロケーション」といったものが、当クラブを選択する上で影響を与えた要因であることが明らかとなった。

SP/EXID 理論でスポーツアイデンティティの形成に影響を与える「SP/EXID」を利用者 A のケースに当てはめる場合は、利用者 A の SP/EXID 自己認知（スポーツが好きで、力が大きくて、スポーツ経験が比較的豊富であり、性格も比較的活発で、おとなしい女性ではない）と、ボクシングスポーツ参加者ステレオタイプ（大胆的、アグレッシブ）及びボクシングのステレオタイプ（技術と力が必要、何らかの技術の習得が可能）のマッチが考えられる。SP/EXID 理論で「目的」を利

[4] 「ピンク税」ピンクタックス（英: pink tax）とは、欧米諸国で設定されている女性用商品というだけでかかる「謎の税」のこと。たとえばシャンプー、ボディソープ、カミソリ、シェービングクリームなど、男性商品と似たようなプロダクトにもかかわらず割高に値段設定がなされている（米国議会合同経済委員会によれば、世の 43 パーセントのプロダクトに対して女性が割高に支払いをしている）。ピンク税は性差別ではなく経済学である、という意見もあるが、実際に「まったく同じ子ども用リュックが、ボーイとガールの色違いで値段が倍も違う」という例も報告されている。女性向けに販売された製品やサービスが、男性向けに販売された製品やサービスよりも、高価な傾向にあることを表現した言葉である。この現象は、ジェンダーに基づく価格差別に起因することが多く、対象となる製品の多くがピンク色であることから、この名前が付けられた。

利用者 A のケースに当てはめる場合は、「健康（汗をかくこと）」が考えられる。SP/EXID 理論で「アクセシビリティ」を利用者 A のケースに当てはめる場合は、「時間」、「コスト」と「ロケーション」が考えられる。SP/EXID 理論で学習環境の形成に影響を与える「快適な技術習得環境」を利用者 A のケースに当てはめる場合は、「女性同士が話し合って助け合う和気藹々な雰囲気」、「社会的欲求や承認欲求が満たされる環境」や「男性の汗臭さのないより清潔な環境」が考えられる。したがって、SP/EXID 理論でいうところの「身体的余暇活動」を「女子ボクシングジムでの運動」と置き換えると、利用者 A のケースで確認された要因は SP/EXID 理論をベースにして検証できると考えられる。

第2項 利用者 C のケース

次に利用者 C のケースを用いて、SP/EXID 理論の検証を行う。まず、なぜボクシングをフィットネスとしてやっているのかに関して、利用者 C は「技術的なスキルを学びたいと思ったからだ」と述べている。

以前は卓球などを練習していた。実際、卓球で2級のスポーツ選手資格があるね。ただのフィットネスジムのような、主に力のトレーニングが中心のものでは、技巧性が欠けていると感じた。それは総合的なトレーニングではないと思う。私にとってはあまり魅力的ではないと思う...（中略）...実際、ボクシングも私の最も優先てきな選択ではない。実際には総合格闘技またはウィン・チュンを学びたかったのだが...（利用者 C）

利用者 C が何らかの技術面の自己成長を望んでいることが読み取れる。それは、SP/EXID 理論における「目的」の中の「エゴ」と繋がっていると考えられる。女子だけのボクシングジムを選んだ理由について、利用者 C は以下のように述べている。

消費の選択とは、自分のほしい世界への投票だと思うからだ。女性専用ジムは女性にとってより良い環境だと思うから、喜んで金を支払うと思う。私は、選択肢がある限り、女性のことを支持するものを絶対に選ばないタイプだ。これは男性を嫌っているわけではなく、男性のほうが悪いと思っているわけでもない...（中略）...私は小さい頃から成長環境や受けた教育の影響で、特に留学す

る期間に外国のより平等な環境に触れ、（今の環境の中の）不平等な現象を更に痛感した。そのため、機会がある限り、女性のエンパワーメントとか女性のキャリア発展をサポートしたいと考えている...（中略）...私はそう思っている。（利用者 C）

利用者 C は、男女混合のジムには行ったことがないと述べているが、以前は男女混合型のフィットネスジムでトレーニングしていた経験がある。

（混合型）ボクシングジムには行ったことがないが、さまざまなフィットネスジムには行ったことがあって...（中略）...非常に良い男性トレーナーに出会ったこともある。彼はとても良い人で、プロフェッショナリズムもあり、また、有害な男らしさを感じさせることも一切ない。しかし、もう一つの経験したジムはとても嫌で全然だめだ。そこでは一部のメンバーやトレーナーが非常に失礼で傲慢だった...（中略）...非常な印象深い出来事があった、ある日、幾つかのコーチと男性会員たちが一緒になって話していて、そこには一人の女性会員が来て、彼女は自分の携帯に保存されている友達それとも誰かの写真を持って、そのジムの男性トレーナーに見せて、その女性の容姿に何点をつけるか聞いた。するとそのトレーナーは、「もし彼女が D カップ（の胸）を持っていたら、90 点だろう」と言った。私がその言葉を聞いて感じた気持ち、分かってくれるよね？その瞬間、マジでキモいと思う。（利用者 C）

男性だけでなく、女性を尊重しない女性や、利用者 C 自身の見解で性別に関する考えが時代遅れだと感じる女性に対しても、「ああいう人たちと関わりを持ちたくない」と利用者 C が表明していることがわかる。

...（中略）...またある時、ジムに別の女の子がジムに来た。とてもスリムで美しいタイプの女の子だ。さっき話したその（他人の写真を見せて評価してもらう）女性会員はずっと彼女をじろじろ見つめていて、「自分もあんな風になりたい」と言っていた。私は常に「女性は女性を支えるべき」と信じているので、彼女を励ました。私は「そこまでしなくても、あなたの今の体型も素敵だし、何より大切なのは自分自身を受け入れることだよ。健康や幸せを求めて運動しているんだから」と言っていた。しかし、彼女は「でも、あの子みたいにならないと（いけない）、そうすれば結婚し

やすく、男性に好まれる」と答えた...（中略）...実際、私の周りにはもうそんな時代遅れの考えの人はあまりいないから、とても衝撃を受けた。これが私が住む世界を再認識するきっかけになった...（中略）...彼女を非難することはできん...（中略）...なぜなら、彼女が思うようになったのは、家父長制が彼女をs形作ったからだ。彼女も被害者なのだ。彼女が早く目を覚ますことを願っている。（利用者C）

利用者Cは、自分の成長環境と教育経験で、比較的進歩的な考えと厳格な基準を持つようになったと自認している。そのため、女性に対する尊重を払わない環境には耐え難いと感じている。以前の男女混合のジムでの悪い経験が、後に女子ボクシングジムを選ぶ影響を与えたようである。ただし、利用者C自体は異性からの視線や注視に対してはあまり心配していないと述べている。

個人的には、私は実は（異性目線に）そんなに心配していない。なぜなら、私は簡単にいじめられるタイプではないから。彼らは弱い者に強く出るタイプだけど、私の性格が激しいのを知っていて、議論では絶対に私に勝てないとわかっているから、私に何かする勇気はない。でも、前のルームメイトは私と一緒にその毒気のあるジムにいた。彼らは彼女のことをよく話して、からかって、いじめやすいと思っていたけど、私にはあまり手を出せなかった。私は手に負えないように見えるから、彼らは私をターゲットから外した。でも、それはジムにそのような現象がないというわけではない。あなたが私に話したその話を思い出してみて。彼らが女性について話さないわけではない。心の中では、彼らはまだそういう古い考えを持っているかもしれないし、だから信用できない。（利用者C）

最後に、利用者Cは女子ボクシングジムを選ぶことが、すべての男女混合の運動空間や男性トレーナーを否定したり疑問視したりするものではないと強調した。

以前出会った素晴らしいコーチのように、彼は非常にプロフェッショナルで、現役のアマチュアの格闘選手でもあるが、傲慢ではなく、有害な男らしさも一切ない。彼は私たちを彼の「会員」と呼んでいるが、あの毒気のあるジムの男性コーチは、私たちを彼の「生徒」と呼ぶ。私は言語学を専攻していたので、このような言葉遣いにすごく気になっている。これには彼らの態度や人格がよく

見られる。経験豊富なフィットネスコーチなら、あなたを彼の「会員」と呼ぶことで、まずサービス精神があること、次にこの業界に長くいるために適切な業界用語を知っていること、最後に有害な男らしさを持っていないことを示している...（中略）...性別自体は問題ではないと思うが、問題は、それが問題になり得ることだ...（中略）...私が避けたいのは、特定の男性ではなく、男性優位の社会だ。（利用者 C）

利用者 C が女子ボクシングジムを選ぶ理由は比較的に特殊である。利用者 C はかつて在居っていた男女混合のフィットネスジムで「男性が女性に対して性的な評価をする」といった状況に不快を感じ、男女混合環境での不快な経験への懸念を指摘している。素晴らしい男性トレーナーにあったことも当然にあるが、このような不快を避け、より快適で尊重された環境でスポーツに参加できるようにするため、女性だけの場所を優先的に選択するように決めていると述べた。一見で、その選択要因は、「異性の視線への不安」に分類されるかもしれないが、利用者 C が、女子ボクシングジムを選ぶのは、単に自身のためだけではなく、女子ボクシングジムが代表する価値やもたらす影響についてより深く考えを持っているからであると語っている。実は、自分の精神面は強くて異性の視線に対して不安を感じないと考えているが、女子ボクシングジムのような女性に配慮のある環境が健全に発展することを望んでおり、そこでの消費はその場所にとっては金銭的な支援になり、女性全体のためにより良いフィットネス環境を整えることに助けになると、利用者 C は考えている。

「私が避けたいのは特定の男性ではなく、男性優位の社会全体だ」という語りから、利用者 C が社会全体の構造に対する懸念と、性別平等に対する期待が示されているといえる。「女子ボクシングジムを選ぶことで、女性に優しい環境の整備に応援する」というフィットネス空間を選択する際の考え方は、今までの先行研究で見えない新しい示唆であり、「自己のためだけではなく、女性全体がスポーツにより良く参加できるようにするために、私は何ができるか」という視点転換がうかがえる。

SP/EXID 理論でスポーツアイデンティティの形成に影響を与える「SP/EXID」を利用者 C のケースに当てはめる場合は、利用者 C の SP/EXID 自己認知（卓球競技で国家 2 級運動員の資格を持って、スポーツ経験が比較的に豊富であり、性格も比較的に個性である）と、ボクシングスポーツ参加者のステレオタイプ（非伝統的、勇気がある人）及びボクシングのステレオタイプ（技法、技巧性と力が必要、何らかの技術の習得が可能）のマッチが考えられる。SP/EXID 理論で「目的」を利用

用者 C のケースに当てはめる場合は、「レクリエーション（つまりストレス解消や生气回復である。利用者 C は、「プロジェクトが終わったら残業に戻る、ストレス発散しきれたから精一杯に仕事に集中するから上司も納得した」と冗談意味を持ちながら述べた）」や「エゴ（自己成長）」が考えられる。SP/EXID 理論で学習環境の形成に影響を与える「快適な技術習得環境」を利用者 C のケースに当てはめる場合は、「女性を尊重し、女性に優しい環境」が考えられる。したがって、SP/EXID 理論でいうところの「身体的余暇活動」を「女子ボクシングジムでの運動」と置き換えると、利用者 C のケースで確認された要因は SP/EXID 理論をベースにして検証できると考えられる。

本節では利用者 A と利用者 C のケーススタディから、二人が女性ボクシングジムを選択したことに至るまで思考過程を整理してきた。利用者 A や利用者 C と同様に、他のインタビューが挙げた理由も主に「雰囲気」、「社会的欲求や承認欲求」、「男性の汗臭さへの嫌悪感」などに焦点が当てられており、さらに利用者 H や利用者 J が指摘した「より多くの学習の機会」を加えると、女性が女性ボクシングジムを選ぶ理由はほぼ網羅されているといえるだろう。

第3節 補足としての理論的枠組みの要素に当てはまる他のインタビュー達の語り

本節では、他のインタビューが挙げた理由も利用者 A と利用者 C のデータの補足として確認していく。

(1) 「学習の助け」に当てはまる語り

それについては、いくつかのインタビューは同様の意見を語っている。たとえば、利用者 D は次のように表現している。

初級クラス、初級クラス、中級クラスなどに分かれているが、長い間に練習している人（中級や上級の会員）も時々基本や初級のクラスに来るわね...（中略）...動きや振る舞いがまだ下手な当初、彼女たちはいつも助けに来て、どこで力を入れるべきか、または動きが正しくない箇所を指摘してくれた。これは非常に温かくて他人の善意を感じた。これが私にとってボクシングをする過程での最も楽しいもんだ。（利用者 D）

(2) 「快適な技術習得環境」に当てはまる語り

本章第1節で議論したように、「快適な技術習得環境は、外部要因と内部要因で構成されていると想定する。まず、外部要因としては、「より清潔な環境」と「より安全な環境」で構成されていると考える。「より清潔な環境」というのは、男性の体臭や汗臭などの不潔な要因が排除されることを指している。

以前はとあるジムに行った時、ランニング中に、入り口で数人の男性がタバコを吸っていて、すごく嫌な感じ。(利用者 E)

公共のヘルメットを被るよりも、パンチを受ける方がマシです... 時間があれば、私たちの女性ボクシングジムに交流に来てください。私たちのヘルメットは臭くないですよ （利用者 F）

(女性専用ジムについて) この理由は私にとってそれほど重要ではありませんが、初心者として始める場合は、女性ボクシングジムを特別に選ぶ方が良いかもしれません... 完全に経験がない人にとっては、こちらを選ぶ方が参加しやすいでしょう。最初は気になることが多いですから... 例えば、男性との体力や力の差、また男子ボクシングジムの衛生状態は一般的に良くないですし、体温や汗の匂いがある。(利用者 J)

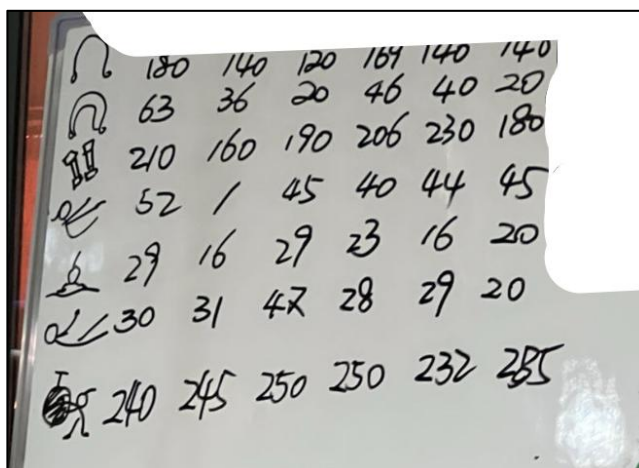
次に、外部環境を構成する「より安全な環境」についても、ほかのインタビュー어의語りから分析すると、異性からの不快感の可能性が完全に排除されるといえる。

男子だけじゃなくて、私たち女子だって汗くさいことがあるよね。運動したら汗をかくのは避けられないことだし。男女混合のジムもアリだと思うけど、最低限のお互いの尊重は必要だよ。実際、男性が女性を尊重していないというより、社会全体が女性をちゃんと尊重していないのが問題なんだ。今の社会では男女平等って言われてるけど、実際はそうじゃないんだよね。その考え方はまだ変わってないと思う。だから、こんな社会環境だと悪いことが起こる可能性もあるわけだし.....。男女混合のジムのほとんどはいいところだと思うけど、たまに良くないところに当たるリスクもあるんだよね.....。私も前にボクシングをやったことがあるけど、それはジムのクラスで、私と親友が参加して、たまたま2人の男性コーチがいたんだ。彼らが間違ってるとは言えないけど、私は今、男女の身体的接触にそんなに気にしてないの。昔みたいな封建的な時代じゃないから、ちょっと触れ合うくらいは気にしない。例えば肩を触るくらいなら全然 OK だと思うよ。でも、一度、楽しく笑ってリラックスした雰囲気の中で、手を使って動きをする時、動きが間違ったら、彼が私の頭を軽く叩くようなことをしたんだ。それはちょっと私には合わなかったな... (中略) ...その時は体験クラスだったから、まあいいかと思ったけど、長期的にはちょっと不快感があるかもしれない。だって、彼は知らない人だし、異性だし、そういう行動はちょっと親密すぎる感じがする。そんな小さなことを彼に言うのは無駄だと思うし、冗談が通じないわけじゃないけど、みんなで場を気まぐれにする必要もないしね。でも、長期的にそういうことが続くなら、ちょっと快適じゃないかなと思うよ。(利用者 B)

また、内部要因としては、自我効力感についての語りから検証する。具体的には、①「制御体験」、②「代理経験」、③「言語的説得」、④「生理的情動的状态」が挙げられる。その中でも、①「制御体験（成功体験によって達成感を得ること）」は、男女混合型ボクシングジムもえられる経験なので、女性だけの場だからこそ異なる要因として現れる可能性のある②③④に焦点をあて、議論することにした。

②「代理経験」については、コーチ陣も全部女性であり、その中には、そのジムで初級から段階的に中級、高級、そして助手、さらにはコーチに昇格した人もいる。このようなロールモデルが存在することは、経験の代理が提供されていると考えられる。混合型ボクシングジムと比べると、昇格意欲の強い会員たちにとっては、追従できる目標や模倣可能なパターンが容易に見つけられる点が女性専用ジムにおける経験になるといえる。

③「言語的説得」については、コーチが会員の体力指標を定期的に記録し（図3）、優れた成績を収めたメンバーに対して励ましや賞賛を行っていた。男性会員がいない環境では、客観的な生物学的差異で決められる力の差に開きがなく、数値的に見ると圧倒的差があまり見えない。こういう環境において女性たちがより自信を持って参加できるという利点がある。これは女性たちにとってポジティブな環境を提供し、自己評価や自己信頼心の向上に寄与すると考えられる。



Ω	180	140	120	169	140	140
Ω	63	36	20	46	40	20
Ω	210	160	190	206	230	180
Ω	52	1	45	40	44	45
Ω	29	16	29	23	16	20
Ω	30	31	42	28	29	20
Ω	240	245	250	250	232	235

出典：参与観察を実施したジムに掲載されている体力指標を写真にて筆者が撮影

図3 体力指標の記録



図6 互いに励まし合う言葉や冗談とかの書かれた付箋が貼られた写真フレーム（筆者撮影）

④「生理的情動的状态」については、例えば、理由は詳しく説明してもらえなかったが、利用者 E が「女性団体の雰囲気は、私がより好みで、漠然としてより快適に感じる」と述べていた。

女性グループのような雰囲気は、よりリラックスできて好きですね... (中略) ...女子だけが楽しい... (中略) ...また、このクラスの料金が適切だと感じる。そして、主コーチや他のコーチもとても良い人たちで、すごく気に入っている。総合的に考えた結果... (中略) ...そういうわけだ... (中略) ...当然距離は重要な選択要因ですね。(利用者 D)

コーチも雰囲気もすごくいいと思っている。この快適なスペースが提供されるのは、性別が一つだけの環境とも関係があるかなと思う。実際、男女混合のジムでも、本当の平等を感じられれば、その人たちとの付き合いはすごく心地よいですし、抵抗感もない。彼らと一緒にパートナーとしてクラスを受けるのも全然 OK だ... (中略) ...張偉麗が有名人になってから「彼女が将来夫を DV するんじゃないか」というコメントもあったし、そういう風にコメントする男性は自分の地位が脅かされていると感じて、脅威を感じているかなって... (中略) ...ああいう人はただ一部(わずか)だと思ったが、あったら絶対嫌だ...実は、ここが女性専用のクラブだからってという理由で来たわけじゃないんだ。比べてみたら、ここが一番心地よく感じたんだからね。そりゃも偶然だね。もし、普通の居心地の良い混合型ボクシングジムと先に出会ったら、そのままであそこにいくかも。(利用者 B)

プログラム終わった後、一緒に手をつないでストレッチをしたり，特殊のポーズで写真を撮ったりできるのは，他の場所では体験できないことだ。（利用者 F）

（私が出会った）男性コーチと女性コーチは技術的には同じで，どちらも非常にプロフェッショナルだった。しかし，生徒同士の交流については，こちらの雰囲気がより良いと思うよ。みんな女の子だから，共通の話題が多く，こちらの方が居心地が良い。実際，コーチの専門的な指導以外にも，雰囲気は非常に重要な要素かもね。（利用者 H）

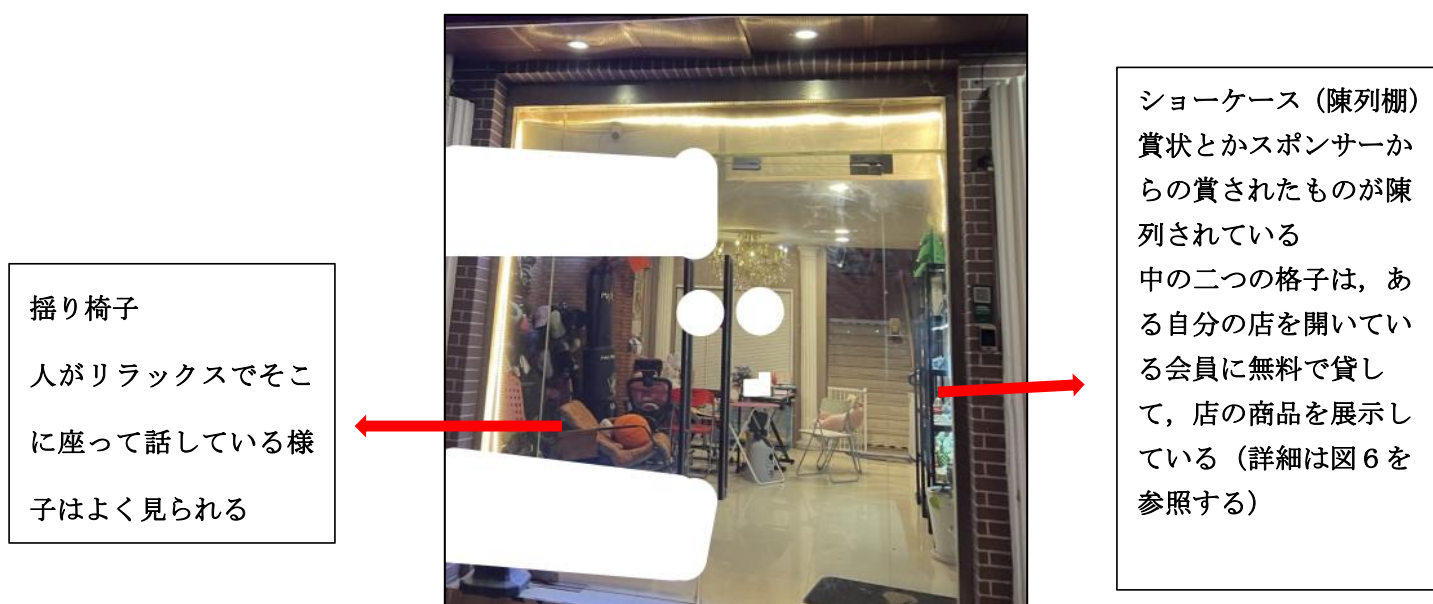
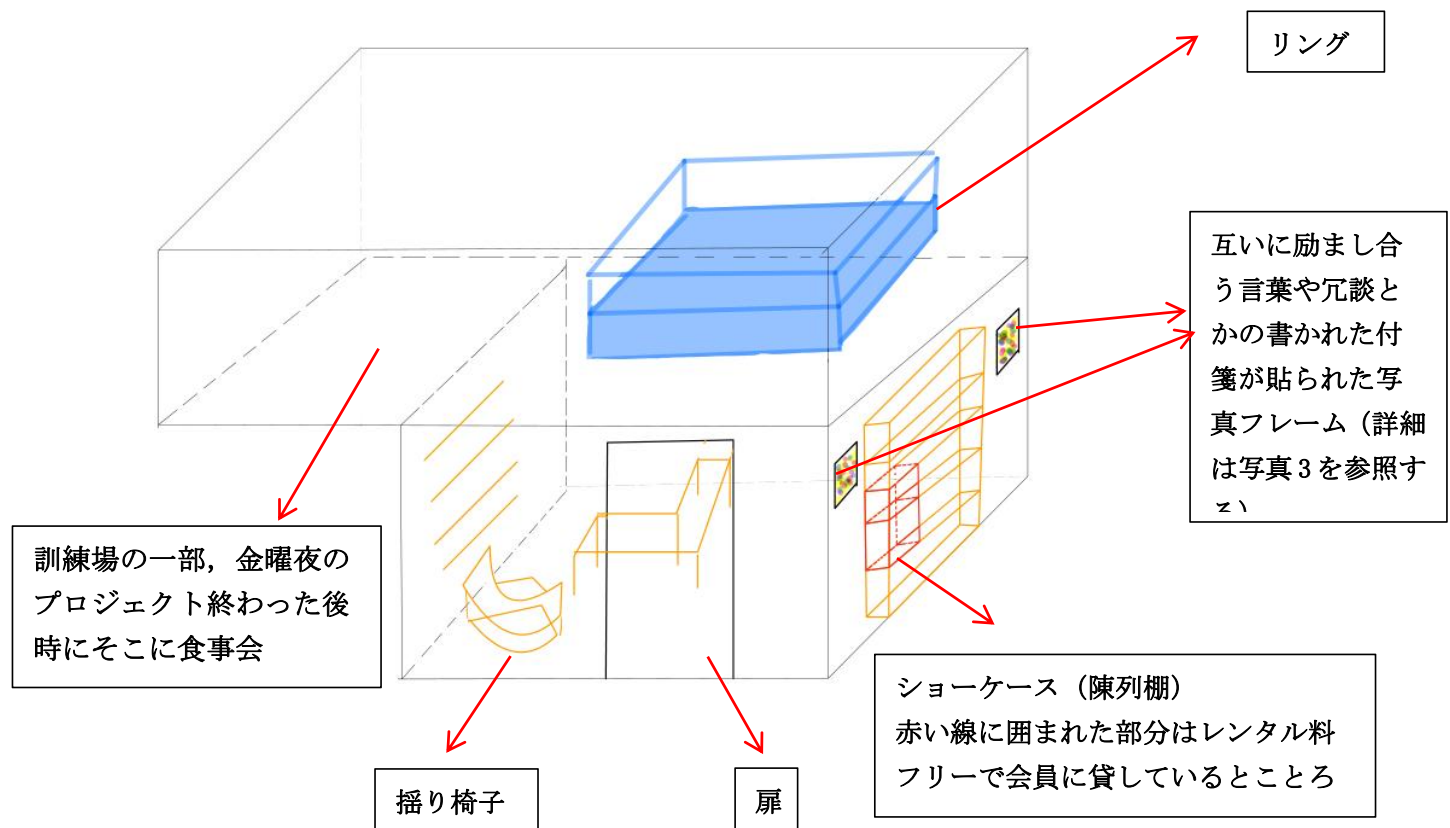


図4 対象であるジムの外から見える様子（筆者撮影）



参与観察によって観察した構造を筆者が作成（実際の配置をなるべく再現したがズレが生じる可能性もある）

図5 対象となるジムの内部構造

(3) 「レッスンの機会」に当てはまる語り

利用者 H や利用者 J が語ったように、同じ重量階級の人が多いので、実戦練習の機会が多くなる。双方は女性の場合は、ちゃんと相手にされることは、自尊感情や①「制御体験」とも繋がっていると考えられる。

もう一つの理由は、対戦相手の力が比較的等しいことです。以前男女混合のジムに行ったことがあるが... その時は 10 人ほどいて、女性は 2 人だけでした。女性がいらない場合、私には打撃用のパッドを持つ相手を見つけるのが難しいです。（利用者 H）

さらに別の考慮事項として、10 年以上前は女子ボクシングを練習する人が少なく、男女混合のジムでは数十人の男性に対して女性が 2, 3 人しかいないため、実際の対戦のペアが見つけれないことがありました。しかし、女性ボクシングジムでは、自分に合った対戦相手を見つけやすいです。例えば、体重が 65 キロ以下、特に 55 キロの場合、ペアを組んで実際の対戦をしたい場合に、相手

を見つけやすいんです。一般のジムではこれが難しいです。なので、実際の対戦の技術向上には非常に役立ちます。もちろん、混合ジムであれば、「女性と一緒に戦わない、男性と戦う」と言うこともできますが、それには2つの状況がある。一つは、初心者の男性が軽い打撃であなたを怪我させるかもしれません。もう一つは、あなたを怪我させることを恐れて手を抜くかもしれません。そうすると、あなたを平等な対戦相手として見ていないことになり、常に手加減されてしまいます。それでは何を学べるのでしょうか？平等な態度で扱われたいですよね、弱者としてではなく。でも、手加減されないと怪我をしやすく、（手加減されると）相手も十分に練習できません... このような激しい対抗性のスポーツでは、男性が避けられない主導権を持っています。私たち女性がこのようなスポーツに参加するには、より緩やかな環境が必要です... 自分に適した人たちと一緒にいると、男性と一緒に強く競争することは不可能です。（女性専用ジムについて）この理由は私にとってそれほど重要ではありませんが、初心者として始める場合は、女性ボクシングジムを特別に選ぶ方が良いでしょう... 完全に経験がない人にとっては、こちらを選ぶ方が参加しやすいでしょう。最初は気になることが多いですから... 例えば、男性との体力や力の差、また男子ボクシングジムの衛生状況は一般的に良くないですし、体温や汗の匂いがありますし。(利用者 J)

実は、上海の男女混合のボクシングジムの清潔さは問題ないですね。6、7年前の状況はよくわかりませんが、最近数年は比較的良好です... ただ、女性専用のボクシングジムであれば、自分の体形に合った（対戦相手）を見つけることができるのは事実です。なぜなら、男女混合のジムでは、男性の体形は一般に高く大柄、またはがっしりしていることが多いからです。ここで長期間練習すると、自分の体形に合った対戦相手を見つけるのは難しくなります。たとえ相手があなたと対戦できたとしても、お互いに全力を出し切ることができません。相手はあなたに配慮する必要があるし、私たちは自分が配慮されている側であると感じることになります。相手も本気で戦うことができません... 実際、技術や手法がどんなに上手くても、本当の一对一の対戦においては多くの問題が発生します。これらの問題を解決するには、（対戦相手を見つけて）練習する必要がある... ですから、他の男性の視線や清潔感などよりも、対練が最大の利点です。男女混合のボクシングジムでは、女性生徒も多いかもしれませんが、あなたが行く時にその生徒がいるとは限りません。

ここでは、互いに助け合うというより、女性の視点で問題を考えることができる場所です... 私にとっては、落ち着いて何かに取り組むことができる場所です... 静かで安らかな場所です... 快適で

穏やかな家のようなものだと言えるでしょう。（利用者 I）

この女性のボクシングジムが存在する限り、私もここに続けるでしょう。この場所には深い感情がある。実際にもしジムが閉鎖されたら、他の方法を考えるか、または混合のジムを探すかもしれませんが、それは後の話です。このジムが存在する限り、やはりここが第一の選択肢です。なぜなら、ここで知り合った人が非常に多く、高度なクラスにはほとんどが古い友人たちがいます。7, 8 年以上の付き合いで、とても早い時期から一緒に住んでいたこともある。...ここは古い友人に会う場所であり、心の港です。（利用者 J）

以上、他のインタビューー達の語りを箇条書きで記述したことで、他のインタビューーのケースで確認された要因も、 SP/EXID 理論をベースにして検証した。

第4節 本章の結論

本節の目的は、会員たちが従来型のフィットネスクラブではなく、女子ボクシングジムを愛好し入会に至る思考過程で影響を受けた要因をまとめて総括することであった。結果の概要は以下のようによにまとめられる。

1) 会員たちがそのフィットネス場所を選んで留まり、そこにボクシングを続ける理由は、男女混合のボクシングジムよりも、そこがより「快適な技術習得環境」を提供しているからであった。本章は、「ただ自分が快適に感じる場所を選んだだけで、たまたまそれが女性専用であった」という「偶然性」の背後に隠された、「女性だけの環境」と「快適な雰囲気（快適な技術習得環境）」の間の関連性を探究した。結果としては、女性限定の環境は、ある程度で「快適な雰囲気（快適な技術習得環境）」の形成に積極的な影響を与えていることが判明した。そして、その「快適な雰囲気」は、「より清潔、安心な客観的な環境」という外部要因と、「自己効力感が獲得しやすい女性に優しい環境」という内部要因で構成されていると考える。そこは、女性専用空間が「日常のリスクを回避する」とことと「けなされるリスクを回避する」とことによって「完全な人格を表現できる」安心感を提供するという先行研究の結論と一致する。

2) 先行研究の中に指摘された知見との食い違いが指摘された。自分の体に対する不安はあまり見えず、本研究の対象となった10人のインタビュー協力者の中には、男性の目線が嫌いとする理由から女子ボクシングクラブを選択するインタビューイはいなかった。逆に、自分の体に対する相対的な自信（たとえ自分の体付けに対してまだ「不満足」と回答したとしても）を現している人は何人もいる。それは、先行研究の中に指摘された「社会的体型不安（Social Physique Anxiety）が高いから女子専用のクラブを選択する傾向がある」という結論とは一致しないようである。要するに、「社会的体型不安」が高いから女子専用のジムを選択する傾向がある、女子専用のフィットネスジムを選択する人は必ずしも「社会的体型不安」が高いとわけでもないことが指摘できる。

3) 女子ボクシングジム利用者たちの人物像について、フィットネスジムを選択する人々の人物像がある程度ではあるが見られた。今回のインタビュー対象者の中、子供の頃から男の子っぽい性格だったと述べている人が何人もいた（例えば、利用者Fは小さい頃から女の子がよく遊ぶゲームが好きではなく、代わりにサッカーが好きだったしテコンドーを学びたがると思っていた。Bも、自分は男らしいと言っていた）。また、彼女たちは運動経験が豊富で、過半数は、ボクシング以外にも他の運動経歴がある。また、年齢層から見るとも20代と30代にの範囲内に集中している。そ

れもスポーツアイデンティティ理論で解釈できると筆者は考えている。

4) 心の帰属としてのフィットネス空間として、女性専用の環境は彼女たちがフィットネス場所や運動種類を選ぶ上で決定的な役割を果たすわけではないかもしれないが、フィットネス場所を選ぶ際には確かに影響を及ぼし、ある程度では彼女たちがボクシングに参加したり続けたりすることを促進しているといえる。もし女性専用のフィットネスジムがなくなったら、他のスポーツに移行すると述べていたインタビューが何人かいた。理由としては、既に一定の期間ボクシングを行ってきてどんどん飽きてしまう気がして、新鮮さを求めて他のスポーツも試したいと感じていると述べていたためである。しかし、彼女たちが現時点でまだボクシングを続けるのは、ここの人々や雰囲気が好きだからであった。要するに、ここで、この場所がフィットネス空間であるだけでなく、一定の社交機能も果たしていることが示される。

5) 最後に、利用者Cの例からは、より特殊な選択要因が見出された。利用者Cは、自分自身の利益を考えの出発点にすることはなく、女性全体の視点から選択を行った人である。たとえば、利用者C本人は異性の視線を気にしないが、選択をする際には、異性の視線を気にする可能性のある他の女性の考えも考慮した。しかし、インタビューのサンプル数が限られているため、他にもこのような考え方を持っている人は存在するかどうかを知ることができないが、これは、先行研究では見られなかった新たな発見であり、Cが「女性個人のエンパワーメントから女性全体のエンパワーメントへの過程」についての深い思考^[5]を示している。これは、次の章での性別秩序に関する考察とも密接に関連している。

[5] 利用者Cの考え方は、「意識的に女性限定の場所を選択することで、異性の視線を気にする他の女性に女性に優しい環境を創造し、女性トレーナーにより多くの雇用機会を間接的に提供し、それによってより多くの女性がスポーツや社会活動に参加することを促進する」というものである。利用者Cへのインタビューを完了した後、筆者が利用者Cとの付き合いで筆者の観察によって、利用者Cが確かにに自分の生活の中でこの考えを意識的に実践していることを知った。たとえば、利用者Cと一緒に掛け出てタクシーアプリで車を予約する時、利用者Cもシステムに女性ドライバーを優先的に割り当てるように選択した。

第3章 女子専用ボクシングジムにおけるジェンダー規範の考察

第3章では、対象とした女子専用ボクシングジムにおけるジェンダー規範の考察をすることを目的とする。分析の内容は、第2章を踏まえて得た選択に影響する要因、インタビュー協力者達の身体ハビトゥス、筆者が参与観察で観察し得たインタビュー協力者以外のクラブ同士とクラブのスタッフ（コーチと経営者）の言語或は身体表現である。

そのために、まず、第1節では、インタビュー協力者達の身体ハビトゥスとその表現を明らかにする。次に、第2節では、ジェンダーによる規範からの考察における分析用枠組みを提示する。さらに、第3節においては、従来のジェンダー規範の変容に当てはまることを明らかにする。最後に第4節においては、従来のジェンダー規範の再生産に当てはまることを明らかにする。第5節は、本章の結論となる。

第1節 インタビュー協力者達の身体のハビトゥスとその表現

本節では、まず、インタビュー協力者の身体のハビトゥスを主に「身体状態の好み」「身体技術の追求」「飲食計画」「性格」という4つのカテゴリーに分類し、表2に整理した。

ブルデューら（2002）によれば、実践は私たちの行動を導き、ハビトゥスは実践の基盤であり、実践から構造が生まれるという。フェミニストのボーヴォワール（2011）は、身体実践は孤立した個人が行う身体トレーニングではなく、ある種の「集団的」政治的努力だと考えている。ボクシングフィットネス運動のハビトゥスとは、行為者が1つ以上の技能を獲得し向上させるため、フィットネス運動の技術や知識の学習過程で、体と心に内在化したある特定の方法で感知し、行動し、考える持続的な行動傾向のシステムのことを指す。フィットネス過程での身体のハビトゥス（及びその形成）は、フィットネス実践の基盤であり、同時に実践の結果でもある。

インタビュー協力者の身体のハビトゥスは、インタビューデータのコーディングを通じて、彼らが「身体状態の好み」「身体技術の追求」「飲食計画」「性格傾向」の4つのカテゴリーで特別な身体ハビトゥスを持っていることが分かる。

表2 インタビュー協力者の身体のハビトゥスとその表現

インタビューイ	語りの例示	ハビトゥス	カテゴリー
A	フィットネスであれ、スポーツであれ、主な目的は健康のためです。主に汗をかくためです...(ボクシングを選んだのは)私が汗だくなる状態が好きだからで、しかも、あなたが（体が）引き締まると、見た目が良くなると思うんです。	体力向上や身体能力の改善を目指すこと	身体の状態の好み
D	明らかな変化としては、上半身の力が強くなります。(ボクシングを練習してから)、バスケットチームの仲間たちに、上半身の力と姿勢が明らかに改善されたと言われました。そして、身体のコンディションも全体的に向上しました。	体力向上や身体能力の改善を目指すこと	
H	たしかに、他の人に、君がそんなに細身で小さいのに、なぜそんなに激しいスポーツを選ぶの	体力向上や身体能力の改善を目指すこと	

	かと思われがちだ。私いつも、「細身だからこそ、もっと鍛える必要がある」とい答えた...体の変化としては、確かに力が強くなり、持久力も向上した。例えば、荷物を運ぶ時、他人の助けを必要としなくなった。	
C	ウェブ上の女性のフィットネス有名人にフォローしたことがあるか... (中略) ...たとえばウェイトリフティングをしている〇〇さん、彼女のように本当に筋肉ムキムキだ... (中略) ...(もし可能なら)私は彼女よりもさらに筋肉ムキムキになりたいと思っている。	「非規範的な女性身体審美」への適応
D	私はもう少し筋肉のラインがはっきりして、もう少し逞しくなりたいです...なぜなら、筋肉があるとカッコいいと思うからです。	「非規範的な女性身体審美」への適応
F	子供の頃、体型に不満を感じたことが確かにありました。細身を追求する時期もありました。その時期を経験してきました。特にその頃は社会の美的基準も比較的単一で、痩せたいと思ったり、細い脚や細いウエストを望んだりしました...しかし、知識や価値観がある程度蓄積され、ある年齢に達すると、社会の美的基準もそんなに単一ではなくなります...どんな姿であっても誰かが褒めてくれるので、もう不安にならない。自分が細くない、痩せていないと思う部分でも、ここでは褒められます。このことが私に影響を与え、自分自身を完全に受け入れるようになりました。	「非規範的な女性身体審美」への適応
G	自分が非常に非常に雄大で堂々とした体型になることは望んでいません。できれば、一見して女性らしい体型を保ちたいです。	「非規範的な女性身体審美」への抵抗
H	私の全てのトレーニングは健康を基本としています。もし外見が向上することがあれば、それ	外見より健康への追求を重要視する

	は確かに良いことですが、外見を目的としてフィットネスを行うことはありません。それは少し本末転倒だと思います。		
A	最も幸せなのは、自分が上達し始めて、ボクシングをするときに技術が身について、もう見るからに愚かに見えるような状態ではなくなったときです。そのとき、パンチを打つたびに、とても気持ちがいいと感じます。シャドーボクシングをするのも、パンチングミットを打つのも、その瞬間は特に気持ちがいいです。	スポーツ技術の向上を追求する	身体技術の追求
F	ボクシングは頭を使うスポーツです。だから、身体能力の面ではなく、戦術面が難しいと感じます。この戦略面の向上が最も難しく、いつも自分がうまく打てていない（まあ改善できる延びしろがある）と感じます。	スポーツ技術の向上を追求する	
F	少し前に実戦ボクシングの試合に出場しました。試合の前日には二度山に入り、清潔な食事ができずにお腹を壊してしまいましたが、それでも二つの試合に出場し、二つのメダルを獲得しました...まだ本格的にボクシングを始めて二年しか経っていないのに、市レベルの試合に挑戦して、メダルも獲得できたんだよ。	積極的に実戦に参加する	
F	ボクシングを2年間続けて、ついに中級クラスに昇格しました。実戦への恐怖感がだんだんと減ってきて、正面からの打撃にも直接立ち向かえるようになりました。	積極的に実戦に参加する	
G	途中、嫌気が差す時期もありました。その嫌気の区域から抜け出さなければなりませんでした。嫌気が差す理由は、しばらく実戦をしたくなかったからです。以前から人を打つのが好きではなく、ボクシングを練習してからも同じで、人を打つのが好きではありませんでした。その	実戦競技への抵触	

	時、主任コーチが私に実戦をしなければなら ないと勧めました...そして、私がボクシングジム に長年いたけれども、例えば公開の試合では、 私は負けた場合はほとんどです。		
G	最初は人を殴ることが慣れなく、人を打つこと も他人に打たれることも怖かったです。なぜな ら、相手のパンチがどれだけ重いかわからない からです...でも、今はとても落ち着いています。 ただ、ジムの外で実戦するときはまだ緊張しま す。特に、一緒に長く練習しているチームメイ トの場合は、彼らのスタイルをだいたい知って いるので、そういう意味ではもっとリラックス できます。	競技への適応と自己調 整	
A	私は一度試合を経験したが、まあまあの感じ でした。しかし、非常に熱心に試合に参加した いというわけではありません。だから、もう少 し上達したら、試合に挑戦するかもしれません。	競技に対しては中立的 な、『成り行き任せ』 の態度を取り、積極的 に参加するわけでもな いが、特に抵抗するこ とにない	
F	確かに、以前に私は炭水化物を恐れていまし た。体重が 100 ポンドを超えないようにと思い、 スチールボーンのホルセットで自分にくびれた ウエストを作ろうとしました...でも、本当にそ れを続けられたら、徐々にどんなダイエットも 意味がないことに気づくでしょう。	バランスの取れた食事	飲食計画
B	この世界で一番大切なのは、私が幸せである ことです。幸せであればいいのです。確かに脂 肪を減らすための食事をしていますが、あまり 厳しくコントロールはしません。食べたいもの があれば食べますし、その結果太ったとしても 構いません。痩せたいと思っても、1 ヶ月間ま ともに食事をせずに自分を飢えさせることはし ません。自分を苦しめたくはありません。	バランスの取れた食事	
F	ボクシングの練習は、私にとって本当に多くの	心理・精神面のエンパ	性格傾向性

	異なる人生体験と勇気を与えてくれました...少なくとも、ボクシングは、あらゆるものに立ち向かう勇気を私に与えてくれました。どんなに痛くても、どうにかなるでしょう。生活の厳しさと比べれば、ずっと軽いものです...二つのメダルを獲得したのは、私が完璧でないからです。だから私の心構えはとても良いです。勝ち負けに関わらず、スポンサーからの賞品がもらえるかだけが気になります。この時、不完全であることが逆に私の魅力となりました。	ワーメント	
F	ボクシングの練習は感情の発散だけでなく、私が自分の体型に対してより自己受容できるようにしてくれました。広い肩、太い腕、太い脚、太いウエストをすべて才能とみなす環境にいれば、自己受容しないことは難しいでしょう...あなたが痩せて弱々しいと見える人はあなたの敵でしかなくなってしまう	心理・精神面のエンパ ワーメント	
A	ボクシングをしているときはかなりカッコいいですね？最初にボクシングを選んだのはカッコよくなるためではありませんでしたが、練習を終えた後、自分が以前よりも少しカッコよくなったように感じますよね。	心理・精神面のエンパ ワーメント	
H	リングに立ち、相手にパンチを出す勇気があるか、または相手のパンチを受け止める勇気がある時、それは心理的に非常に大きなチャレンジとなります。	心理・精神面のエンパ ワーメント	
H	長い間トレーニングを続けた後、人々はもはや「あなたはこんなに細くて小さいのに、どうしてボクシングを練習するの？」とは言わなくなります。彼らは「ああ、人は見かけによらないね、実は彼はボクシングをしているんだ。見た目は小さいけど、とても強い」と言うようにな	心理・精神面のエンパ ワーメント	

	るでしょう。		
D	「実戦の授業で他の人と戦うとき、もし相手が攻撃してきたら、ただ後退するだけでは追い詰められてしまいます。相手がパンチを出してきたときは、少し怖いかもしれませんが、実際には冷静になって、反撃や迎撃、攻撃をするのが最善の方法です。これは心の持ち方を変えることが必要で、逃げるだけではなく、積極的に反撃することが大切です。これはボクシングが私にもたらした洞察の一つで、ここでより強い精神力を得ることができました。」	心理・精神面のエンパ ワースメント	
H	男女間の体力の差は確かに客観的な事実ですが、これは社会とも少し関連があると思います。社会的には、男性がより強く、女性がより弱いとされています。しかし、科学的には、女性の下半身の力は非常に強いことが知られています。ただ、数千年にわたる社会的な規範の中で、女性はこのようなトレーニングに触れる機会がなかったのです。だから、実際にトレーニングをすれば、結果は異なるでしょう...女性が必ずしも男性よりも弱いとは限りません。	心理・精神面のエンパ ワースメント	
I	「ボクシングを始めてから既に6年が経ちました。最初にジムに入ったのは「ダイエット」のためでしたが、年々のトレーニングを経て、徐々に体重のことは気にならなくなり、運動が精神的にもたらすものにもっと注目するようになりました。」	心理・精神面のエンパ ワースメント	
D	マーメイドライン、引き締まったお尻、長い脚は確かに良い見た目ですが、それは私が追求しているものではありません...それらは実質的なものをもたらすわけではありません。例えば、危険な状況に遭遇しても、速く走ることや反撃	規範的な女性身体審美 への疑問視	

	することができないし、それは他人の目を意識しているだけです。		
E	周りの人よくは冗談で「チラシを配っている人たちはあなたには渡さないだろうね、あなたの目には殺気があるから」と言います。私自身も、それは良い評価だと思っていて、問題ないと感じています...柔らかくて簡単に扱えるタイプではなく、実際には自分が手を出しにくいように見えることを望んでいます。	性格形成	
F	自分が不快に感じる声には反応する必要がある。それを相手に伝えて、そういう態度は許されないと告げるべきです。例えば、私が友達との会話で、同僚の一人が「ボクシングをする女性ってみんな暴力的な傾向があるの?」とコメントしてきたとき、私は「次にそのような言葉を聞いたら、あなたの顔に打ちますよ」と答えました。「張偉麗 (Zhang Weili) は結局女性だから (レベルが低い)」というようなことを言われたら、必ず反論します。ボクシングを始めてから、親しい友人に脇毛を剃るように勧められたこともある。彼は「脇毛を剃らないと、ボクシングのときに腕を閉じて打たないといけないの?」と言いました。私は「ボクシングでは元々腕を閉じて打つものだけど、それは体毛とは関係ない」と言い返しました。	外部からの固定観念に対する抵抗 他者の誤った認識を訂正すること	
C	ハロウィンの日に友達と街を歩いていた時、酔っ払った数人に友達が悩まされていました。私はすぐに友達を引っ張って離れ、彼らに怒鳴りつけ、中指を立てて...その後、友達を連れてその場を離れました。その時、その何人かの男は明らかに驚いていて、こんな反応に遭遇するとは思っていなかったでしょう。でも彼らは私自	言葉による暴力への対抗	

	身を直接悩ませることはありませんでした。おそらく、私が手を出しにくいように見えたからだと思います。		
F	周りの人は私を見て、私が話しかけにくく、手を出しにくいと感じていますが、実際には私は話しやすい人です。しかし、このように感じられることが好きで、誰も私に近づいてこないの で、不必要な面倒を避けられることが多いです。	性格形成	
F	交流戦の時に鄒市明に会いました。規則的なトレーニングを経て、ただ感情を発散するだけでなく、戦術を考えるようになり、さらには人生に対する理解も深まりました。	性格形成	
I	ボクシングのスパーリングは穏やかなプロセスでもあり得ます。それはあなたにいくつかの考え方を教えてくれます。ここは私にとって、心を落ち着けて一つのことに集中する場所です...平和で静かな場所です。	性格形成	
J	最初は彼らもボクシングをかなり暴力的なものと考え、ステレオタイプを持っていました。ボクシングは怪我をしやすいスポーツだと思っていました。しかし、実際には彼らが想像していたほど暴力的ではありません...武道と共通点がある...スポーツマンシップがとてもあるものです...だから、他人の意見にあまり気を取られず、私はいつも自分らしく、不快な言葉を聞いても無視するようにしています...他人との衝突を起こすことはありません。私は性格がとても穏やかなので、実際にはボクシングの練習をしてから、人としての品格が高まり、とても控えめになります。上達すればするほど、人はより控えめになります...無闇に強がらず、自己中心的であるべきではありません。	性格形成	

以下では、得られたデータの分析を踏まえて得られた4つのカテゴリー「身体状態の好み」、「身体技術の追求」、「飲食計画」、「性格傾向」について説明をしていく。

(1) 「身体状態の好み」については、ボクシングの場に入った後、ボクシングフィットネス文化に対して順応的な対応戦略を示していることがうかがえる。利用者Cや利用者Jなどは、身体の筋肉の能力や耐久力の形成を強調し、運動後の筋肉の形状を身体美と結びつけて、自分の外見上の変化を認識（または受け入れ）している。筋肉の形状や大きさを恐れることはなく、筋肉の増加に抵抗感を持たず、むしろ筋肉を増やすことを期待している。大多数のインタビューーは、筋肉の増加について比較的科学的で客観的な理解を持っている。利用者Cは「総合格闘技の代表的な女性選手である張偉麗を例に取れば、あのような筋肉を鍛えるためには、男性よりも多くの努力が必要だ。女性のホルモンなどが決めている、女の子が意図的に大きな筋肉を鍛えるのは非常に難しいだし、多くの時間を要する。ボクシングは主に有酸素運動で、ジムの無酸素運動用の器具とは異なる（無酸素運動の様に筋肉が増えることはない）。この世界で私が最も理解できないのは、筋肉がつくことを恐れる女性たちだ。そんな少ない運動量で、筋肉がつくことを恐れるなんて、筋肉はそんなに簡単にはつけるものかい？女性はずっと筋肉がつきにくいのに」と述べている。

(2) 「身体技術の追求」について、インタビューーは身体技術に対しても異なる戦略を取っていることがうかがえる。ボクシングは技能主導の身体対抗スポーツで、特に2人間の身体対練や対打は女性参加者にとっての難点の一つである。多くの女性が初めてボクシングに接触し、成長過程で他者との直接的な身体対抗経験がない。このような状況下で、一部のインタビューーはボクシングの「実戦」が魅力の一部であり、「勝つ」「対打する」感覚が自分にとって「心理的な衝撃」であると考えている。そのため、体力の向上や、力量、体能などの身体的資質を高めるために時間をかけて練習することを要求している。利用者Fは「良好な体力を保つためには、時間をかけて練習し、力量や体能などの身体的資質を向上させる必要がある」と考えている。このようなインタビューーは多く、ボクシング自体から出発し、身体技術が自己にとってどのような意味を持つかを考えている。肢体の対抗が自分の性的魅力に影響を与えることを心配していない。インタビューーの中には、身体の対抗や打撃が激しすぎて自分の女性的経験と衝突すると感じる人はいなかった。他人との対戦訓練を要求された際も、強い不快感や抵抗を示す人はおらず、技術的な進歩を追求することもなかった。もちろん、利用者Gのように、身体技能の学習と習得において自己調整の方法を取る

インタビューイもいる。彼女たちは身体対抗を拒否せず、同時にある程度自分の「女らしさ」を保護することもある。

(3) 「食事計画」については、ボクシング参加者の中には厳格に食事をコントロールしていない人もおり、比較的合理的な食事観を持っている人もいる。例えば利用者 F は、ボクシングの強度が高いため、肉類を摂取しないと身体に不利になると考えている。また、ボクシング参加者の中には、コーチの食事計画に従い、身体トレーニングの効果を高めるために食事をコントロールする人もいる。

(4) 女性ボクシング参加者の「性格傾向」は、心理的・精神的エンパワーメント、性格の再構築、性格の衝突など、いくつかのパターンがみられる。一部のインタビューイは身体的対抗力の強化により、身体的権能感を感じ、利用者 F や利用者 E のように、一度自分が強くなると、もう（弱く）戻ることは許されないと感じている。また、ボクシングによるフィットネスが個々の性格に与える影響を特に強調するインタビューイもいる。利用者 J は「ボクシングは非常に柔軟な運動で、機敏さ、勇気、忍耐力を鍛えるもので、これらの性格特性は男性にも女性にも優れた資質です。ボクシング自体には性別傾向性はない」と述べている。一部のインタビューイは、ボクシングの技術特性が女性の伝統的特性と一致しないと感じているが、それは彼女たちの成長中の性別経験と一致していると考えられる。例えば利用者 B は「私の母も私が淑やかで男の子っぽすぎることは避けてほしいと望んでいるが、しょうがないね、私は生まれつきそうなのだ」と述べている。また、利用者 A は「彼らの目には私は淑やかな人ではなく、とてもアクティブで、運動を好むタイプだ。だから私がボクシングをしていることを知ったら、皆非常に合理的だと感じているといった」と述べている。利用者 E も、ボクシングを練習した後、攻撃性が強くなったと語った。しかし、「独自に故郷から遠い異郷で一人、攻撃性のある見た目はいいじゃないか...（中略）...攻撃性のある（スポーツ）は私に相性いい」と利用者 E が述べている。それ故、インタビューイの中に、性格の衝突を感じる人はいなかった。

第2節 ジェンダーによる規範からの考察における分析用枠組みの提示

本節の目的としては、女性ボクシングジムにおける従来のジェンダー規範の変容と再生産を分析する用の理論背景や分析用の枠組みを提示することである。

ボーヴォワール（2011）は、社会文化が特定の社会における女性としての典型的な性別規範を構築したと考えている。この考え方に基くと、女性のフィットネス愛好者は、異なるフィットネス環境下での身体ハビトゥスが表す行動傾向と性向が、性別規範の「制約」によって様々な程度で影響を受け、異なる性別化の特徴を示していると考えられる。

また、ボクシング運動自体が持つ力強さや対抗性、技術性の特徴は、インタビューの身体ハビトゥスと性別規範の間にある程度の排他性を生み出すことになる。熊（2020）は、社会的性別規範に従う女性インタビュー対象者によるボクシング場での身体運動の方法は、（生理的な）性別の限界、阻まれた意図性、自己と周囲の世界との非連続性を示し、一方で、社会的性別規範に抵抗する女性インタビュー対象者は逆の傾向を示すという。しかし、本研究では、インタビューを単純に「社会的性別規範に抵抗する女性」、あるいは「社会的性別規範に従う女性」のどちらかに分類することは難しく、実際はより複雑な状況であり、ときには同一のインタビュー対象者が「抵抗」と「従順」の両面の特徴を同時に示すこともある。つまり、ボクシング運動に参加する女性の戦略は柔軟で、ダイナミックであると考えられるだろう。

では、女性専用ジムにおける女性のボクシングの実践によって、性別の秩序はどのようにして破られたり、複製されたりするのであろうか。ここでは、合場（2013）が女性プロレスラーの身体とジェンダーを分析する時の枠組みや分析法に参照する。（合場敬子（2013）女子プロレスラーの身体とジェンダー:規範的「女らしさ」を超えて. Akashi Shoten.p. 140-141）

性別分業のジェンダー秩序と変容

男性を「活動する主体」とし、女性を「他者の活動を手助けする存在」として位置付けている場合は、性別分業のジェンダー秩序を再生産している。他方で、女性を「活動の主体」とし、男性を「他者の活動を手助けする存在」として位置付けている場合は、性別分業のジェンダー秩序を変容させている。

異性愛のジェンダー秩序と変容

会員たちが自分を性的な対象として評価するジェンダー・ハビトゥスや、それに基づいて自らの外見や振る舞いを構成していく日常的実践を行っている場合は、異性愛のジェンダー秩序を再生産している。したがって、理想の女性身体を構築している場合であっても、異性愛のジェンダー秩序を再生産していることになる。

また、自分を性的な「主体」として評価するジェンダー・ハビトゥスや、それに基づいて自らの外見や振る舞いを構成していく日常的実践を行っている場合は、異性愛のジェンダー秩序を変容させている。一方で、会員たちが理想の女性身体の要素と理想の男性身体の要素を併せ持っていることは、異性愛のジェンダー秩序を変容させている。なぜなら、その身体は性的に望ましい理想の女性身体に挑戦するものとなるからである。さらに、理想の女性身体の要素と理想の男性身体の要素を併せ持っている身体は、規範的な男性身体と規範的な女性身体を別個に存在させ、両方の混在を許さない、セックス・ジェンダー体系の二元的構造そのものも不安定にしているという点で、変容させているといえる。

スポーツにおける規範的な女性身体と男性身体

会員たちの行動は、逞しい筋肉、力、攻撃性を持たず弱さを表現している場合は、スポーツにおける規範的な女性身体再生産していると解釈する。一方、スポーツにおける規範的な男性身体が持つ特徴——すなわち、逞しい筋肉を持ち、その身体は力や攻撃性を発揮し、力強さ——を表現している場合は、スポーツにおける規範的な女性身体を変容させていると解釈することができる。

第3節 従来のジェンダー規範の変容に当てはまること

第1項 規範的な女らしさとしての身体の脆弱性への対抗

合場（2013）は、[身体的脆弱性]という概念を定義している。定義に当たって、先行研究に当たる McCauley（1997）は、女性たちは女らしく振る舞う実践を通じて、自分たちを脆弱にしていると主張している。また、Dowling（2000）もほとんどの大人の女性は自分たちを不自然に弱くしていると主張している。女性が身体的に自分たちを未発達の状態に置き、自分たちが男性より弱い性であることを実現しているのである。これらを踏まえた上で合場は、[身体的脆弱性]を、女性が社会化される過程で自らの身体的な力を脆弱だと感じ、また男性に比べて身体的に脆弱だと感じるものと定義した。

合場によると、女性が自分の身体的力を脆弱だと感じるようになる過程には、様々な要素が関与しているという。第一に、女性というジェンダーを獲得する過程で、他者の感情に配慮すること、身体的力を発揮しないことを学ぶからである。第二に、メディアによって、女性が受動的な犠牲者として描かれることも、女性が自分を脆弱だと認識することを助長していると指摘する。第三に、近代スポーツが男性身体の優位性のイデオロギーを構築・流布し、さらに女性にスポーツ（特に闘争的スポーツ）を奨励しないことが影響しているのである。女性の脆弱さの表現形態と形成過程における要素にとって、この3点は重要である。そのため、以下のいくつかのキーワードに焦点を当てて分析し、女性ボクシングジムのインタビュー対象者たちの行動とどのように合致しているか、また合致していないかを検討する。

- (1) 自分たちを不自然に弱くし、自分たちを未発達の状態に置くこと
- (2) 自分たちが男性より弱い性であることを実現していること
- (3) 他者の感情配慮すること（第一に、受動的であること、自己主張しないこと。第二に他者の感情に自分が責任を感じる。第三に身体的力を発揮していることを心地よく感じない、あるいは女らしく感じないことである。）
- (4) 身体的な力を発揮しないこと（女性たちが身体的力を発揮しないことで人々の注意を惹きつけたくない）
- (5) 近代スポーツを通じて身体化されている男性が攻撃性を身に付けることへの奨励や女性から攻撃性を排除すること

(1) 自分たちを不自然に弱くし、自分たちを未発達の状態に置くこと

ここでは、減量を目的とするインタビュー対象者もいる一方で、単に細く脆弱になることを追求しているわけではない対象者がいることも看取される。例えば、利用者 C は以下のように述べている。

確かに脂肪を減らしたいと思う。ボクシングは有酸素運動だから、ランニングよりはボクシングの方が有効だ。しかし最終的に脂肪減少の効果がなくても構わない。それはとても重要なことではない。知り合いの女性トレーナーがいて、結構大きな筋肉をつけている。私はそれを触るのが好きで、自分もそうなりたいんだ。筋肉の大きさを追求しているわけではないが、自分の力を完全にコントロールし、自分が自分の体の主人である感覚が好きなのだ。（利用者 C）

利用者 C は、脂肪を減らしたいと思っても、細身を追求するわけではなく、筋肉があり力強い体型を目指し、自分の身体をコントロールできるという感覚が好きであるという。言い換えれば、利用者 C が「理想の男性身体の要素」を追求することは、「性的に望ましい理想の女性身体に挑戦するもの」として捉えられるため、異性愛のジェンダー秩序を変容させていると見ることができる。

また、利用者 A や利用者 B も体型に関して以下のように語っていた。

実際、私の体重はずっと良い状態を保っています。大学時代は 53 キロを長年維持していましたが、仕事を始めてから太り始め、最近は 60 キロ近くになりました。これは正常ではないと感じています。だから、56 キロくらいに戻ればいいと思っています。この正常でないとは健康の面で言っています。もしも私がずっと 130 ポンドだったら、たとえ今より重くても脂肪を減らす必要があるとは思わないでしょう。しかし、もともと痩せていた体が突然太り始めたら、何か理由があるはずで、それは異常な状態で、体に何か問題があるということです...広東出身の私は、これが体内の湿気が重く健康ではないためだと考えています。ボクシングをして汗をかき、毒素を排出するために運動しています...だから、実際には体型に関する不安はありません。健康が第一位です。（利用者 A）

痩せていると確かに見栄えが良いです。私も他の人のように美しいドレスを着たいと思います。減量をしているとは言え、断食ダイエットのようなことはしていません。例えば、どうしても 50kg に痩せなければならない、ということはありません。食べたり飲んだり遊んだりして、私が幸せな

らそれで良いのです。痩せたければ痩せるし、太っても大して変わりません。本当に歩けなくなるほど太ったり、服が買えなくなるほどではありません。現在、大きいサイズの服を着ているのは、私が快適だからです。不安を感じていません。この世の中で何をするにしても、私が幸せであることが最も重要です。もしいつか本当にダイエットしたくないと思ったら、食べたいものを食べて太っても構わないし、痩せたければゆっくり痩せます。1ヶ月間食べないで、すぐに痩せることを強いるつもりはありません。自分を苦しめたくありません。（利用者 B）

利用者 A は自身の減量目的を「身体の異常状態への注意」として考えており、瘦身志向より健康志向であることがわかる。また、利用者 B も減量を一つの目的としているが、唯一かつ最優先の目的ではなく、体重に固執したり体重を気にしたりすることはない。これは、利用者 A と利用者 B が「不自然な未発達の状態」または「身体の脆弱性」を追求していないことを示しており、女性が自身をアクティブな主体としてみなす実践とみなすことができる。さらに、利用者 I や利用者 F も身体経験について次のように表現している。

2017 年前からボクシングを始め、既に 6 年目に入ります。最初はダイエットのためにジムに足を運んだのですが、年々のトレーニングを経て、体重にあまり気を使わなくなり、スポーツが精神的にもたらすものをより重視するようになりました。私たちのジムには、5～7 年間学んでいるベテランの生会員もいれば、たった 2～3 ヶ月の初心者もいます。職場勝ち組のエリート女性もおり、職業と家庭を両立させるママもいます。さらに、大学に入学したばかりの 05 世代もいます。彼女たちは「痩せている」という標準と必ずしも合わないかもしれませんが、皆が美しく、活力に溢れています。（利用者 I）

数年前、私には炭水化物を徹底的に悪い扱いする傾向もあって、体重を 50 kg 以下に保つことにすごくこだわっていて、くびれたウエスト、憧れますよ。今では、自分の身長が 162 センチ、体重が 58 キロであることを誇りに思えます。ボクシングのトレーニングは、感情を発散するだけでなく、自分の体型にますます満足しています。私は全ての女性たちが理解して欲しいし、君が痩せて脆弱であることを望むのは君の敵だけだということ。最近、私は大きな肩を鍛えるために努力しており、

トレーナーの大きな肩を羨ましく思っています。もしもあなたが広い肩、太い腕、太い脚、太いウエストを天性の才能として尊重する環境に身を置いているなら、自分に自信を持つのは難しいでしょう。ここでは、腕が太くなったり、肩幅が広がったり、脚が太くなったりすることが称賛されます。私たちの間ではよくこんな会話をします：

「あなたの肩幅、少なくとも 40 センチあるでしょう。一発で私を KO できる気がする」

「私の肩幅は 41 センチよ、控えめに言わないで。」

「私もあなたのような（筋肉の）脚が欲しいわ。私みたいに、腰を回し、股を開けて力を出すのは難しいんだから。」

ここでは、どんな部位でも細いと感じること、痩せていないと感じることが褒められます。この環境は私にそういう影響を与えました。この場所とこのスポーツは、あなたが自分自身を完全に受け入れることを可能にします。異なる視点から見れば、欠点も才能になれると思います。（利用者 F）

ボクシングに参加した後、利用者 I と利用者 F の両インタビュー対象者は細身を追求することから健康美と活力を追求するようになったことがわかった。「規範的な女性身体」や「理想の女性身体の要素」を追求することから「理想の女性身体の要素と理想の男性身体の要素を併せ持っている身体」を追求することへの転換は、「規範的な男性身体と規範的な女性身体を別個に存在させ、両方の混在を許さない、セックス・ジェンダー体系の二元的構造」への挑戦と見なせると考える。また、以上の回答者の話によると、この場には、逞しい筋肉を持ち、力や攻撃性を発揮できる身体、強さは望ましく、それは、スポーツにおける規範的な女性身体の変容と見なすことができる。

（2）自分たちが男性より弱い性であることを実現していること

男女間の体力の違いは、確かに客観的な事実ですが、これは社会とも少し関係があると思います。なぜなら、社会的には男性がより強く、女性がより弱いとされているからです。しかし、科学的に言えば、女性の下肢の力は非常に強いです。ただ、数千年にわたる社会的な規範の中で、女性はこのようなトレーニングに触れる機会がありませんでした。だから、実際にトレーニングを行えば（結果は異なるはずですが）...女性が必ずしも男性よりも弱いとは限らない...自分を弱者の位置に置く必要はありません。（利用者 H）

(3) 他者の感情配慮すること

利用者 J は、自分の体重が 70 キロ以上あること、外見が非常に男性的であることを述べており、個人の性別表現と伝統的な女性の社会的期待との間に衝突があるにもかかわらず、自分自身は全然気にしていないという。また、利用者 F は次のように語っている

不快にさせられたら倍返し... (中略) ...。相手に「それが間違っている」と言ちゃんと伝える。ウェイチャットのコメントで、「ボクシングをしている女性には暴力的な傾向があるのではないか」とコメントする同僚がいて、「次にそういうことを聞かせたら、あなたの顔にパンチをするよ」と罵倒した... (中略) (中略) ...「張偉麗は結局女性だから... (中略) ...」というような発言には必ず反論言い返す。(利用者 F)

自分の身体に対する理解に基づいてして行動し、周囲の目や言葉を気にしない姿勢や、他者の感情に配慮しないことは、従来の秩序を打破していると見なすことができる。

(4) 身体的な力を発揮しないこと

社会文化と性別の役割期待は、女性が男性らしい特徴を持つボクシングというスポーツに反発する心理を持つ原因となっている(戴, 2014)。戴によれば、性別規範に従う女性は、男性と女性の生理的な違いを自分がボクシングに全力で取り組むことを阻害する理由として捉える傾向にあるという。自分の力やスピード、体力が男性に劣るため、ボクシングで男性と同じ楽しみを得ることは不可能だと考えている人がいる一方で、生理的要因がボクシングにおける男女のパフォーマンスの違いをもたらす重要な要因であると認識しつつも、同じ目的、興味でボクシングに参加することは可能だと考える人もいと指摘されている。

しかし、本研究の協力者の中には、自分の力やスピード、体力が男性に劣るためにボクシングで男性と同じ楽しみを得ることは不可能だと考える人はいなかった。たしかに彼女たちは、客観的な生物的差異を認めているが、それを障害とは考えていない。利用者 A・H・G は、スポーツ自体の楽しみをより重視し、勝ち負けにこだわらないと述べている。利用者 F は「自分自身のためにトレーニングをしているため、トレーニングした分だけ得られるものがある。たとえ 3 分間のトレーニングでも 3 分間の収穫がある」と述べていた。これらは、女性が主体性を発揮する表れとして見な

することができる。

女性は「私にはできる」/「私にはできない」という理由で、スポーツに全力で取り組むことをする/しない。自分の「女性らしさ」を損なわないように、自主的に練習の強度や時間を制限し、ボクシングでのパフォーマンスを控え、さらなるスポーツ体験を得る機会を失っている。一方で、伝統的な性別秩序に抵抗する女性は「私にはできる」という態度で、身体的な実践を通じて性別のステレオタイプを書き換え、性別の言説による束縛に抵抗しているといえる。

しかし、本研究の対象者の中には、自分の「女性らしさ」を損なわないように、練習の強度や時間を自主的に制限し、ボクシングでのパフォーマンスを控え、さらなるスポーツ体験を得る機会を失っている人はいなかった。

まず、積極的に実戦に参加する利用者Fを例に検討する。利用者Fは、一部の女性は実戦を追求しないが、自分は実戦を通じてボクシングへの理解を深め、他の女性が学んでいない「技術」を学ぶことができたと考えている。そのため、彼女はよく、アマチュア試合直前での心理的な壁を乗り越えた経験をソーシャルメディアに投稿し、より多くの女性が勇敢にリングに立つことができるように励ましているということであった。

2年間ボクシングをしてようやく中級クラスに昇格できたことはよかった。実戦への恐怖さがだんだん小さくなり、直接対面して打撃を受けることができるようになった。交流戦で鄒市明^[6]に会う機会もあったし、定期的なトレーニングを通じて、単にストレス発散ではなく戦術を考えるようになり、人生に対する理解も深まってきた。当然、体力も向上した... (中略) ...リングに立たないと分からないことがあることわね... (中略) ...やっぱりプロ用のマウスピースを使わないと... (中略) ...前回にはマウスピースが見つからなく、薬局のマウスピースを使った結果、試合後に歯茎から出血して... (中略) ...以前の練習で不注意で相手の女の子の目を青くしてしまっ、すっごく罪悪感を感じた。だから試合には先に攻撃しないようにしたが今回は損をした。やっぱり先に攻撃する方がポイントを取りやすいつて... (中略) ...手を落とすことやパンチングの癖はどうしても治せない... (中略) ...仕方ないなあ、これからは基本技術をさらに強化する必要があるみたい。試合前は非常に緊張していて、マイク・タイソンのドキュメンタリーを見てた。彼が初めてリングに上がった時、緊張しすぎてで泣いちゃったね、少なくとも私はくほどじゃなかったし、そうみると、私はマ

[6] 鄒市明：中華人民共和国のプロボクサー。北京オリンピックライトフライ級金メダリスト。

イク・タイソンよりも強いんだ（と微笑んでいた）。（利用者 F）

これらの考え方は、女性が性別傾向を超えてスポーツに参加する機会を拡大していく主体性の表れであり、伝統的な性別秩序に対する抵抗と見なすことができる。

次に利用者 A のケースだが、利用者 A は実戦にはあまり参加していないが、それは自分の女性性を保護するためわけではないという。

以前バレーボールをしていた時は、競争心が強く、試合に出て勝ちたいという心理状態だった。男子と一緒にプレーすることもあったが、その時はまだ若かったからかもしれないね。今、ボクシングを練習していて、試合がある場合、コーチは通常追加練習を行なう。それはヘルメットを付けて打つような練習で、私は一度体験したが、まあまあだと感じた。試合に出ることにはあまり渴望していない。もう少し上達したら試合に出るかも（利用者 A）

ここで、利用者 A は、自分がボクシングに全力を注がない理由を「年齢と共に変わる心構え」として説明している。また、利用者 A は実戦試合を嫌っているわけではなく、成り行きに任せる程度で取り扱っている。利用者 A が大学時代にバレーボールに参加した経験から、痛みを恐れず勝利を追求し、男性と一緒にバレーボールをする際も、恐れることなくボールを受ける姿勢があった。このことから、ボクシングを嫌っているわけではないと理解することができる。

その時、女性が 3 人だけでチームを作ることはできず、男性と一緒にプレーするしかない。もちろん、女性チームと男性チームという形わけではなく、男性の中に混じっているんだ...（中略）...男性のボールのスピードはマジではっきり見えないほどで怖いんだ。無意識に避けたいのだが、「それはダメ、早く行って受けないと」と自分に戒めた。（利用者 A）

この経験は彼女が「年を取るにつれて、若い頃ほど勝利を追求しなくなった」という主張を裏付けている。したがって、利用者 A がボクシングに全力を注がないのは「女性らしさを守るため」という理由も該当するわけではないだろう。そのため、彼女がボクシングに全力を注がないからといって、彼女を「社会的な性別規範に従う女性」と単純に分類することはできない。もちろん、別の

角度から見れば、利用者 A が現段階で実戦試合に参加しないことは、紛れもなく「女性は常に『私にはできない』と自分を制限する」という現象に合致している。しかし、利用者 A は現在初級クラスにいて、「実戦に参加しない」ことは、ある程度は客観的なボクシング技術の限界によるものであると考えることができる。

最後に、利用者 G と利用者 B のケースを検討する。利用者 G はそのジムのアルバイトコーチであり、同時に上級クラスの生徒でもある。これは、利用者 G がかなりの程度でボクシングに力を注いでいることを意味している。しかし同時に、利用者 G は自身の女性らしさを大切にしている。自分の体が女性らしく見えることを望んでいる。筆者が参加したプログラムの一つは利用者 G がコーチとして指導していた。プログラムが終わった後のストレッチでは、特にヨガやピラティスの動作を選んだ。そして、「どの動作がボクシングの動きで起こりうる丸肩などを防ぐためのものか」という風に詳しく説明していた。「女性らしい」柔らかい動作を全員揃っておこなった後、利用者 G はみんなの写真を撮って「今の様子を見ると、まるでボクシングクラスではなく、ヨガクラスのように」と冗談を述べていた。利用者 G の語りをさらに詳しくみってみる。

やっぱり筋肉による体型の変化を気にしている。気にしていなかったら、ピラティスを学ぶことはない。ボクシングは、ストレッチを怠ったり、筋肉の協調性に注意しなかったりすると、望ましくない体型になるぞ。ほとんどの女性がボクシングを練習すると、長期間右腕を挟むことで肋骨が回転することがある。だから、時々左腕を挟む練習をすることで肋骨を回転させるのだ...（中略）...私自身が非常にがっしりとした体型になることは望んでいんだ。女性らしい体型を保つのがいい」（利用者 G）

利用者 G にインタビューしているときに利用者 B もおり、彼女も自分の意見を次のよう述べていた。

美しさへのこだわりがあるんだ。ボディビル大会に出場するような人以外は、（普通の人）は大きな筋肉を好まないと思う。私のような普通の人たちはやっぱりかわいいスカートとか着られるように、かつ健康的な美しさを求めている。非常に筋肉っぽい状態になることは望ましくないよ。バランスの取れた体型がいいですね。女性専用のジムの良さは、そういう細かい点に配慮していることだ。私自身は性格が男っぽい、女の子として美しく、皆の目を引く外見が欲しいね。「あなたは

とても美しい」，「今日はとても可愛いね」というように褒められたいんだ。（利用者 B）

以上の話から，利用者 G は「女性らしさ」を追求し，女性の曲線と体の特徴を大切にしていることが分かる。しかし，ボクシングやフィットネスに関する豊富な知識を持つ利用者 G は，「特別なトレーニングをしない限り，女性が非常に大きくてがっしりとした筋肉を持つことは難しい」という客観的な事実も認識している。そのため，アマチュアとしてボクシングをやっていた利用者 G は，プロの競技選手ではないので，ボクシングにどれぐらい全力を注いでもプロ選手のように筋肉が過剰に発達になるのはほぼ不可能だと認識していた。筋肉の発達を恐れてトレーニングをわざと控える必要がないと考えているのである。また，利用者 G は，がっちりとした筋肉ではなく，流線型のバランスの取れた筋肉を追求しているため，ボクシングの他にヨガやピラティスなどの運動も行い，自分の筋肉の形を整えている。そして，利用者 B の言葉からも，「女性らしさ」を追求しながらも，「女性らしさ」の定義を自分自身で持ってた。彼女は「健康的な女性の身体」，つまり「健康美」を追求しており，「脆弱な規範的な女性の美さ」ではないといえる。これは，合場が定義した「規範的な女性らしさとしての身体の脆弱性」とは一致していないと考える。

筆者はプログラム中に利用者 B と対戦している時も，彼女の真剣さと力を感じることができた。このことから，利用者 G と利用者 B は，ボクシングに全力を注ぎながらも，「女性らしさ」を守るためのバランスを取るために，より柔軟で積極的な戦略を採用していると考えられる。もちろん，この積極的な戦略には限界があり，彼女たちの取り組みは，「どれだけトレーニングをしても，自分の女性らしさに大きな影響を与えない」という前提に基づいている。つまり，たとえある日，彼女たちの体型が「非常にがっしりとして男性的になった場合」，その時点でボクシングを辞める可能性がある。したがって，利用者 G と利用者 B の行動は，既存の性別秩序を破りながらも，同時にその秩序を再生産していると考えられる。

(5) 近代スポーツを通じて身体化されている男性が攻撃性を身に付けることへの奨励や女性から攻撃性を排除すること

当クラブでは，攻撃性のある目線を持つことは褒め言葉として取り扱われていた。

拳を振るうのは男性であると考えられがちだ。しかし，拳を振るうことには，無秩序な振り回しと戦術的な反撃の二種類がある。拳を振るうことに攻防戦略，打撃戦術，足の動きなどの専門用

語を加えると、拳を振るうという行為は単純なものではなくなる。女性が自身の生理的、心理的な制約を克服し、この複雑な「拳を振るう」技術を学ぶと、その女性も単純ではなくなる。

(利用者 I)

今回のインタビュー対象者の中で、身体の対抗や打撃が激しすぎて、自分の女性としての性別経験と衝突していると感じる人はいなかった。他の人と対戦する訓練を求められた時にも、強い不快感や抵抗を示す人もいなかった。つまり、この空間には、女性が攻撃性を身に付けることはいつも高く評価され奨励されることや、激しい攻撃を回避しない^[7]ことは、従来のジェンダー規範に対する対抗と見なすことができると考えるだろう。

第2項 女性同士の助け合いの場における「活動する主体」という主体性の体現

ここでは女性のみが存在し、「男性が不在」の状況であるため、男性を「活動する主体」とし、女性を「他者の活動をサポートする存在」として位置づける場合は、性別分業のジェンダー秩序的再生産が存在する。しかし同時に、「女性が活動の主体であり、男性が補助する」という基準にも合致しない。しかし、全員女性のコーチ陣が初級会員のロールモデルになるなどの事実は、女性が活動する主体としての証拠になれると考えることができる。

また、利用者が全員女性であるため、この場は女性相互の支援の場と見なすことができる。例えば利用者 E は「他の生徒が積極的にやって来て、私にアドバイスをくれたり、どこが力を入れるのが間違っているか、動作が正しくないと教えてくれる。それはとても温かい行動だと思うし、見ず知らずの人からの善意だと感じる。これはボクシングをしている中で幸せなポイントだ」と語っている。また、利用者 F は「私たちは起業したい女性をサポートしており、アイデアがある女性には、売りたい商品を置くためのスペースを提供し、レンタル料金は一切いただかない」と述べている。

[7] 当然、そういう「激しい攻撃を回避しない」行動について、他の原因も考えられる。

1. 授業は主にフィットネスを目的としており、ボクシングのフィットネスは競技ボクシングほど激しくないため、怪我の可能性が少ないので、多くの人が抵抗を感じない。例えば、利用者 F は「私たちのようなアマチュアのリングでは、プロのボクサーのように鼻を青くしたり顔を腫らしたりすることはないので、思い切り打ってみる」と表現している。また、利用者 J は「一般的に知られ始めたこのスポーツは、人々が想像するほど暴力的ではない。特に女子ボクシングは、主に体を鍛えることを目的としている。相手を倒すことや怪我させることが必要なわけではなく、プロボクシングのような血だらけのシーンは起こらない」と述べている。

2. インタビュー数に限りがあるため（10 人しかない）、偶然でインタビューされた会員たち全員は比較的対抗に適応している人たちである可能性もある。

これは、スポーツ活動の外で、ボクシングジムがメンバーの生活の他の面（例えばキャリアの発展）に力を尽くしてサポートすることを示している。筆者は、利用者 K が自分の小さな店のイヤリングなどのアクセサリーを売るために、その展示ケースの 2 つのスペース（図 7）を利用していることを観察した（もちろん、このサポートの具体的な効果は別の話題である）。

さらに、「自身が異性の視線に不安を感じないが、女性全体のために、女子専用ボクシングジムのような女性に優しいな環境をよりよく発展できるように、消費行為で応援する」という利用者 C の行動から、利用者 C は自分の行動で社会を変えることができると信じていることがうかがえる。ここには、利用者 C の活動する主体としての能動性が体现されているといえる。「私が避けたいのは、この男性支配の下環境そのものであり、特定の男性個体ではない」という利用者 C の回答は、「女性専用のスポーツ場所が女性にとって何を意味するのか」という問いに対する彼女の深い思考を反映している。

以上のこうした事実により、性別分業のジェンダー秩序の変容としてみなすことができると考えられる。



図 7 ジムの中の展示棚の一角（筆者撮影）

第 3 項 性的な主体と自認すること

まず、インタビュー協力者は全員女性であるため、自分を性的な客体として扱うような状況は存在しないといえる（たとえ性的少数派である女性—10 人のインタビュー対象者の中に 3 人が自分の性的少数者としての身分を認めた—がいたとしても）。次に、社会が女性に対して持つ規範や固定観念を変容させるために、わざわざボクシングを行うわけではないと述べているインタビューイが少なくなかった。彼女たちは、ヨガやエアロビクスなどの運動が、女性の美に対して持つ固定観念

に合致しているからといって敢えて避けるわけでもない。ヨガなどの女性的な運動を行わないのは、単に好きではないか、必要としていないからであった。盲目的に社会の審美に追随することもなく、盲目的に何かに抵抗することもない。すべての出発点は「自分自身」のニーズから考えられている。これはある程度の「主体性」であると示されているといえる。

ヨガをやらないのは女性へのステレオタイプに合っているからではなく、私の現在のニーズに合っていないからだ。女性は自分自身のニーズに基づいて問題を考えるべきだ（利用者 C）

別に何か人と違うものを求めているわけではないが...（中略）...社会の審美がどうであれ、自分の思考を失わないように。（利用者 F）

ウエストのラインや引き締まったお尻とか、確かに綺麗だが、それは私が追求しているものではない。それは私に何にも役に立てないのだ。例えば、危険に遭遇した時に速く走ることも、反撃することもできん...（中略）...するとそれは他人の見方のためだけだ。だから、私はそれに対して特に追求しない。（利用者 D）

第4節 従来のジェンダー規範の再生産に当てはまること

第1項 最初は相手の力を過小評価しがちな傾向があること——自分が「力持ち」だと認識しているが、ほとんどの女性は力が弱いと思い込む

筆者自身の体験に基づいて、以下の現象がよく観察された。それは、会員が通常、初対面の相手には控えめで慎重なアプローチを取っていることである。相手が全力を出せると確信してからのみ、自分も全力を出す。そして、通常は最初に相手の力を過小評価する傾向が見える。筆者が初対面の会員とペアで手のパッド練習をした時、よく次のような状況が起きた。

最初のラウンドで私がパンチを出し、相手がパッドを持つ時、相手が私より細く小さいように見えたので、私は全力を出さなかった。2ラウンド目で立場が逆転し、私がパッドを持ち、相手がパンチを出す時、私は相手の力が想像以上に強いことに気づいた。そのため、3ラウンド目では、私も力を抑えずにパンチを出すようにした。相手も、私が3ラウンド目で1ラウンド目よりも力強く打ってきたとわかれると、4ラウンド目ではさらに力を抑えずに打ってきた。このように、相互に確認しあいながら、両者ともに全力を出すようになり、より良い練習ができたという経験をした。相手の力をよく知っている会員たちがペアを組む場合には、最初から力を抑えずにパンチするのはほとんどである。つまり、両者がお互いを「力のある女性」と認識し、相手を等しい対戦相手とみなすと、より良い練習ができるようになる。

また、利用者Hは、「皆女性なので、誰も誰に譲らない。真剣に相手を対戦相手として見て、全力を出せる」と述べている。同時に、このプロセスから、女性でありながら、自分は力があると思っても、他の女性の力に疑問を持つことがあることも、私は反省することとなった。この現象は社会の他の領域にもよく見られることであろう。例えば、ある能力（例えば理科が得意）を持つ女性が自分の能力を認めていても、他の女性の能力に疑いを持つことがある。これは女性全体のエンパワーメントには不利であり、「個人のエンパワーメント」から「女性群体のエンパワーメント」までの距離はまだ長いことがわかる。女性は自分の力を信じるだけでなく、女性全体における他者の力も信じることで、女性グループのエンパワーメントを実現することができるようになると思う。

第2項 女性気質を「劣等的なもの」としてに捉える状況の存在

利用者Cは次のように語っている。

ここにあるセットとグローブにはたくさんのピンク色の要素がある。以前、あるコーチが、XXのグローブはピンク色で、とても「女っぽい」ね、全然クールじゃないって言っていた。そのコーチの外見も、非伝統的な女性のイメージではない。冗談半分ではもわかっているが、女性のボクシングクラブでの女性コーチが、そんなことを言うなんて...（中略）...しかし、これは認識レベルの問題で、全ての人が私と同じ考えを持つことを期待していない...（中略）...社会の現状はそうだなあ。（利用者C）

ピンクのグローブやセットが「女っぽい」と言われることは、「女性らしさは劣ったもの」という古い観念を反映しているといえる。これはまた、ボクシングジムの世界と外の世界の非連続性のある程度示している。女性ボクシングジムでは、女性が力強さや攻撃性を持つことが肯定的に評価される。しかし、「攻撃性や力強さ」という特性は彼女個人にのみ属しており、女性全体には属していない。つまり、「ピンクのグローブは女っぽくてクールじゃない」という考え方の背景には、女性と「攻撃性や力強さ」という特性を対立させる論理がある。すなわち、「攻撃性や力強さ」という特性は最初から男性に割り当てられており、女性は生まれながらに力がないとされていることに起因しているのである。彼女が訓練や努力を通じて自らを超えると、もはや「女性っぽくない」のである。女性が「攻撃性や力強さ」を持つことで評価されるのは、実際には彼女が伝統的なステレオタイプの女性像とは異なるためである。つまり、彼女が男性のように振る舞い、ある種の「男性的特性」を持つことで評価されている。言い換えれば、評価されているのはこれら「男性の特性」であり、女性自身ではない。

なぜ「女性らしさ」と「クールさ」は共存できないのであろうか。さらに深く考えると、なぜピンクが「女っぽい」とされるのであろうか。いったい何が「女性らしさ」を定義しているのであろうか。なぜ女性は「本来的に力強い」ではなく、「男性のように力強い」とされるのであろうか。利用者Cの語りから、女性がスポーツを通じて従来のジェンダー規範を変容させる一方で、本質主義的な性別二元論の枠からはまだ徹底的に抜け出していないのは判明された。

女子ボクシングジム外部の世界

女性は今らしくなるべき
男性は今らしくなるべき

ステレオタイプの境界線

女らしさ：	男らしさ：
従順な身体	活動する身体
おとなしい	攻撃性
淑やか	etc.
etc.	

女子ボクシングジム内部の世界

女性は今らしくなくてもいい
むしろ男らしくなるのは逆に高く評価される

図 8 女性専用ボクシングクラブの界と外界との関係図（筆者作成）

女子ボクシングジム内部の世界には、一見すると女性は今らしくあることを保障しているようにも見えるが、結局「女らしさ」と「男らしさ」の従来の分類法の束縛から解放されていないといえる。（諸橋，2009）は、暴力で敵を倒し地位と財と獲物を得るのは男の子の経験世界であり、男の子は戦隊ものなどミリタントなものを好み、暴れん坊で戦闘の真似をする、という、といった少なからぬ思い込みがあると述べた。いわば「男性についての言説」「女性についての言説」が、あたかも男性や女性の本質であるかのような観念を我われに植え付けている。我々は、“男は闘争、女は情緒”つまり、手段的役割/表出的役割などについて「ジェンダー」を「語って」しまう。そして、男子の「対戦格闘」好き、「スポーツ」好きの理由として考えられるのは、いつは「強さ」「勝利」に代表される目的達成的な暴力性向が社会や親たちから奨励ないし許容されている男性文化によって承認され支えられているからであろう。それは、社会や親たちに抱いている、男女に対して異なるダブルスタンダードな価値化を反映している考えた方がいい。（IDEAS FOR GOOD 編集部，online）は、男らしさについて以下の様に述べていた。

社会の中で、男性が女性より優位な立場にいることは往々にしてあり、そのこと自体が問題視されてきたわけですが、そうした中でも「男らしさ」に縛られて苦しんできた男性たちもいるのです。社会の中で、男性が女性より優位な立場にいることは往々にしてあり、そのこと自体が問題視されてきたわけですが、そうした中でも「男らしさ」に縛られて苦しんできた男性たちもいるのです...（中略）...長い歴史のなかで固定されつつある男のイメージといえば、兵士

や戦士などの「戦う男」。アニメのなかでも、CM などでも「戦う男」という男らしさが刷り込まれています (IDEAS FOR GOOD 編集部, online)。

男性たちは、「男らしさ」からの解放や、「男らしく」あることに縛られることのない日を目指しているという (阿倍、2012)。女性においても同様であり、ただ「攻撃性がある」、「男性のように攻撃性がある」ことを目指しているわけではない。

第3項 「フェミニズム」という言葉への誤解と回避——身体フェミニズムの未達成

さらに面白いことに、コーチ兼経営者が「女権 (フェミニズム)」というキーワードに対してかなり警戒し、避ける態度を示していた (もはやそれを避けることしか考えられないほど)。筆者が「女性のエンパワーメント (中国語で言うと女性賦権となる)」という言葉挙げた時、聞き間違えたのか、社会学の専門用語を理解していないのか、コーチ兼経営者はそれを『女権 (フェミニズムの中国語表字)』と誤解し、急いで筆者に説明した。女子ボクシング (女子拳撃) の略称「女拳」と「女権」は発音が同じだが、決して混同してはいけないと何度も強調していたのである。また、ジムの経営者ではなく、利用者 C と利用者 E が、自分がフェミニストであり、性別平等の問題に関心を持っていると明らかに述べていた。また、利用者 K と利用者 F も、明確には表明しているわけではないものの、映画「バービー」を見た後の家父長制に対する考えについて、「女性の力」や「女性の成長」、「上野千鶴子」、「ミソジニー」などの性別平等に関連するタグを付け、SNS で投稿していた。彼女たちが性別平等や女性のエンパワーメントに関心を持っていることが、彼女たちの語りや行為から理解されよう。利用者 K と利用者 F は中級・上級のメンバーで、日常的にコーチ兼経営者と非常に親しく、プライベートで遊ぶほどの親密な関係であるが、「たとえインタビュー協力者の会員が、フェミニズムに関心を持っているとしても、それはどのクラブの立場を代表するものではない」とコーチ兼経営者が語っていた。

こうした立場について考えてみると、現在の中国メディアでフェミニズムに関する議論が非常に混乱しながら発展し、多くの「派閥」が生まれ、ときに汚名を与えられるという事実が関連していると推察できる。現在の中国の SNS には、フェミニストであると自称するグループが多く、さらにそれぞれのグループの内部には、異なる意見による細かい派閥が派生し、フェミニストと自称する人たちの中にも意見が衝突し矛盾することが多いのである。そうした派閥の中には、極端な見解や攻撃的で激しい言葉を持つグループもある。

しかし、そのようなグループに対する批判は、性別平等と女性のエンパワーメントに関心を持つすべての人に対する汚名に転化している。さらに、政治的な闘争に悪用されることもある（一般的な汚名の方法の一つとしては、中国のフェミニストが外国勢力からの支援と指示を受けて国家の分断を図っていると非難するのが挙げられる）。性別平等と女性のエンパワーメントの問題に関心を持っていたとしても、外部に説明する際には、短時間で自分がどの立場であるかを説明するのが難しく、自分自身がフェミニストであると公言するのは、カミングアウトであるとして受け取られることとなる。後に、利用者 C や利用者 L は、女子ボクシングクラブのコーチが、女性のエンパワーメントに関心を持たないわけがないが、特殊な身分（例えば上海ボクシング協会のメンバーなどの公的身分）を考慮したうえで、トラブルを避けるために、はっきり自分の立場も明確に表現することができないと語っていた。合場（2013）は、フェミニズムの思想に裏打ちされた女性が身体的な力を獲得することを目指す運動や実践を、身体フェミニズムと定義している。

なぜなら、Castelnuovo and Guthrie（1998）が指摘したように、フェミニズム思想による精神的エンパワーメントだけでは、身体活動からの恩恵を獲得できないし、身体活動をしなないことによる損失を回避できないからである。また、男性からの暴力の恐怖におののき、暴力から自分の身体を守れない。しかしフェミニズムの思想を身につけていない、身体的力の獲得だけでは、スポーツや身体活動に組み込まれている男性身体の優位性、異性愛主義、同性愛嫌悪の再生産に無批判に関与してしまう恐れがある。そのため、せっかく身体活動に参加しても、その解放的な意義が弱められてしまうからである。ここで強調したいのは、身体フェミニズムは身体だけのエンパワーメントを目指しているのではなく、Castelnuovo and Guthrie（1998）が述べているように、精神と身体両方のエンパワーメントを目指しているということである。したがって、この試みは、精神と身体二元論を克服する一つの実践となる。身体フェミニズムは「女性」が主体であるが、「女性」というこのアイデンティティの単一性はフェミニストによる理論、研究、政治によって挑戦されてきた（Lorber, 2010）。なぜなら、女性というジェンダー・アイデンティティを持ちながらも、階級、エスニシティ、性的指向、年齢、障害の程度などの他の社会的地位によって、個々の女性たちが直面する経験が異なっているからである（Lorber, 2010）。身体フェミニズムは、女性を単一な存在として扱うのではなく、ジェンダー以外の複数の社会的地位によって構築されている女性の多様な経験を認めながら、どのように彼女たち

が身体的力を獲得できるのかを考察し、実践していく必要がある。[合場敬子(2013)『女子プロレスラーの身体とジェンダー:規範的「女らしさ」を超えて』. Akashi Shoten.p.204-205]

「フェミニズム」という言葉への誤解と回避態度から、「身体だけにエンパワーメントを獲得したが、精神のエンパワーメントが完全に認識されるまでは至っていない」という事実が窺い見られる。つまり、「精神と身体の両方のエンパワーメントを目指している」という身体フェミニズムの標準に満たさない状態であり、その解放的な意義が弱められてしまうのである。

「女性のエンパワーメント」が空虚なスローガンにならず、日常生活の実践を通じて実現され、そして、既に性別平等を推進している実践者も、フェミニズムへの関心を恐れずに表現できるようになることを期待しているのである。

第5節 本章の結論

本章の目的は、インタビュー協力者達の身体ハビトゥス、筆者が参与観察で観察し得たインタビュー協力者以外の会員たちとクラブのスタッフ（コーチと経営者）の言語あるいは身体表現を考察し、女子ボクシングジムにおける従来のジェンダー規範に対する変容または再生産を具体的に明らかにすることであった。結果の概要は以下のようにまとめられる。

- 1) 女性のフィットネス実践は、社会的性別構造の再現であると同時に、社会的性別規範に対する抵抗と挑戦でもあり得る。女性専用のボクシングジムでは、社会的性別規範への抵抗と挑戦が存在する一方で、社会的性別構造の複製も見られる。
- 2) 会員たちは、身体的脆弱性への対抗（身体的力を積極的発揮すること、攻撃性を回避しないこと、不自然な未発達の状態な身体状態を排除すること、女らしくない逞しい筋肉を追求することなど）や、活動する主体と性的主体としての自己認識で、従来のジェンダー規範を変容させている。
- 3) 女性の特質にかかわる身体状態の好み、女性気質を「劣等的なもの」として捉える現象の存在や、フェミニズムへの認識の不足などの事実は、従来のジェンダー規範の再生産も含まれていることを示している。
- 4) 人間は複雑な存在であり、多くの矛盾を内包している。一般的に、一人の中において、固有の性別秩序やジェンダー規範に対する反抗と同時に、その秩序への服従も観察されることもある。そのため、個々の行動に基づいて、その人を「固有の性別秩序に順応し思想的に遅れている女性」

または「固有の性別秩序に抵抗し思想的に進歩している女性」と単純に分類することは、公平性を欠くと考えられる。

第4章 総合的考察

第4章において、まずは第1節で研究の全体的なまとめを行い、次に、第2節では、本研究の総合的な考察を論じる。さらに、第3節においては、本研究の結論を詳述する。最後に、第4節で将来の研究課題と見通しについて論じ、本研究の終わりとする。

第1節 本研究の総括

本研究の目的は、中国の女子専用ボクシングクラブに関する事情を社会学的な観点で考察することであった。実際の手続きとしては、「女性専用ボクシングクラブへの選択に関する要因の考察」と「女性専用ボクシングクラブ内の性別規範の考察」という大きく二つの部分にわけて考察した。

第1章では、先行研究の検討を行い、女子専用のフィットネスジムに関する研究の到達点を確認した。これまでの先行研究では以下の3つの疑問点に答えられないことが明らかとなった。それらは、「女性はなぜ女性専用場所に運動するのか」という点、「女性はなぜ男らしいスポーツに取り組み、かつなぜ女性専用空間において男らしいスポーツをやっているのか」という点、「女子専用のフィットネス空間は女性のスポーツ参加更に女性の社会進出やエンパワーメントに対してどのような意味を持つのか」という点である。こうした疑問点について検討するために、第2章では、「女性はなぜ女性専用場所に運動するのか」という点と、「女性はなぜ男らしいスポーツに取り組み、かつなぜ女性専用空間において男らしいスポーツをやっているのか」という点について考察することを課題として設定した。

第1章では、会員が従来型のフィットネスクラブではなく、女性ボクシングジムを選好し入会に至る過程で影響を受けた要因を、質的データ分析を用いて検証することが目的であった。まずは、利用者Aと利用者Cの例をケーススタディの形で、二人が選択に至る思考過程を詳細に記述した。そして、インタビュー協力者全員の語りから抽出した要素を整理し、SP/EXID理論を用いて検証した。また、SP/EXID理論で解釈しきれないデータもあったため、自己効力感の理論を持ち合わせて論証した。また、この中で、女性ボクシングジムを利用するユーザーの人物像についてもある程度で特定した。

第3章では、女性専用ボクシングクラブにおけるジェンダー規範の考察をするため、まずはインタビュー協力者達の身体ハビトゥスとその表現を整理し、そして、第1章を踏まえて得られた選択に影響する要因や、筆者が参与観察で観察し得たインタビュー協力者以外の会員たちとクラブのス

タッフ（コーチと経営者）の言語あるいは身体表現も含んで、総合的に分析を行った。

第2節 本研究の総合的考察

第1項 女性専用のフィットネス空間の存在意義——第一性としての女性達

本研究の作業課題について質的データから分析を重ねた結果、女性専用のフィットネス空間の存在意義について以下のように理解することができる。

(1) 快適な技術習得環境

女性限定の環境は、ある程度で「快適な雰囲気（快適な技術習得環境）」の形成に積極的な影響を与えていることが明らかとなった。女性専用のスポーツ施設は、女性がスポーツに積極的に参加することを促進する上で一定の役割を果たしていることを示しているといえる。呉（2015）によると、一般的な女性がスポーツに参加する意欲に影響を与える2つの要素がある。一つは「異性の視線に対する不安感」、もう一つは「運動中の身体能力による自己否定感」である。単一性別のボクシングスポーツ空間のコンセプトは、これらの要素に対して良いフィードバックを提供していると指摘されている。この点について本研究で得られた分析結果と突き合わせて考察する。

第一の点について、本研究の対象者は、異性の視線を気にしないと述べているものの、他人の性的目標にはなりたくないとも感じている。つまり、性的な意味をもたない異性の視線は彼女たちを不快にさせることはなかったということになる。たとえ不快な状況に遭遇したとしても、彼女たちはそのためにスポーツへの参加を中止することではなく、これらの干渉をできるだけ我慢したり無視したりする。こうした外部の不利な要因が目標達成を妨げないようにする行動は、自主性の表現であるといえる。また、同時に考えられることは、すべての男女混合のフィットネス施設が女性専用のスポーツ施設ほど安心できるわけではないという点である。このような状況下では、単一性別の環境が、自分が他人の性的目標になる心配がない安全な環境を提供していることが明らかである。利用者Cの言葉によれば、男女混合の施設では非常に尊敬し、感心する男性コーチにも出会ったが、典型的な「有害な男らしさ」を持つ男性コーチにも出会ったことがあり、後者は僅かの例外かもしれないが、このような不快な状況に遭遇するリスクを最小限に抑えるためには、単一性別の環境がより良い選択肢であると述べていた。結局のところ、不快感を与えるのは「男性」ではなく、家父長制の性別文化の束縛であるといえよう。

第二の点についても、本研究は同様の結論に至っている。女性限定のスポーツ空間が女性により

良い技術習得環境を提供する理由の一つは、「女性を基準として設定する」ことである。競技成果に重点を置いたボクシング運動の視点は、男性を基準として設定し、女性の文脈での発展が疎かにされ、挫折感を覚える可能性がありうる。というのも、パンチが十分に重いか、男性のように力強いかどうかというように焦点を当てることになるためである。女性も「力がある」という主張もあるものの、これは一部の女性を特別視するだけで、その他多くの女性は結局男性ではないと認識し、内面化された無力感、自己放棄、自己否定、心身の疎外を感じる可能性がある。

呉（2015）によると、多くのコーチがこのような男性的な競技で勝利を収めるために、女性のトレーニング方法を高度に男性化し、その生理的な特性を取り除くことが他の女性を圧倒するのに役立つと考えている。これは現代の多くのスポーツ項目での重点的なトレーニング方法の一つである。しかし、このように「女性を女性として扱わない」トレーニングは、性別文化に対して本当の意味での革命や転換をもたらすものではない。このような女性のトレーニングに対する態度は、女性を肯定することが男性と「同じくらい」良いことであるとする限りにおいてのみ意味をもち、その結果、多くの女性がスポーツに触れ、成果を上げる際に性別認識との乖離を生じさせることになる。

この種類の報道は、最終的にほとんど「女性は努力と忍耐を持っていれば、男性と違いはなく、職場で性別の制約を突破できる」という論調に焦点を当てています。このような成功体験を強調することは、一見性別ステレオタイプを打破し、性別差を解消するように見えますが、実際には性別の状況を個人の努力の程度に過度に帰結させることで、性別構造による個人への隠れた差別や排除を見落としやすくなります。特に女性ボクシングに関する議論が選手の競技能力に重点を置いている場合、女性の参加の目的性や実用性などの性別問題は常に運動のパフォーマンスに後れを取ります。『呉宜霏（2015）教育部性別平等教育季刊NO.73：p.37』

したがって、単一性別の環境は、異なる形の「力」を示す可能性を見るのに役立つ。男性がいない環境は、女性が自己を深く探究し、身体体験とボクシングの運動が織りなすさまざまな可能性を開拓するのに有利である。つまり、このような環境では、女性は男性によって設定された基準に基づく「第二の性」ではなく、基準自体として運動を経験することとなる。この過程は、女性が客体から主体へと変化することを体現しているのである。

(2) 「心の帰属組織」のような存在。

また、この場所がフィットネス空間であるだけでなく、一定の社交機能も果たしていることが示される。ボクシングは「一人のスポーツ」と言われているが、一部の女性はボクシングジムを通じて「心の帰属組織」を見つけているようであった。たとえば、利用者 I がジムについて話す際によく使う言葉は「私たち」である。彼女は「私がいるジム」ではなく、「私たちの地」と表現される。また、利用者 G は「最初にここに体験クラスに来たとき、どうして授業中ずっと笑っていられるのかと思って、結局ここに残ることにした」と述べていた。同じ年齢や状況の人々が一緒に運動し交流する雰囲気は大切である。これは、女性専用のボクシングジムが存在する心理的基盤でもある。重要なのは組織と運動の両方であり、どちらか一方が欠けてしまってはいけない。自己防衛術を学ぼうとするモデルや医者、仕事のストレスを解放したい外資系企業の OL、離婚届を提出した直後から 5 年間続けて通っているシングルマザーなど、ボクシングジムに足を踏み入れる女性には、それぞれにストーリーがあった。こうした最も攻撃性の強いスポーツの中で、最も柔らかに繊細な心持が観察されたのである。

第 2 項 女性専用のフィットネス空間の限界その 1——現実に（ある程度で）妥協する産物である 女子ボクシングジム

「ジムの経営が元々も難しく、そういう潜在的な半分の会員（男性会員）を自ら放棄する経営方針なのではないか」という指摘は根本的に成立しないと考える。実際には、このようなフィットネス空間は「潜在的な顧客の半分以上を放棄した」のではなく、「そもそも会員にならないであろう潜在的な顧客を開拓した」のである。単に男女混合のジムから顧客を奪うことを目指しているわけではない。さらに、優れた女性コーチが戦術や技術的な側面で男性会員に指導することや、体重が近い男性会員に対する練習相手になることもあるが、客観的には生物的に体重と力の差があるため、女性コーチが男性会員に練習を提供するのは難しい。男性コーチ N と女性コーチ M の語りから、そうした事実が確認できる。

うちのジムのボスは非常に実力のある女性格闘選手で（張偉麗と相弟子であったが）、彼女のスキルが高いといえるものの、男性会員の練習相手になるのはやはり難しい。（コーチ N）

ボクシングは非常に公平で、そうでなければなぜそんなに厳密に階級を分けるのか...（中略）...現

実を考慮したうえで、純粋な女性専用のボクシングジムを作るほうが（いいと思う）。（コーチ M)

経営者との雑談の中に、「女性トレーナーとして男子会員を吸引するのはやはり難しい」という話があった。それは、Miller（2022）が「男子コーチは女子チームを指導するのはよく見られているが、女子コーチが男子チームを指導する機会は少ない」と指摘していた観点を支持するものである。

この不平等をさらに激化させるのは、女性が男子アスリートのコーチを務めることが稀であるということだ。2001 年、NCAA の報告によると、女性コーチは全ての大学男子スポーツチームの 3% を占めるに過ぎず、大学の男子バスケットチームでは女性コーチはなかった。2008 年、この数字がさらに減少し、男子大学スポーツチームのわずか 2% が女性によって指導されていることを女性スポーツ財団が発見した。2015 年までに、この傾向は少し逆転したが、大学男子スポーツチームを指導するヘッドコーチの中で、女性は 4% 未満だった……VanDerveer コーチは「女性コーチは男子バスケットボールで機会を得ておらず、（女性コーチは）女子バスケットボールからも追放されつつある……これは性差別だ……スポーツは男性の最後の保護区……私たちは依然として、セクハラと差別が存在する世界に生きており、私たちの文化はまだ長い道のりを歩む必要がある」と嘆いていた……男子バスケのディレクターが、女子チームのヘッドコーチの仕事を引き受けることができますが……女性は必ずしも機会を与えられているわけではありません。

「Miller, A. L. (2022). *Buying in: big-time women's college basketball and the future of college sports*. Rowman & Littlefield. p.128-133（筆者が英文より訳した）」

つまり、「女子専用」は現実には妥協する結果の産物ではないかと考えられる。女性専用ボクシングクラブは、「男性コーチが男女の会員をうまく指導できる一方で、女性コーチが男性会員とのスパーリングに制約がある」という現実を受け入れた妥協の結果とも見られる。

一方、これは Miller（2022）が「男性監督は男女チームを普通に指導しているが、男性チームを指導する女性監督は少ない」と指摘する状況とは異なる点もある。

VanDerveer コーチによると、男子バスケットボールと女子バスケットボールのコーチングの共通点が相違点よりも多い。トレーニング、リクルーティング、試合の計画立て、研究の方法は比較可能であると VanDerveer コーチが指摘した。『Miller, A. L. (2022). *Buying in: big-time women's college basketball and the future of college sports*. Rowman & Littlefield. p.128-129. (筆者が英文より訳した)』

但し、チームの指導は技術や戦術の指導が主である一方で、本研究の対象であるボクシングは近接戦闘のスポーツであり、コーチとのスパーリングが重要なので、女性コーチが少ない理由としては同一であるとはいえないだろう。

この事実によって、女性コーチの選択肢が制限され、キャリアの発展が制限される可能性も見られるのではないか。だからこそ、女性がボクシングに参加し、女性のためのボクシング空間で運動することは現実的な意味を持っているのではないか。より多くの女性が女性専用の空間でボクシングに参加することは、女性コーチへの需要を高めることになり、供給と需要の関係性から見ると、女性専用のジムを選択するのは、女性コーチのキャリア発展にある程度で貢献できると考える。

もちろん、コーチ M も、「女子専用」の特徴を活用していた。例えば、全員が女性なので、お互いに体が見られるのもあまり気にしないのでよく一緒に着替える。そのため、独立した更衣室を設置しなくても構わない。コスト削減の側面から見るとそれは女性だけの場ならではのものである。

第3項 女性専用のフィットネス空間の限界その2——「男性不在の空間を強制的に作り出すことで、女性が活動の絶対的主体となれるように支援する」という方法は持続可能か

女性専用のスポーツ空間は、男性がいない空間を作り出す形で、女性が活動の絶対的主体となることを確保しているという点で一定の意義があるが、このような外部からの支援によって取り戻された主体性が、女性が実際に自己主体性を取り戻しているとは限らないのではないか。女性がこの女性専用のスポーツ空間の外に出たとき、すなわち女性専用の空間が提供する保護がなく、男性と共にいるときにも、この主体性を失わないかが最も重要な問題となる。

例えば、利用者 J は、単に男性の視線を恐れて男女混合のジムを選ばないという考えについて、次のように自分の意見を述べている。

多くの女性はまだ自己矛盾していると思う。多くの女性は、他人の視線がどのように自分を見てい

るかを常に気にして、筋トレを行うことを恐れている... (中略) ...それは、彼女たちは自信がなく、自分が自分を先に弱者の立場に置いているからだ。もしあなたが自分を男性と同じ平等な集団の一員だと思えば (問題がなくなる)。以前、ある女性の友人が「いつ (筋トレに) 行くの? 私を連れて行ってね」とよく言ってきた。彼女は一人で行く勇気がないと言っているが、私は「何を恐れるの? 自分のことを専念するだけでいい、誰も邪魔しないよ」と言った。しかし、彼女は、多くの非常に筋肉系の男性が、トレーニングが終わった時にダンベルを投げるのを見て、とても怖くて不快に感じたと言っていた... (中略) ... (彼女の考え方は) 理解できない... (中略) ...普通でしょう? 筋トレの最後に力尽きたからだ。そしてそれでストレスも解消できるのだ。慣れれば大丈夫なのに... (中略) ...ジムに入ってイヤホンをつけ、帽子をかぶれば、誰もあなたを気にしない。みんな自分のことで忙しい。筋トレは非常に集中する必要があるからさあ、気を散らすと、怪我をしやすくなる。だから、基本的には誰かがあなたをじろじろ見るなんてことないよ... (中略) ...時々、自我意識過剰で考えすぎるだろう。(利用者 J)

利用者 J によれば、女性専用のジムは女性のフィットネス参加を促進する一定の役割を果たしているものの、一部の女性の自信を欠如させ、弱者として自分を位置づける問題を解決するには至っていない。一方で、男女混合のジムは、これらの問題から女性を避けさせることはなく、むしろ女性が自らを平等な主体として内心から位置づけることを要求している。例えば、男女混合のボクシングジムのある利用者 P は、男性との練習がより挑戦的だと述べている。

私は男女一緒の方が好きだ。女性と対戦すると、心の中で少し気が引けることがあり、パンチが重くなるかもしれないと感じる。でも、男性となら、皆もっと激しく (受け止めることができる)、私の力も一般の女性より強いので... (中略) ...トレーニング中は相手を自分で選べるので、男性と練習することを好むんだ。彼らはもっと打撃に耐えられるので、力を抑える必要がない。仕事のストレスを発散したかったりするから力を控えないから、女性と一緒にだと、相手に配慮しなければなあ... (中略) ...彼らと対戦するとき、彼らは最初に譲ると、私は大丈夫だと伝える。そして、ついていけなくなったら、少し軽くしてもらいう... (中略) ...正直に言うと相手が不満を持っているかどうかははっきりとはわからないんだ... (中略) ...今のところ皆話しやすいから大丈夫かな...あの子、正直に言うと相手はどう思っているかあまり気にしていない。自分が練習できればそれでいい。彼

が私との対戦があまり楽しくないと思えば、コーチに相談すればいいと思う。私はこのプログラムを受けるので、自分に何か向上や訓練をもたらすことを望んでいる。まずは自分のニーズを満たすことが重要だ。（利用者 P）

他者の意見に左右されず、自己のニーズに基づいて行動し、自己向上を最優先に、自分を活動の主体として位置づけることは、利用者 P の伝統的な性別秩序に対する抵抗とも見なされる。

一方、利用者 J はジェンダーが融合した女性たち^[8]と言える。即ち、自己の女らしさをなくすという代償を払っても、公的な尊厳と自由を手にする女性である。それゆえ、利用者 J は、彼女が述べた友人（および他のその友人のような女性）が経験する可能な状況は、本質的に大きく異なるかもしれない。したがって、男性の視線を恐れて女性専用のジムを選ぶ女性を「自己意識過剰」と一括りに批判することも、恐らく少し不適切かもしれない。

これらのことから、女性専用のジムは手段であり、目的ではない。現段階では一時的に女性専用のスポーツ空間を通じて女性のスポーツ参加を促進することが目的であり、性別隔離を生み出すためではない。最終的な目的は、多くの女性がスポーツ活動に参加することで、スポーツ界で失われた女性集団の発言権を取り戻すことである。この目的が実現された場合、ボクシングや格闘技がもはや男性のスポーツと見なされず、女性が心の底から自己主体性を持つようになり、女性専用という空間が存在する必要がなくなってしまうといえる。

第 4 項 性別分離主義は長期的な解決策ではない

助成だけの運動空間は、「運動空間の不足や不友好な環境により女性が間接的にそのスポーツから離れざるを得なくなる状況を減少させる」という意味を持つと同時に、「スポーツ分野における性別の隔たりを減少させる」という意味をもつ。したがって、「性別分離主義」に基づく運動空間

[8] ジェンダーが融合した女性たち(Gender Blending Females)

自己の女らしさをなくすという代償を払っても、公的な尊厳と自由を手にするために、男らしさを実践する選択をした女性たちを **gender blending females**(ジェンダーが融合した女性たち)と呼ばれる。男らしさを実践した結果、彼女たちは男性に間違えられるようになっていた。（合場,2013）は、ジェンダーを付与する過程を踏まえながら、ジェンダーが融合した女性たちと男性に間違えられたレスラーたちの経験をここで比較検討した。ジェンダーが融合した女性たちは、肯定的な経験と否定的な経験をしていた。肯定的な経験としては、男性からの性的暴力を心配せずに、安全に活動することができること、女性としてよりは男性として、より敬意が払われることであった。一方で、否定的な経験としては、女性用のトイレを使う権利を他の女性からめられたり、彼女たちが着飾ったり、化粧をすると、異性装の男性が女装をしているのだと間違えられてしまうことがある。このような否定的な経験に遭遇するが、彼女たちは男性であることに結びついている恩恵を手に入れるために、進んで代償を払う決意をしていた。

の区分は、段階的で一時的な区別であるべきである。長期的な計画となれば、性別分離の運動場は逆に性別の隔たりを拡大するだけになる。したがって、スポーツ空間における性別分離主義は過渡期にあると考えられ、理想的なビジョンとしては、「性別差異」が不平等を生まないスポーツ環境を実現することである。空間の変容から始め、スポーツ空間における既存の性別の隔たりや「女性はそんな男らしいスポーツに参加すべきではない」という性別ステレオタイプを変えるべきである。陳（2013）が言及しているように、「女性のスポーツ参加は社会構造体制の表れ」として、スポーツ空間における性別文化は、ある程度、現代社会の主流文化価値を反映している。これらの文化的文脈は社会の性別意識を形成している。伝統的価値観の中の性別不平等を変え、性別によって生じる様々な社会的格差を縮めることによってのみ、女性はスポーツ空間内外でより多くの機会と資源を得ることができるのであろう。

第5項 「規律化された身体」か「反抗の身体」

ブルデュー（2002）は、個々の能動性が発揮される過程において、個人が社会構造の規範に従い、習慣的に社会構造を維持することもあれば、行動の過程で社会構造が自己に対する束縛に気づき、新たな反省を形成し、行動を通じて主体意識を呼び覚まし、社会構造に対する個人の束縛を解体することもあると考えている。ボクシングにおける身体実践は、女性が異なる性別遭遇や状況に直面し、それが自己と社会の関係を反省し、社会性別構造を解体する契機となる可能性がある。

フーコーは『監視と処罰』において、「身体は権力の対象並びに標的として完全に発見されたのであった」と指摘し、規律・訓練は、服従させられ訓練される身体を、「従順な」身体を造り出すとについて言及している。権力、知識、性別が身体に作用し、それを制御するここ中国古代社会における「女性の足縛り」は、女性の身体に対する強制的な形成と規律化と見なすことができる。しかし、現代女性がスポーツにおいて示す身体の実践は、このような現象と同一のレベルで考察することはできない。というのも、ボクシングフィットネス領域における女性の身体実践は、多様な様相を呈し、その実践を単純に社会構造が女性の身体に対する規律化と見なすことはできないと考えられるためである。女性の社会行動者としての主体的能動性を無視してはならず、これはフィットネス運動への参加意欲、身体技術の習得過程、身体体験などに表れているといえる。女性ボクシング練習者による身体技術の習得は、社会構造と自身の身体抵抗の相互作用の結果であり、フィットネスの動機や練習レベルに基づいて、彼女たちが生み出す身体抵抗の程度は異なる。身体技術の習

得過程で権威者（コーチ）の行動を模倣するだけで何の抵抗もない場合、それは複製的（規律化された）身体実践と見なすことができる。身体技術の習得過程で主体意識に気づき、主体的なニーズから出発し、身体運動が自己にとって意味するものを感じ取ることができれば、それは女性が主体性を示す身体実践と見なすことができ、社会構造に対する個人の抵抗の表現となるのである。

第6項 従来のジェンダー規範は「固定化」されているか「緩和」されているか

ギデンズの構造化理論によれば、社会構造は人の行動に制約を与えると同時に、行動を可能にするものであるという。行動者の行動は、構造を維持すると同時に構造を変えるものであり、行動と構造の間のこの相互依存的で弁証法的な関係は、社会実践において反映される。この理論をもとに本研究で得られた知見を照らしてみると、大きく2つの観点からジェンダー規範について議論することができる。

まず、女性がフィットネス施設や種類を選択する動機は、個人の行動と社会構造（ここでは性別規範を指す）の間の相互依存的な関係を反映している。これは、社会の性別規範に無意識のうちに従う状態と、意識的に社会の性別規範に抵抗する状態の二つの状態を示している。社会性別規範に従って女性専用の場所を選択する場合は、自己の身体に自信がない、または自己意識過剰の影響で、男女混合のフィットネス場所に異性の視線に過度に敏感であり、自身のフィットネス実践を妨げるまで至って、やむを得ず女性専用のフィットネス施設を選ぶ状況に反映されているだろう。利用者Jが彼女の女性友人の例を挙げて指摘しているように、このような過度の自己意識の中には、先入観としての自己の矮小化と弱化が隠されており、自らを弱者と見なされる客体として位置づけ、それが目標達成を妨げることになっていた。これは、社会の規範や期待に従い、それらを内面化している行動として現れており、社会性別規範によって制約され、主体的能動性を発揮できない表現であるといえる。一方で、利用者Pは男女混合のボクシングジムを選ぶこともあるが、それは技術の習得を目的とし、男性のコーチや会員たちを「自分の活動の補助的存在」として利用し、自分を「活動する主体」として位置づけることで、女性の主体意識について語られていた。つまり、最も重要なのは女性自身が主体意識を持っているかどうかのである。さもないと、性別が単一の環境が一時的に女性に主体となる機会を提供しても、それが心の中から本当に主体性を持っているのではなく、その環境に依存しているのであれば、それは真の女性の権限付与や解放とは言えないであろう。

意図的に社会性別規範に抵抗して女性専用の場所を選択するケースは、「より良い技術の習得の

ため」や「女性全体の利益を推進し、女性フレンドリーな環境を促進するために女性専用の場所を選ぶ場合」に反映されている。共通する特徴は、「自己成長や女性集団の成長」に焦点を当てており、女性の自己に対する関心や、女性が主体性を持つと表現されている。この場合であれば、女性は通常、外部からの干渉によって自らの目標達成行動を妨げられることはない。例えば利用者 C は、「有害な男らしさ」を持つ男性コーチや男性会員に遭遇した時、他の策略を用いて自身のフィットネス実践を継続させていた。例えば、彼らの発言を無視したり反論したり、別のコーチ（性別に関わらず）を探したりする。つまり、女性専用の場所が存在しなくても、利用者 C は自分のフィットネス実践を制限されることはない。女性専用の場所を選ぶ理由は、一つには自分を不快にさせる「有害な男らしさ」を根本的に排除すること、もう一つは女性集団の発展に力を貢献することである。利用者 C は、自分による消費活動が間接的に女性に優しい環境の発展を促進すると考えている。これには、女性がスポーツ活動により良く参加し、女性コーチの職業発展をサポートすることが含まれる。微力かもしれないが、これは、彼女が現状を意識的に打破し、性別規範に意識的に抵抗する主観的能動性と主体性を示している。もちろん、利用者 C はまた、女性専用のフィットネス施設でも「有害な男らしさ」を完全に排除することはできないことに気付いている。例えば、ある女性コーチには、「ピンクのボクシンググローブは女々しくてかっこ悪い」といった発言がある。これは、「有害な男らしさ」が男性に固有のものではなく、男女どちらも持つ可能性のある固定観念であることを示している。排除すべきなのは、この「男性の覇権」の思想の蔓延であり、男性自体ではないといえるだろう。

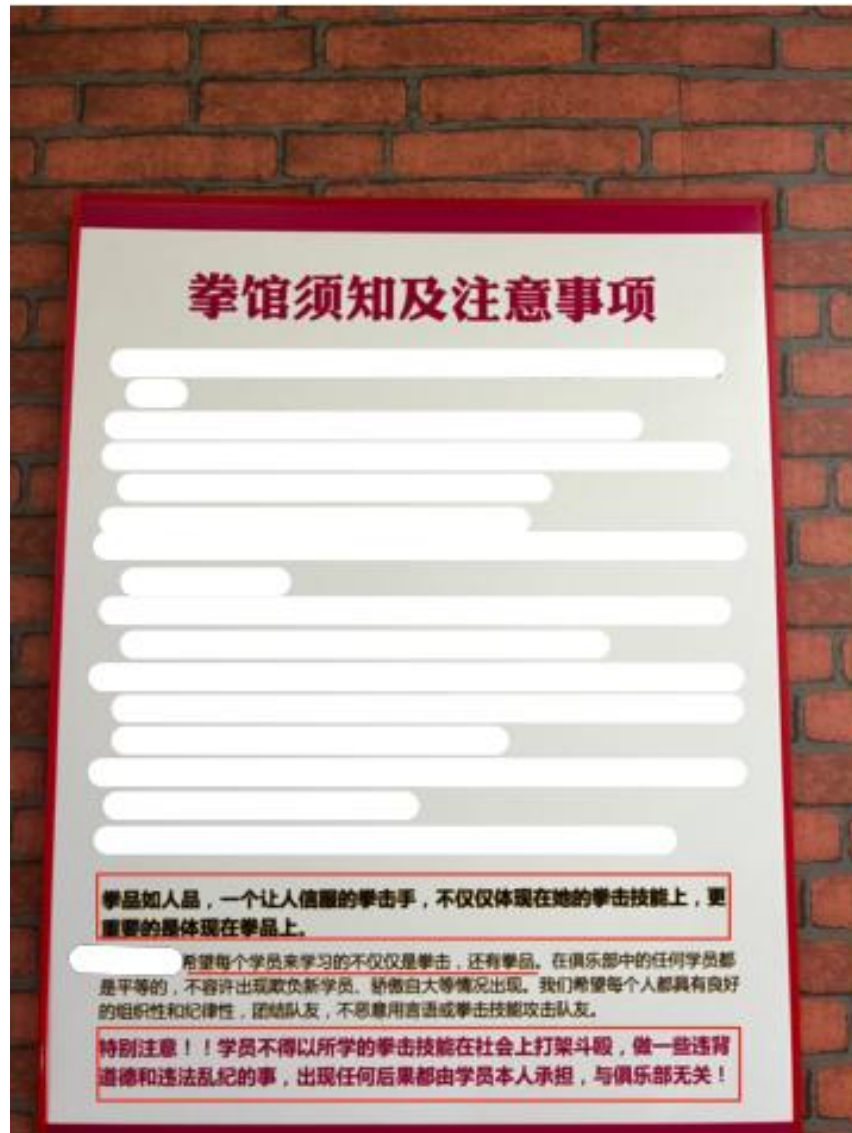
次に、女性のフィットネス実践は、個人行動と社会構造（ここでは特に性別規範）との相互依存関係を反映しており、性別規範に対する適応、不適応、抵抗という 3 種類の異なるプロセスを示しているという観点から考察する。適応プロセスは、強靱な筋肉を追求するボクシング実践で主に現れており、これにより自分が女性らしくなくなっても構わないとする姿勢や、柔軟性や敏捷性、反応力や判断力を追求するボクシング実践が含まれる。フィットネス愛好者は、「過激すぎる」「暴力的すぎる」と感じたり、「筋肉が太くなり、男性化して不快に感じる」ということはない。利用者 C は、自分の筋肉が大きくなることを望んでいた。また、不適応と抵抗のプロセスは、依然として「伝統視野の下での女性美」を追求し、痩身やボディシェイピングを目指すボクシングフィットネス実践において主に現れる。これらの人々は、自らのフィットネス行動を性別規範に合致する身体実践に調整し、これは主流の性別規範への同意と維持を意味し、ボクシングでの「全身全霊の投入」

を妨げる可能性がある。一方、一部の女性ボクシングフィットネス愛好者は、身体トレーニングを通じて、過去の性別経験や現実の性別遭遇を絶えず修正し、自己表現と伝統的な女性の特質との衝突の中で、個人の主体性を際立たせていた。彼女たちの「打撃、体力、筋肉」への追求は、社会の性別観念に対する女性の身体実践を通じた反抗を表し、反抗プロセス自体に性別の権限付与と解構の意味があると考えられる。

第7項 ジェンダーの二元構造は「固定化」されているか「緩和」されているか

社会的観点から見ると、スポーツは社会のサブシステムとして、「男性は強く、女性は弱い」や「男性は優れ、女性は劣る」といった身体に関する固定観念の形成と制御を通じて、男女の二元対立構造を維持し、男性中心の社会秩序を固定化している。しかし、スポーツにおける身体体験とフィットネス経験が女性によるスポーツにおける性別固定観念の再考を通じて、個人レベルでの性別構造の緩和を引き起こすことが発見された。スポーツ自体に性別属性はなく、スポーツ種目の性別的ステレオタイプは文化的構築によるものである。

女性がボクシングに参加することで、ボクシングというスポーツ自体に対する固有のステレオタイプを徐々に打破することができる。例えば、利用者Dは「ボクシングの最大の利点は、反応の柔軟性や敏捷性を鍛え、対応能力を強化することであり、力ではない...（中略）...ボクシングで学ぶことは、危険に直面した時に無暗に戦うためではなく、冷静さを保ち、より迅速に反応するためであり、危険からの回避（逃げること）に役立つ」と述べ、あるいは利用者Fが「ボクシングで最も難しいのは、頭脳を使うこと」といった見解を示していた。さらに利用者Jは、「ボクシングは、外見上は暴力的に見えるが、実は穏やかなスポーツであり、自分自身も非常に穏やかで、他人と争ったり喧嘩したりしない人だ」と述べていた。つまり、女性がフィットネスに投じる関与と体験は、フィットネススポーツにおける性別の二元的対立を徐々に打破し、人々のスポーツに対する性別ステレオタイプを変えることができるということを意味しているといえよう。性別の二元構造の緩和（解体）も、実際のインタビュー対象者の身体体験と反省を通じて達成される可能性がある。



※「拳の品格は人の品格を反映する」と何度も強調し(赤線で囲まれる文)，一見で暴力的なスポーツであるボクシングの非暴力性と真のスポーツ精神をより多くの人に理解してもらうことがここで見られる。

図9 壁に貼られていたジムのルール（筆者撮影）

第8項 主要研究目的以外の示唆

(1) 幸いなことに，変化は進行中

利用者Jは「私は10年以上ボクシングをしているが，当初，女性がボクシングをするなんてと言う人が多かったが...（中略）...最近，特にこの5，6年にはボクシングをする女性のはるかに増えてきて，一般の人々もこのスポーツを徐々に理解し始めているらしい」と述べていた。ボクシングや格闘技が男性のスポーツであるという考え方は徐々に矯正されてきているのである。2つの男女混合ボクシングジム男性トレーナーは，「詳細な統計はないが，わりと最近女性会員の方

が多いね、大体6対4の割合だ」という風に語っていた。女性クラブの会員が「男女混合のボクシングジムではいつも同じ体重階級の女性と練習できるわけではない」という懸念は、ボクシングというスポーツへの偏見から生じていると考えられる。少なくとも、上海では「男性ボクシングフィットネス愛好者が圧倒的多数を占める」という現象が徐々に変化していることが明らかとなった。

(2) 男女共習の独有的利点

コーチNは「時々男女の対練習をすることは実は双方に良い影響がある。たとえ男性がある程度力を抑え、女性に配慮する場合でも、それほど不公平感や不満は生じない。また、そうすると男性は自分の技を異なる角度から見直すことができる。力を抑えることで、技術や戦術の面でより多くの考える時間を持ち、戦術を向上することができる」と述べていた。これは男女共習によってある程度の示唆が与えられると考える。

(3) 「新時代の武道館」？——性別限定に問わず、時代に応じるボクシングジムなどの格闘類型クラブの共通点

女性のボクシングジムは、単なるフィットネススペース以上のものを持っており、より多くの社交的な機能を果たしていることが示されていると上述した。しかし、これが女性クラブに特有のものではないかもしれない。というのも、他の男女混合のクラブに尋ねたときも似たような回答を得たからである。コーチOは、武術があまり流行っていない代わりに、ボクシングジムやムエタイジムのようなジムが、新時代の武道館のような存在になっているのかもしれないと考えていた。女性のボクシングジムでは、授業の終わりにみんなで手を重ねて「ボクシング！」と叫ぶ習慣があり、また、コーチNのボクシングジムではプログラム直前に会員が拳を抱えて大声で「ハッ！」と叫ぶ礼がある。このような儀式は、生徒の自己鼓舞と精神高揚のためにもあり、共通の慣習を作り出すことで、心理的に同一性と帰属感を強化する効果もある。これは顧客の囲い込みを目的としたCRM管理の一環かもしれないが、コーチOが言うように、時代の変化に伴い、ボクシングクラブ/格闘倶楽部/キックボクシングクラブは武術の礼を重んじる精神を部分的に融合し、「新時代の武道館」としてのユニークな存在になっていると考えられる。

第3節 本研究の結論

女性専用のボクシングジムへの選択要因と当クラブにおける女性の身体実践と性別規範との関係についての分析と総括を通じて、本研究で導き出された結論としては、以下となる。

(1) 現段階で女性専用のボクシング空間の存在は現実的な意義を持っているといえる。特に、激しく、危険性の高いスポーツへの女性の参加を促進するために一定の役割を果たしている。ただし、それには限界もある。女子専用のスポーツ空間のような「性別隔離」はただの手段であり、目的ではなかった点が限界点として指摘できる。

(2) 女性のフィットネス実践や、女性だけのフィットネス空間への選択要因は、社会的性別構造の複製や再生産であると同時に、社会的性別規範に対する抵抗と挑戦でもあり得ると説明できる。女性専用のボクシングジムという場において、社会的性別規範への抵抗と挑戦が存在する一方で、社会的性別構造の再生産も見られたのであった。

(3) フィットネス実践における身体体験は、女性が「客体としての身体」から「主体としての身体」への転換を促し、一部の女性が以前の性別経験を反省し、個人レベルでの性別二元構造が緩和されることがある。

(4) フィットネス活動が女性の個人成長を促進するための手段となるためには、女性の主体性の中で実現される必要がある。女性専用のフィットネス施設は、男性不在の場を創出することで、一部の女性に主体性を実現する可能性を提供しているが、同時に一部の女性がこの空間に過度に依存し、真の主体性を実現できなくなる可能性もある。どのようなフィットネス空間や方法を選択するにせよ、それは受動的な選択ではなく、能動的な思考に基づいて行うべきであろう。

第 4 節 本研究の限界及び今後の課題と展望

第 1 項 本研究の限界

以下では、この研究の限界について述べている。

(1) 結局のところ、これはフィットネス範囲内のボクシングであり、プロのボクサーではないため、ボクシングスポーツ自体の状況を完全に代表するものではない。

(2) 調査地は上海で、中国で最も経済的に発達し思想が開放している地域なので、結論となる知見については普遍性が十分でない可能性がある。例えば、2 人の男性コーチが「女性会員が多いのは上海でしか見られないかもしれない」と述べていたことから推察される。

(3) 調査期間が短く、十分な質的データの収集ができなかった点である。例えば、現地調査を開始したのは 10 月 28 日で、その年の最後のアマチュアリーグが終わったのは 10 月 22 日であった。そのため、試合の状況についての調査ができなかったため、女性専用ボクシングでの女性の実践を十分に描いたとはいえない。

(4) 従来のジェンダー規範をある程度打破する研究対象であったと考えられるが、対象の特殊性から、女性だけの空間とボクシングスポーツ自体が別々にどのように作用し、それぞれがどれだけの比重を占めているかを区別するのは困難であった。

(5) 男女混合型のボクシングジムの女性会員たちとの比較検討が不足していた（ただ補足として 1 人にインタビューしている）。

第 2 項 今後の課題と展望

最後に、今後の課題と展望について言及しておきたい。前項の「本研究の限界」として挙げられるように、調査地は上海だけであったのでデータと分析が不十分な点、調査期間が短く、縦断的な調査が不十分であるなどの点を挙げた。これらに加え、ここでは、今後の課題と展望として、外在的な論点を 3 点提示しておきたい。

1 点目は、他の地域の女子ボクシングジムの実態を明らかにすることである。中国の他の地域の状況について、また日本も女性だけのボクシングジムが存在するが、日本女子ボクシングジムの状況は一体どうなっているのかを具体的に明らかにしていく必要があるといえる。それを踏まえて、日中の女子ボクシングの実態の比較研究も可能になる。

2 点目は、他の社会学的な考察視角で考察することである。本研究は質的研究手法を用いて基本

的にジェンダー規範に重きを置いたが、格差問題も含んで議論する余地があると考え。なぜなら、2人の男性コーチが「女性会員が多いのは上海でしか見られないかもしれない」という指摘して点や、グーグルマップを用いて東京都の女性専用ボクシングクラブを調べると港区に集中しているという結果、コーチOによる「多分会員はお金もあって暇もある人らしい」という指摘から、地域の格差、女性内部の格差や社会資本等の問題も視野に入ってくることが示唆された。そのため、質的調査に加えて、格差との関係を浮かび上がらせる項目を取り入れて量的調査で議論できると考える。

3点目は、男女混合型のボクシングジムとの比較研究をすることである。例えば、利用者Lによると、彼女は仕事取材用の観察でいくつかの男女混合型ボクシングジムを訪れていた。その中での興味深い発見の一つとして、そこにいる女性は「異性の視線を気にする」と「気にしない」の二つに分けられるというものであったが、「異性の視線を気にする女性」グループはさらに異なる身体戦略に基づいて二つのグループに分けられるという。一つは行動が制約され、リラックスできず、自分の能力を制限することになるグループである。もう一つは「男性に劣らないことを証明する」ためにより積極的な行動を取るグループである。利用者Qの回答もこの利用者Lの主張を支持する語りとなっており、「男女混合のボクシングジムなどのスポーツ空間で運動する際、異性の視線を気にしますか」という質問に対して、利用者Qは「気にするし、女性も力があることを証明したくて、より一層訓練に励む」と回答していた。利用者Lによれば、これら二つのタイプはどちらも異性がいることによって「不自然な状態」になっているが、後者はかえって潜在能力がより刺激されているように見える事例であった。

では、このような「不自然な状態でありながらより多くの潜在能力を発揮する」状況をどう捉えるべきか。残念ながら、男女混合型ボクシングジムへの調査はただの補足としての記録に留まっているため、観察データとしては十分に蓄積されておらず、この現象を自ら観察し得ることはできなかった。したがって、男女混合型ボクシングジムやジムについて、より深い長期的な比較研究を行うことが、新しい研究の方向となり得るであろう。

以上が、本研究を踏まえた、今後の課題と展望である。今後、これらの課題に取り組んでいくことにより、女性の身体とスポーツの関係をさらなる解明へと貢献することができると考える。

参考文献リスト

- 合場敬子 (2013) 女子プロレスラーの身体とジェンダー:規範的「女らしさ」を超えて. Akashi Shoten.
- 阿部慎平 (2012) 「男らしさ」からの解放 もう「男らしい」なんて言わせない! 土屋礼子ゼミジャーナル vol.2 私たちの「第三次性徴期」第1回 <https://www.waseda.jp/sem-tjournal/3rd-1.html#201011>
- IDEAS FOR GOOD 編集部 (online) 「男らしさ」って何? どこから来た? 【みんなに関わる「男性性」のはなし。イベントレポート】 <https://ideasforgood.jp/2020/10/13/masculinity-event-report/>
(アクセス日: 2024年1月5日)
- 飯田貴子 (2003) 新聞報道における女性競技者のジェンダー化—菅原教子から檜崎教子へ—, スポーツとジェンダー研究, 1, 4-14.
- 上野千鶴子編 (2001) 『構築主義とは何か』 勁草書房.
- 江原由美子 (2001) 『ジェンダー秩序』 勁草書房.
- 加藤清孝. (2009). 女性専用フィットネスクラブ選択へ影響を及ぼす要因の質的研究. スポーツマネジメント研究, 1(1), 5-18.
- スポーツ庁 (2019) .令和元年度「スポーツの実施状況等に関する世論調査」. https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/houdou/jsa_00030.html
- 平川澄子 (2006) スポーツとジェンダー研究の立場から-身体ジェンダー化を増幅するスポーツ・コマースシャリズム. スポーツとジェンダー研究, 4, 47-48.
- 谷口雅子 (2007) スポーツする身体とジェンダー. 青弓社.
- 天童睦子 (2015) 知識伝達とジェンダー研究の現代的課題: フェミニズム知識理論の展開をふまえて. 宮城学院女子大学研究論文集, (121), 1-15.
- Fitness Business 経営情報誌 (2007) フィットネスクラブ業種トレンド報告 (一般社団法人日本フィットネス産業協会 FIA『フィットネス産業基礎データ資料 2005』掲載のデータに基づいて作成): 8. https://fitness.ismcdn.jp/common/files/data/pdf/trend_2007.pdf
- ミッシェル・フーコー. (1977). 田村淑訳 『監獄の誕生 監視と処罰』 新潮社. 142-143
- 水野英莉 (2007) 『サーフィンとスポーツ体験のエスノグラフィー—ジェンダー・ローカリティ・コミュニティ』 京都大学 博士論文.
- 森康司 (2006) スポーツ実践とジェンダー観—大学生調査から—, 人間科学共生社会学, 5, 77-88.
- 諸橋泰樹. (2009). メディアリテラシーとジェンダー: 構成された情報とつくられる性のイメー

ジ. (No Title):89, 102

ALLEN-COLLINSON.J., & OWTON.H. : 2015 Intense embodiment: Senses of heat in women' s running and boxing. *Body & society*, 21(2), 245-268.

Bordo, Susan. 1993. *Unbearable weight: Feminism, Western culture and the body*. Berkeley: University of California Press.

Craig, M. L., & Liberti, R. (2007). " 'Cause That's What Girls Do" The Making of a Feminized Gym. *Gender & Society*, 21(5), 676-699.

Collins, Leslea Haravon. 2002. Working out the contradictions: Feminism and aerobics. *Journal of Sport & Social Issues* 26 (1): 85-109.

Cahn, S, K. (1994). *Coming on strong: Gender and sexuality in Twentieth-Century women's sport* . Cambridge, MA: Havard University Press.

Dworkin, Shari L.(2001). "Holding back" : Negotiating a glass ceiling on women' s muscular strength. *Sociological Perspectives* 44 (3): 333-50.

Dworkin, S. L. (2003). A woman' s place is in the... cardiovascular room?? Gender relations, the body, and the gym. *Athletic intruders: Ethnographic research on women, culture, and exercise*, 131-158.

Gimlin, Debra L. 2002. *Body work: Beauty and self-image in American culture*. Berkeley: University of California Press.

Hargreaves, Jennifer. (1994) . *Sporting females: Critical issues in the history and sociology of women' s sports*. New York: Routledge.

Hart, E. A., Leary, M. R., & Rejeski, W. J. (1989) The measurement of social physique anxiety. *Journal of Sport and Exercise Psychology*., 11: 94-104.

Kim, C. W. & Mauborgne, R. (2005) *Blue ocean strategy*. Boston, MA: Harvard Business School Press.

Lenskyi, H. J. (1994). Sexuality and femininity in sport contexts: Issues and alternatives. *Journal of Sport and Social Issues*, 18(4), 356-376.

Lewis, R., Sharp, E., Remnant, J., & Redpath, R. (2015). 'Safe spaces' : experiences of feminist women-only space. *Sociological Research Online*, 20(4), 105-118.

MCNAY,L(1991)The Foucauldian body and the exclusion of erience. *Hypatia*, 6(3), 125-139.

Klein, Alan M. (1993). *Little big men: Bodybuilding subculture and gender con-struction*. Albany: State

- University of New York Press.
- MacNevin, A. (2003)Exercising options: Holistic health and technical beauty in gendered accounts of bodywork. *The Sociological Quarterly*,44(2),271-289.
- MENNESSON.C(2016)Hard women and soft women:The social construction of identities among female boxers. *International Review for the Sociology of Sports*,35(1),21-33.
- Marinescu, L. G., Sharify, D., Krieger, J., Saelens, B. E., Calleja, J., & Aden, A. (2013). Be active together: supporting physical activity in public housing communities through women-only programs. *Progress in Community Health Partnerships: Research, Education, and Action*, 7(1), 57-66.
- Morse, Margaret. (1987-1988). Artemis aging: Exercise and the female body on video. *Discourse* 10 (1): 20-53.
- Markula, P. (1995). Firm but shapely, fit but sexy, strong but thin: The postmodern aerobicizing female bodies. *Sociology of sport journal*, 12(4), 424-453.
- MARKULA P. (2003). Postmodern aerobics : Contradiction and resistance in SPC [M] //BOLIN A, GRANSKOG J. *Athletic intruders : Ethnographic research on women, culture, and exercise*. New York : State University of New York Press, 2003 : 71
- Lloyd, Moya. 1996. Feminism, aerobics and the politics of the body. *Body and Society* 2(2): 79-98.
- Maguire, J., and L. Mansfield.(1998). “No-body’ s perfect” : Women, aerobics, and the body beautiful. *Sociology of Sport Journal* 15 (2): 109-137.
- McDermott, L. (2000). A qualitative assessment of the significance of body perception to women’ s physical activity experiences: Revisiting discussions of physicalities. *Sociology of sport journal*, 17(4), 331-363.
- Miller, A. L. (2022). *Buying in: big-time women's college basketball and the future of college sports*. Rowman & Littlefield.p.128-133
- Ostgaard, G. D. (2006). *FOR “Women Only” : Understanding the cultural space of a women’ s gym through feminist geography* (Doctoral dissertation, Bowling Green State University).
- Pavlidis, A., & Connor, J. (2018). Men in a ‘women only’ sport? Contesting gender relations and sex integration in roller derby. In *Sex Integration in Sport and Physical Culture* (pp. 239-252). Routledge.
- SHILLIN.C, BUNSELL.T(2014)From iron maiden to superwoman:The stochastic art of self-transformation and the deviant female sporting body. *Qualitative Research in Sport, Exercise and Health*,

- SABISTON, C. M., McDonough, M. H., Sedgwick, W. A., & Crocker, P. R. (2009) Muscle gains and emotional strains: conflicting experiences of change among overweight women participating in an exercise intervention program. *Qualitative health research*, 19(4), 466-480.
- Vandermeij, A. (2017). "It's so much better playing with all girls": examining gender politics within a women-only association football club in Melbourne (Doctoral dissertation, Victoria University).
- Wacquant, Loic (2004). *Body & soul*. New York: Oxford University Press.
- 布迪厄 (ブルデュー) . (2002) 男性統治. 海天出版社. 23-30.
- 波伏娃 (ボーヴォワール) . (2011) 第二性 [M] . 上海: 上海訳文出版社. 37
- 部義峰, 周武, 趙剛ら (2015) 社会分層視域下中国居民体育参与、偏好与層化研究. *中国体育科技*, 51(5), 78-93.
- 北方網 (2011) . 美媒: 女拳擊手換裙裝引發激烈爭. <http://news.enorth.com.cn/system/2011/12/21/008353777.shtml>.
- 陳怡君 (2007) . 男女場地不均 運動場上見真章. 臺灣立報. <http://www.lhpao.com/?action-viewnews-itemid-11739>
- 陳慧卿 (2013) 運動、空間與性別: 女性優先籃球場的意涵. 國立體育大學體育研究所碩士論文.
- 戴建輝 (2014) 从誤識到職業: 女性参与拳擊項目的身体博弈. *体育与科学*, 35(01), 121-124 + 132.
- 鳳凰體育 (2015) 陝西拳擊女將笑傲亞洲之巔 男性化打法助其沖擊里約. http://sports.ifeng.com/a/20150814/44424270_0.shtml
- 顧珮姪, 林曉琳, 陶奕駿ら (2017) , 拳擊公主. *滬港經濟*, (6): 72-75.
- 吉登斯 (ギデンズ) . (2016) 社会的構成. 中国人民大学出版社. 23-25.
- 李琛 (2012) 布迪厄体育思想研探. *山東体育科技*, 34(05), 37-41.
- 廖美貞 (2004) 〈兩性平等與運動倫理〉. 《學校體育》, 14 (2) : 107-116.
- 潘郡瑤 (2015) 為什麼不能留短髮? — 談女性運動員的身體規訓. 教育部性別平等教育季刊 NO.73 : 11-13
- 孫荷花 (2019) 女孩張偉麗: “用拳頭打天下”. *時代郵刊*, (23), 22-23.
- 臺大性別與空間研究室 (1999) . 臺大校園空間性別總體檢建議報告書.
- 吳宜霏 (2015) 當女拳遇上女權 — 我的性別運動實踐. 教育部性別平等教育季刊 NO.73 : 35-43
- 熊歆 (2014) “自由”的選扞与身体的“賦權”: 論体育对女性休閒困境的消解. *体育与科学*, 34(4), 11-17

- 熊歆,王阿影. (2020) 性別身體的挑戰與重塑——健身場域中女性身體實踐與反思[J].上海体育学院學報,2020,44(1):49-58
- 學生會性別工作坊、學代會環境安全衛生委員會 (2010) 女性「憂」先使用球場.99 學年臺大新生性別季.http://99ntugender.blogspot.tw/2010/09/2010_3626.html.
- 余建良 (2009).交大借占場 球友一場難求.喀報, <http://castnet.nctu.edu.tw/castnet/article/1680?issueID=70>
- 楊清芬 (1995) .國小男生與女生的校園生活. 國立臺灣大學建築與城鄉研究所碩士論文.
- 張威克 (2000) 從傅柯的權力觀談運動中的權力現象.體育學報, 29 : 23-34.
- 張淑瑜 (2003) .臺北市國民中學性別與空間規畫之研究.國立政治大學教育研究所碩士論文.
- 鄭育婷 (2015) Ladies first : 女性優先籃球場. 教育部性別平等教育季刊 NO.73 : 30-34